赤松氏ノ部將間島河内戰死ス

〔應仁別記〕○上文ハ、六月八日ノ條ニ收メタリ、毎日義廉ノ屋形ヲ入替々々責ラレケレ共、質ヲ替レハ質ヲ替ヘテ防カレケル、朝倉ト云名將在ケレハ、甲斐々々敷要害ハナケレトモ、スヘキ様ソ無リケル、赤松内ニハ加賀國守護代間島河内ト云一族モ、櫓ノ下責寄ケルヲ、大石ニテ碎ヨト打ケルニ、冑ノ上打レテ、犬居ニ打スヘラレテ死ケル、義廉ノ内ニハ、甲斐左京亮ヲ始トシテ、究竟ノ者共數輩討殺サレテ死ケリ、今マテハ牛角ノ躰ニテ、イツ落居スヘキ𪜈見エサリケリ、○下文ハ、八月二十三日ノ條ニ收ム、

能勢頼弘

〔淺羽本系圖〕五能勢

能勢頼時 太郎、下野守、

之頼 太郎、下野守、父頼時領家督、

頼弘 源次郎、源左衞門尉、

應仁元年丁亥春、細川勝元與山名宗全有事、互搆營集兵、對陣于洛之東西、五月、發諸軍士相戰、頼弘屬勝元、於所所戰場屢勵軍功、同年秋、勝元聞大内介政弘欲率大軍入洛救山名、而逆發兵攻武衞義廉之營、是爲防政弘之軍也、頼弘於玆大奮勇力、進於先陣、而終戰死、實

頼弘近衞油小路ニ戰死ス

今年七月廿五日也、勝元甚感之、貽證狀於厥后、其詞曰、

能勢源左衞門尉同弥次郎、去廿五日、近衞油小路合戰之時、討死之條、尤以神妙也、弥可勵戰功候也、謹言、

七月廿七日　　勝元判

能勢源左衞門跡に

頼則 學歌道、嗜連歌、與宗祇善友、頼則所詠之句、見于新撰筑玖波集、

某 弥次郎、

應仁元年七月廿五日、與父頼弘同時討死、見于勝元感狀、

頼勝

○是ヨリ先、東軍、義廉ノ第ヲ攻メシコト、十一日ノ條ニ見エタリ、コノ後、義廉ノ兵火ヲ放チテ防戰スルコト、八月十六日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔重編應仁記〕四　山名方勢上洛、三寶院攻落事

○上文ハ、八月二十三日ノ條ニ收ム、京都ニテ、細川方ニハ、大内、河野ガ未上洛中ニ武衞ノ構

甲斐朝倉力ヲ協セテ防禦ス

ヲ責落サスハ、下京エノ通路安カルマシ、急キ彼構ヘヲ責ヨトテ、細川右馬頭、同下野守、武田大膳大夫、香川、安富入替〳〵テ廿日計攻ケレ𪜈、要害ハ麁略ナガラ、武衞方隨一ノ甲斐、朝倉ノ名將等防居ケレハ、責落サレス、七月廿五日、細川衆ノ能勢源左衞門頼弘、同子息彌五郎モ爰ニテ討レ、赤松カ名代加州ノ守護代間島河內守モ櫓下迄責入シニ、大石ヲ擲懸ラレ、甲冑ヲ打碎カレ忽ニ討死ス、武衞方ニモ甲斐左京亮ヲ始メ、究竟ノ兵數輩討死ス、○下文ハ、九月一日ノ條ニ收ム、

〔多古加納系譜〕範勝――定光、久松左京大夫、或左京進、又左京亮、豐前守、實者定氏之子、繼範勝之跡也、

應仁元丁亥年、細川右京大夫勝元、與其舅山名左衞門督持豐入道宗全、舅之間爲不快、於京都數年合戰、此時斯波義廉、爲山名宗全之味方、于時範勝定光父子、屬義廉之手、討細川方、阿波國住人三好玄蕃助取其首高名、同年七月四日、細川勝元之味方細川右馬助、同下野守、武田大膳大夫、同安藝守、其外香川、安富以下、其勢五萬餘人、押寄于斯波義廉之楯籠勘解由小路館、圍攻之、城中山名宗全之味方大勢強防而不陷、于時寄手次將之中、能勢

加納定光能勢父子ヲ射殺ス

源左衞門尉頼弘、嫡子弥五郎父子、先立諸軍而欲攻入于城中、此時定光上高櫓、放箭如雨、元來精兵之手足強弓也、寄手若干被討、能勢父子又被射落死、後軍辟易引退虎口、遠攻送數月、○本書、頼弘ノ戰死ヲ四日ノコトトナセドモ、今姑ク應仁記、能勢系圖ニ從フ、

是月、阿波大膳、金剛峰寺ヲ襲フ、橋口忠藤、僧徒ト共ニ大膳ヲ擊テ、之ヲ殺ス、

大門口ヨリ競ヒ登ル寺院ノ寶物ヲ掠奪セントス

〔密宗年表〕下 應仁元 七月、阿波大膳、以大勢自大門口競登、爲奪取寺物也、時橋口隼人正父隼人、享德三年討死、忠藤在合、誘若大衆多人數、馳付合鎧討捕、乘勝各追殘黨到札場、得甲士五十六級、仍自集會中及沙汰衆遣感狀褒之、山史、

此後廢絶ス

八月大 甲午朔 盡

一日、甲午、八朔ノ贈遺ヲ停ム、

〔後法興院政家記〕二 八月二日乙未、晴、傳聞、公武御憑之儀停止云々、公武御憑停止事、

〔宗賢卿記〕文明四年八月大一日、八朔之儀公私停止、亂以後如此、

後藤胤明、肥前福母村ヲ武雄社ニ寄ス、

〔武雄社文書〕○佐賀 下 文書纂所收

肥前之國福母之村之內田地二段、當社御神前奉寄進所也、仍執達如件、

應仁元年丁亥八月一日

武雄大宮司殿

福母村之內胤明□御寄進田地坪付之事、一段宮薗、一の間一反、□町一の間、

已上

應仁□(元)年丁亥八月廿三日 盛門(花押)

河副伊豆守

武雄殿

〔武雄社本紀〕下 寄附田園

神供田幾許

在杵島郡福母村、應仁元年八月一日、後藤讃岐守胤明所寄也、家司河副伊豆守盛門畝籍有之、

西軍政弘ノ上洛ヲ待ツ

三日、丙申、大內政弘等、兵庫ヲ發シ、本庄山ニ戰フ、明日又、小清水ニ戰フ、

〔大乘院日記目錄〕三 八月三日、大內立兵庫上洛云々、

〔經覺私要鈔〕六十六 八月四日

一、京都事種々浮說のミまて無實說、只相待大內介上洛、可合戰云々、是武衞方說也、

〔萩藩閥閱錄〕四十五ノ二 三浦又右衞門

八月三日、攝津國本庄山、○有馬郡ニ本庄村アリ、又翌日越清水以下ノ事ハ、各其條アリ、翌日越清水、廿九日帝都、敵陣搆加茂面、九月一日同搆花坊、五日同所、十八日東山、十月四日北小路室町等、於彼所々合戰之時、被官人數多太刀討分捕被疵之條神妙也、弥可抽忠節之狀如件、

應仁元年十月十日 大內政弘 判

仁保弘有

仁保（弘有）上總介殿

〇是ヨリ先、政弘ノ兵庫ニ着セシコト、七月二十日ノ條ニ見エタリ、コノ後、難波水堂ニ戰フコト、本月十日ノ條ニ見ユ、並ニ參看スベシ、

八日、辛丑、是夜、六角高賴、自ラ其第ヲ火ク、

〔後法興院政家記〕二

八月九日壬寅、晴、傳聞、去夜六角宿所令自燒云々、山名一揆也、

野田泰忠

九日、壬寅、勝元。野田泰忠等ニ命ジ、西軍ノ京都ヨリ攝津ニ赴キテ、大内政弘ヲ迎ヘントスルモノヲ遮斷セシム、是日、泰忠、攝津神内山ニ陣ス、

〔別本前田家所藏文書〕

野田彈正忠泰忠軍忠事（〇中略、全文ハ、正月十五日ノ條ニ收メタリ、）

西岡中脈衆芥川入江

一、大内新介上洛之時、爲京都之御敵迎罷下之由、就有其聞、可相支之旨、被仰付西岡中脈衆之間、八月九日、陣取攝津神内山、芥川、入江、（〇以上三處共ニ三島郡ニアリ、）相供致忠節事、（〇中略）

右所々忠節大概注進如件、

文明六年三月日

一見了（勝元）判

末武弘春ノ戰死

十日、癸卯、政弘ノ兵、攝津難波水堂ニ戰フ、

〔萩藩閥閲錄〕八十二　末武與五郎

法泉寺殿（政弘）御上洛之路次、於攝津國河邊郡難波水堂、應仁元年八月十日合戰之時、舍兄大夫三郎弘春討死畢、（〇下ノ同御在京云々以下ノ事ハ、各其條アリ、）同御在京留守、文明三年正月一日、於長門國阿武地福鄉合戰之時、親父左衞門大夫氏久、舍兄孫三郎延忠、同彌五郎幸氏兩三人、於一所討死畢、就中爲日田郡玖珠郡敵對治差遣處、去年十一月七日、於玖珠青內山合戰之時、太刀討高名數ヶ所被疵（太刀疵、刀疵、鑓疵、矢疵）處、郎從（金田三郎五郎）落合、加防戰之力、扶身命云々、家人僕從等、同被疵之條神妙、旁以勳功感悅無極之狀如件、

明應八年正月廿五日　（義興ノ）判

末武左衞門大夫殿（氏久）

末武氏久

末武大夫三郎弘春（氏久嫡男）

始犬法師丸

應仁元年八月十日、於難波水堂討死、二十二歲、

○コノ後、政弘ノ軍入京スルコト、二十三日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

前東福寺住持元作文溪寂ス、

〔扶桑五山記〕五山城州慧日山東福禪寺 住持位次 百六十世、文溪、諱元作、自聖一八世、應仁元八月十日寂、同聚、○五山傳ニ八、塔同聚院トアリ、

十五日戊申、石清水放生會ヲ延引ス、

〔續史愚抄〕三十九後土御門院上 應仁元年八月十五日戊申、放生會延引、秘抄、

○コノ後、石清水放生會ヲ追行スルコト、十一月十五日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

義政、百韻連歌會ヲ行フ、

〔愚句〕○後鑑百十九義政將軍記附錄九所載 八月十五日夜、人々百韻連歌し侍しに、

今代をいのる君がまに〳〵
おさまれと思ふねがひやみちひろく
木かげもしばしすみかとぞなる
かへるさをわすれてぬる花のころ
志たふかひあき袖のうつり香
夏きてはかふるならひの花ごろも
松はあを葉の色もかくれは
たへ〳〵にさくやこのまの山ざくら

十六日己酉、西軍、村雲ニ出デ戰フ、近衞鷹司諸氏ノ第、兵燹ニ罹ル、

〔山崎文書〕○但馬

去年八月十六日、於村雲合戰時打太刀云々、尤神妙候、仍播州完粟郡三方東隨心院領內五分壹事、爲恩賞且相計候、彌可致忠節候也、謹言、

應仁貳

三月廿日　宗全(山名持豐)（花押）

與布土又三郎殿○持豐、又三郎ノ功ヲ賞シ、播磨三方東ノ地ヲ授クルコト、應仁二年三月二十日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

〔後法興院政家記〕二

八月十日癸卯、自早旦小雨下、申刻以後止、京方有火事云々、

十三日丙午、早旦雨灑、入夜又下、晩景○中略京方有火事云々、

十五日戊申、晴陰、入夜明月殊勝々々、及曉更京方有火事、

義廉ノ兵火ヲ放ツ

十六日己酉、晴、未刻許京方有火事、後聞、家門以下自武衞方亂入燒拂事、家門幷鷹司家門、大館宿所等燒失云々、自武衞方亂入燒拂云々、時刻到來、言語道斷次第也、鷹司家門此間彼在所ニ居住云々、今日之躰臨期見苦云々、不可說々々々々、天下安危於于今者難休歟、侍共及晩罷下、今日之式無是非云々、

十七日庚戌、晴、京方有火事云々、昨日上京有合戰云々、

誓願寺火ク

十九日壬子、晴陰、晩景風吹、自如意寺賜狀、進愚報了、家門炎上事被相訪了、

〔大乘院日記目錄〕三　八月十五日、誓願寺炎上、於本尊ハ奉取出云々、

十六日、陽明、鷹司兩堂燒失、

梶井西坊火ク

〔梶井義承准后御入寺記〕（應仁元年）同八月十六日、門跡（梶井）近邊、軍勢亂入ﾉ西坊炎上、○義承ノ大原南坊ニ入リシコト、五月二十六日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

〔華頂要略〕（頭書）百四十一諸門跡傳二　延曆寺　圓融坊

應仁元年、梶井宮燒亡、在舟岡山東犂鼻、自元弘至今年、爲宮御所云々、此所持佛堂ヲ號性金剛院、

十八日、辛亥、御靈祭ヲ停ム、

〔續史愚抄〕三十九後土御門院上　應仁元年八月十八日辛亥、無御靈祭、親長卿記追、

土岐成頼六角高頼山名教之等陣地ヲ移ス

西軍火ヲ下京ニ放ツ

二十日、癸丑、東軍ノ諸將、義廉ノ第ヲ圍ムモノ、大內政弘ノ入京セントスルヲ聞キ、營ヲ火キテ退ク、

〔宗賢卿記〕八月廿日、予宿所炎上、敵方武衞方軍勢、數多可取卷之由風聞之所退之間、敵方依可亂入自放火也、予宿上、大內新介就上洛、佐々木京極以下引陣東山定法寺內宰相律師忠助局、予弟也、今日花山院、忠歷西園寺、實遠葉室亞相、敎忠中御門宰相、宣胤松木、宗綱在貞卿、在長、、、在盛、、、淨居庵、普勸寺、淸和泉守貞秀等燒亡、重出如何廿二日、淸和院、淨花院、廣橋中納言總光宿所等炎上、○花山院、西園寺、中御門等諸氏ノ第燒亡ノコト、應仁略記ニモ見エタリ、五月二十六日ノ條ヲ參看スベシ、

〔經覺私要鈔〕六十六　八月廿三日、天曇、風

一、自兩三日以前、土岐（成頼）ハ河原口道場ニ取陣、六角（高頼）、山名相州（教之）者万壽寺、六條道場等ニ取陣云々、又武衞者自一昨日淨花院ニ移云々、

〔後法興院政家記〕二　八月廿日癸丑、夜來降雨、巳刻許止、申刻又灑、京方有大燒亡、花山院、西園寺以下、數ヶ所燒失云々、

廿一日甲寅、朝間雨洒、京方有火事、

廿二日乙卯、陰、午刻小雨灑、京方有火事、山名方下京ニ打散、令放火處々云々、細川可及難儀歟之由有沙汰、

〔應仁別記〕○上文ハ、室町第行幸ノコトニ係ル、二十三日ノ條ニ收ム、中御門、西園寺殿ニハ、京極陣ヲ取、二條烏丸ニハ武田陣ヲ取、此内ヘト迯アツマル、山名カタヨリ、洛中コヽカシコ打破リ、放火スル事限ナシ、然間洛中往反敵味方小勢ナトニテハ、假初ニモ通者ナカリケリ、○下文ハ、義視、伊勢ニ逃ルヽコトニ係ル、二十三日ノ條ニ收ム、

○是ヨリ先、東軍、義廉ノ第ヲ攻メシコト、七月二十五日ノ條ニ、義廉ノ兵、火ヲ放チテ防戰セシコト、本月十六日ノ條ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

二十二日、乙卯、河野通春、忽那通光ニ地ヲ與ヘテ、惠良在城ノ功ヲ賞ス、

〔忽那文書〕○伊豫　坤

出作鹿子分之事、去年惠亮(良)○伊豫溫泉郡灘波村在城、爲忠賞可有知行之由、依仰執達如件、

應仁元
八月廿二日　(正岡)俚孝(花押)

通親(花押)河野執事中宮内少輔入道

忽那新右衞門尉殿(通光)○忽那系圖同ジ、

○是ヨリ先、河野通春ノ兵、勝元ノ軍ト戰ヒシコト、寛正六年九月十六日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

三種神器モ御同座

天皇ハ寢殿ニ上皇ハ泉殿ニ御ス供御勝元ヲ献ズ

二十三日、丙辰、天皇、上皇、再ビ、室町第ニ幸シ給フ、

〔公卿補任〕二 四十　八月廿三日、依同事○義就、政長ノ爭ニヨリ、兵革ニ及ベルヲ云フ、武士相分、天下大亂之間、主上々皇又以臨幸室町亭、其儀如去正月、三種神器被停申之、○正月行幸ノコト、同月十八日ノ條ニアリ、參看スベシ、

〔山賤記〕○上文ハ、正月、天皇、上皇室町第ニ幸シ給フコトニ係ル、同月十八日ノ條ニ收メタリ、猶、宮古のうちわせん國の七ゆふあとのせめしよ、あらひよものゝぬのをのりいきほひ拔ちらそひ、かさいとのこれさらあたに引わかき、あつさ弓いとみせゝかふれとりあましかれ、おれ〳〵た八月、又かの(室町)亭へまん幸御かうを申さましより、九かさきの中えを拔乃雲井とありえてゝ、はえもの乃火此さめ、洛中えなかえゝかり、烏有の地とそあまにきる、○下略

〔歷代皇記〕五　後花園院　文正二年丁亥八月、自去五月廿六日合戰始也、廿二(三)日、就同事又擾亂之間、主上、上皇相共臨幸同亭、(室町亭)御軍兵御警固、三種神器被具之、

〔宗賢卿記〕八月廿三日、行幸非常行幸、御幸室町殿也、內裏仙洞各御車、禁裏御座御寢殿、仙洞御座泉殿、御膳右京大夫(細川勝元)用意云々、

年中兩度ノ臨幸

〔後法興院政家記〕二　八月廿五日、戊午、朝晴夕陰、子刻許雨下、傳聞、主上上皇臨幸室町第事、主上、上皇(衍カ)昨日已室町第へ有臨幸云々、天下滅亡不能左右云々、抑年中兩度臨幸之儀無言語道斷、無是非次第也、悲歎之外無他、

〔大乘院日記目錄〕三　八月廿三日曉、上皇、主上御同車、俄ニ室町殿ニ行幸、
○中略
三種神器同動坐云々、

〔經覺私要鈔〕六十六　八月廿五日
一、不動寺被來、禁裏仙洞幷室町殿、細川屋形へ入申云々、實否如何、
卅日
一、室町殿、細川屋形へ入御事者無其儀、不可有動座云々、又禁裏室町殿へ入御云々、何日事哉、可被定日、近日陋巷說、一而無其實、不可說時分也、仙洞之儀未聞、式部卿親王(貞常親王)者、伏見へ入御云々、

〔應仁略記〕下　公家仁所々に暫住之事
都にハ兩陣箭叫ひ絕すして、日々に箭軍間斷なし、王城に長陣となりぬれハ、國々の諸庄園、伽藍の滅亡、盡期もなき事共也、日本ハ是神國也、この十餘年の時宜を計るに、日吉兩度の神幸も、敬信尊崇の儀なかりけれハ、闕退のみに

勝元ノ計ヲ以テ駕ヲ移ス

一年兩度ノ非道ノ臨幸

二條以北焦土トナル

て有名無實也、年々不退の放生會も、神訴相續して、每度闕如なり及ふ、年中行役の祇園の會ハ、神祇を敬ふ次第是薄し、偏に見物遊覽のさめとみえさり、大社猶かくのことし、諸社の神祇靈威を失ひ給ふ者乎、武將加護の德なきにいかん、去ぬる正月には、山名方の訴訟によつて、一天の君玉車を飛して、行幸を陣頭に勸め奉る、同き八月にハ、細川の計略に就、其禁闕を武勇に移し、鳳輦忽に武將に近つく、一年兩度非道の臨幸、先規いまた其例を聞す、聖德太子の未來記、今既に現前せり、佛法王法世間出世神驗を覆ひ、佛德を沒す、花洛の躰を告來るに、二條より上北山東西をしく燒野の原と成て、そこふる殘る所ハ、將軍の御所計也、禁裏仙洞ハ定て陣屋と成て、南蠻の異類玉殿(侵カ)戎役も、蠻夷の夜る晝警固勤むをし、陽明門、郁芳門乃至偉鑑門、達智門等四方十二の御門以下ハ、閒高六畜の臥土と成りむなしい名をさに聞さりし、殿上の小庭、內外の大床、紫宸の錦帳、賢聖の画圖、忝くも姑射山の仙居、□皇の寶闕、懸ても恐るゝ途をならに、只夢とのみこれなしはゝ、いかに况や乾坤の道なつて□陰陽を和す、日月いまた地に墮せとこそ申し傳ふるに、はのなさりたゑしなま代となりて、轉しき有樣を觀し、置事言ぞろひ慮絕、心緒を

政長三位ニ敍シテ供奉ス

吉良義眞等禁中ヲ守護ス

細川教春奉迎ノ爲メ參內ス

惑も計也、〇下文ハ、九月二十日ノ條ニ收ム、

〔應仁記〕下 東岩藏合戰幷南禪寺炎上之事

就中此日十三日、〇八月ニ又西陣ヨリ內裏ヘ切アガツテ、君ヲ奉取ト云事有ケレハ、在延引バ後悔出來ントテ、奏聞ヲ經テ、畠山尾張守(政長)ヲ所任三位、供奉ノ御伴仕リ、花ノ御所ヘ行幸ヲ奉成、因茲嬋娟タル后妃宮女ハ、不加笄珈、立車ヲ飛〆幸ニ隨、衣冠ヲツクロウ卿相雲客モ、戎衣龍駅供奉ス、雖然依御所中ノ動亂、玉輦ヲ惣門ノ外ニ留奉レバ、日午ヨリ亥刻至迄サヽヘテ、官人モ宮女モ皆小路ニヒレ臥テ憂ヘ、先皇モ正皇モ共ニ惱叡心サセ給フ事コソ淺マシケレ、〇上下略、義政、近臣ヲ逐フコトニ係ル、二十四日ノ條ニ收ム、

〔應仁別記〕〇上文ハ、大內政弘、東軍ヲ破リ、船岡山ニ陣スルコトニ係ル、次ノ條ニ收ム、自是相與人ナカリケレハ、大內新介淀、山崎マテ差上ノ由其聞アリケレハ、內裏仙洞行幸御幸ヲ室町殿ヘ成可申之由、勝元執被申ケリ、此間禁中警固ニハ、吉良左兵衞佐(義眞)、同上總介(義富)、赤松伊豆守(貞村)、名越次郎ニテソアリケル、同八月廿三日、御迎トシテ細川下野守、同五郎兄弟參上セラレケレハ、三種神器ヲ先立奉テ御幸有、供奉公卿殿上人幷武士ニハ下野守敎春、弟五郎、帶甲冑御先打也、御陣ニハ吉良兩人、赤松伊豆守、名越次郎等、非常ヲ誡テ候、猶內裏御留主爲警固吉良一族、幷赤松土佐守、同宮內少輔等相殘テ、ヤウ〳〵御門ヲ守護シテソ有ケリ、室町殿ニハ、思外御叓トモニテソ有ケル、女官、局、女房達、輿ヲ醒シテ周章騷倒、翊給叓限ナシ、〇下文ハ、二十日ノ條ニ收メタリ、

官軍ヲ東トシ賊軍ヲ西トス

〔續神皇正統記〕第百四代後花園院〇中略 應仁元年、世のみされ出來て、八月ゐ、主上を伴申されて、室町殿よ臨幸、〇下略

〔興宗明敎禪師行狀〕應仁丁亥、京師大亂、師布衣葛巾、避亂於北岩藏、年七十七、耳目未衰、禪定之暇、抄書作文、發揮此道、方今天下瓜裂、以官軍爲東、以賊軍爲西、天子行在相府、陣勢以固、〇上下略

〔武家年代記〕下裏書 應仁元年 五廿(八廿三歟)、禁裏仙洞、有御同車、行幸室町殿亭、爲俄之儀之間、諸篇略儀也、

〔鎌倉大日記〕應仁元 八月廿三日、一院上皇今上行幸室町殿、因兵亂也、

〔海東諸國記〕乾 細川殿 勝元挾國王、移天皇於其陣內、大小群臣、從細川者衆、焚京都二條以北、塹而守之、相持今六年、勝元年四十餘矣、〇上下略

〔參考〕

二階堂政行花在ノ橘ヲ詠ジテ木戸孝範ト贈答ス

〔源孝範集〕

みやこはすみ侍りし比、世間みだれてしきよはなる、主上仙洞、室町殿よすみあさらを給たる比、大夫判官みえしのもとをまあり過とて、折さるよし申て橘乃えだにつけて

咲匂ふ花さちもなも君あらて誰よみえしの梢あらまし　政行二階堂

返し

ならもなれ匂ひもふろきなさけにてまふ我昔とのちれ忍もん

〔重編應仁記〕四　室町ノ亭江行幸ノ事

○上文ハ、義政、近臣ヲ追フコトニ係ル、カヽル亂中ノ武士ナガラ、又優シカリケルハ、花ノ御所ノ皇居ニテ、二階堂大夫判官政行御階ヲ罷過ケルガ、折レタル橘ノ枝ニカクナン書付送ケル、

咲匂フ花橘モ君ナラデ誰ニ御階ノ梢ナラマシ

木戸三河守孝範取アヘズ、

橘ノ匂ヲフカキ情ニテ今日ヲ昔ト後ハ忍ハン

主上是ヲ聞召サレ、叡感トゾ聞ヘケル、〇下略

勝元。秋場元明、及ビ赤松氏ノ兵ヲ攝津ニ遣リ、大内政弘ノ軍ヲ拒ガシム、政弘等之ヲ破リ、是日、入京シテ東寺ニ陣ス、尋デ、船岡山ニ移ル、

池田氏政弘ニ内通ス

〔東寺長者補任〕五　應仁元年　長者前大僧正嚴寶　八月廿三日、大内勢等一万餘人、當寺ニ陣トル、廿四日、北野ニ陣替、

〔宗賢卿記〕八月廿三日、大内新介上洛、其勢三万餘云々、爲山名合力也、則住舟岡山、

〔後法興院政家記〕二　八月廿四日丁巳、晴陰、是日、筑紫大内猛勢上洛云々、此間赤松、幷和泉守護池田等、於攝州邊雖相支、池田依令内通、大内上洛云々、

○本書、政弘ノ入京ヲ二十四日トシ、下文經覺私要鈔、亦之ヲ二十四日ノ下ニ書セリ、今東寺長者補任、宗賢卿記ニ據リ、是日ニ掲グ、

〔經覺私要鈔〕六十六　八月廿三日、天曇、風

元次男來云、自山城以状申云、大内介明日可京着云々、

廿四日、霽

一、申刻不動寺被來、内府計會間無方角、殊大内介令上洛、東寺取陣、近隣物忩

商賣停廢

赤松ノ兵河野ノ兵ト井島野ニ戰フ

之間、商賣等一向無之、偏趣首陽古跡之間、可如何哉云々、言語同斷之次第也、

九月五日、少雨下、戊辰

大內介者、船岡山ニ取陣云々、

〔陶弘護肖像贊〕〇周防　應仁元年丁亥之夏、天下大亂、太守(大內政弘)率鎭西之軍兵入洛、自任方面之寄、家父弘房驂于右矣、

〔應仁記〕下　東岩藏合戰幷南禪寺炎上之事

大內介上洛スト聞ヘケレハ、於攝津國是ヲ相支ベシトテ、時ノ守護代也ケレバ、秋場備中守元明(〇應仁別記ニハ、秋庭豐後守トアリ、)ニ赤松衆ヲ相副テ差下ス、故ニ所々ニ要害ヲ搆テ拒防ト云ヘ共、如內藤無勢成ケレバ、洪水ニ小キ堤ノ切ルヽガ如、推破テゾ上洛シケル、其時伊豫ノ河野後陣ヲ打所ヲ、赤松衆井島野猪(マヽ)(〇應仁別記ニハ、取野トアリ、)ニメ取懸テ、一合戰セシニ、先陣衆是ヲ聞テ返シ合、取籠テシタマントセシ所ヲ、一方ヘ切テ出テツ皆遁ケル、先度還橋ノ合戰ノ(〇還橋ノ戰ハ、五月二十六日ノ條ニ見エタリ、)ヲ爲勝(シスクツ)タリシ間、人皆稱美メ云、赤松衆ナレバコツ、纔ニ三百計ニテ、四五千ノ敵ニ取卷レテハ切拔(モカ)タレトアツカイケル、此時魚住被

秋場ノ兵靡披ス

池田氏大內ニ降ル

討ニケリ、(〇下文ハ、九月十四日ノ條ニ收ム、)

〔應仁別記〕(〇上文ハ、東軍、義廉ノ第ヲ攻ムルコトニ係ル、六月八日ノ條ニ收メタリ、)今マテハ牛角ノ躰ニテ、イツ落居スヘキ𪜈見エサリケリ、カヽル處ニ、山名合力トシテ大內新介政弘、筑紫中國相催テ上洛ノ由其聞在之、於攝津國可相支之由評定有之、守護代秋庭豐後守ニ國者共相添被下之、同赤松次郎衆在田、本鄕、永良下野、宇野、問島、柏原ヲ始トシテ、浦上、小寺、中村駿河守、依藤、安丸、明石等ヲ被差下、攝州猪取野ト云所マテ下ケル處、先陣阿野(河、下同ジ)四郎政通、問田、陶、杉、內藤、廣仲(弘中、下同ジ)、安富、神代ヲ始トシテ取向フ、赤松衆爰ヲ詮ト相戰ニ、大內、阿野面モフラス切テ懸ケレハ、秋庭靡崩ケリ、牛崎ヲマハサレテ、心ハ武ト云ヘトモ、赤松勢取マハサレテ大半討ニケリ、死殘者モ辛シテ播磨ヲ差テ引退ク、三浦、大多和ヲ始トシテ生虜モ多カリケリ、攝州池田ハ大內ニ降參ス、國人三宅ヲ始トシテ、大略秋庭ニ恨有テ、過半降人ニ出ニケリ、(〇下文ハ、細川教春、上皇及ビ主上ヲ室町亭ニ迎フルコトニ係ル、前ノ條ニ收メタリ、)

〔大洲舊草記〕二〇伊豫　上川村(浮穴郡廣怒田鄕大田也、)

於今度弓矢致忠節者、寒川山之事所宛行也、者早守先例、知行不可有相違之

河野通春赤松ノ兵ト奮戰ス

狀如件、

　　應仁元年九月六日　　　　　　　　(河野兵部)通生判

　　　大野殿

〔豫章記〕又應仁元年丁亥、細川右京大夫勝元、山名右衞門督入道宗全依確執、洛中大ニ亂ル事不及申、就之大內殿、河野伊豫守通春同意ニ有上洛、通春二百餘騎ニテ攝州小野原〇築山本河野家譜ニハ、小野墳トアリ、ニ付給、赤松方々衆小勢也ト見懸テ、如雲霞寄來、乍左如得蟻家靑虫ヲ、從萬方攻懸ラントス、伊豫ノ衆モ小勢ナリト雖モ、如形圍ミ、諸葛カ八陣ノ圖ヲ良取、魚鱗鶴翼ノ姿ヲ、旗一流差擧、御旗ノ役ハ志津川田中出雲守也、脫御旗ノ手ヲ、淸風ニ颯ト靡合、吉凶(脫字アラン)ヲ今日御合戰必可爲味方利運ト被申ケリ、然者漫々タル敵早無程向來、通春駒ノ足ヲ立直シ、元來大剛大力ノ大將ナレハ、御打物ハ成魯陽カ麾暮景戈勢ヲ、漢皇ノ世ヲ治給シ(ニ脫カ)勝ル、三尺ノ劔ニモ七尺三寸ノ大太刀、蜘手角繩十文字ニ廻ル大勢ノ眞中ヘ駈入テ、向フ敵ヲ不屑、相(遇)ヲ幸ト心得テ、散々ニ打給フ、太刀一打ニ二三人打臥々々戰給、誠ニ漢ノ樊噲張良、吾朝ノ致賴、保昌、可勝、弓手ニハ南式部(マヽ)大輔、妻手ニハ吳能勢、何モ不劣大力大剛ノ者共、相互ニ戰ケリ、殘ル軍兵モ生死不知ノ者共成ハ、命ヲ不惜、一所ニ成テハ別レ、別レテハ一所ニ成、半日ノ程ニ捫ニ捫テ相戰、雖敵猛勢也、傾立テ見ヘケリ、駿馬ノ兵ニ被駈立、四方八面ニ被追散、手負死人不知其數、秋風ニ木ノ葉ノ散カ如、無何方モ逃失ケリ、味方ノ者元ノ太刀場ニ歸リ、衆息次勝時ヲ咄ト擧テ、池田ノ城ニ曳籠、南式部少輔深手負、池田城ニテ無墓成ヌ、哀也ケル事共、通春モ面ニ被疵給、有上洛小町路ヲ打過給、京童見之、稱美スル事無限、此時高名一天無隱、偖十三ケ年ノ御在京也、

〇是ヨリ先、幕府、齋藤藤右衞門尉ニ、細川持久。和田備前守ニ令シ、共ニ政弘ノ入京ニ備ヘシメシコト、及ビ政弘ノ兵庫ニ着セシコト、七月二十日ノ條ニ、勝元。野田泰忠ニ命ジテ、西軍ノ政弘ヲ迎ヘントスルヲ拒ガシメシコト、本月八日ノ條ニ、政弘、兵庫ヲ發シ、所在ニ戰フコト、本月三日及ビ十日ノ條ニ見エタリ、コノ後、加茂ニ戰フコト、二十九日ノ條ニ、又政弘、池田氏叛スルニヨリ、池田城ヲ攻ムルコト、文明元年七月二十六日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

河野教通西軍ノ爲メニ海上ヲ扼ス

〔築山本河野家譜〕通宣（左京大夫）　應仁元年丁亥、細川右京大夫勝元、山名右衞門督持豐入道宗全依確執、洛中已及大亂、因茲大内政弘、河野通春、相俱ニ有上洛、通春率二百騎、於攝州小町墳、與赤松政則兵挑戰、大抽軍功、偏逞勇威、旗下士田中出雲守勘察軍機、豫知勝利、南式部少輔亦能相戰、逆敵入池田城、南式部大創、入城中終命、惜哉、當于此時、赤松之兵多戰死矣、到于如今、人稱其所曰播磨墳、通春亦蒙創、凱歌入洛、觀者太堪嘆美、功名搖動四海、〇下略

〔豫陽河野家譜〕四　通秋　應仁年中、細河勝元（右京大夫、武藏守）與山名宗全（右衞門督持豐入道）諍武威、天下立二統、暫時動亂矣、于時伊与守通春主、（前對馬守通之入道宗公嫡孫）引卒大内、中西、久枝、那賀等一族、与細河忠戰給、爰刑部（教通）主者、兼依令惡細河有私意給、相通大内政弘助山名家、下知今岡、村上、忽那、寺町、矢野、西等嶋方輩、差塞西海上、仍通細河志輩不得上洛、於于此父子卒大軍、到于攝州尼崎、大物浦等合戰得勝利、討破赤松秋場等猛兵、追地（北カ）同時入洛、度々戰功、在天下之人口、此時舍弟兵部（通生）主在京之間、同屬宗全隊下、抽諸將有大功、宗全感美之餘、自以所帶之大刀（國吉）授兵部主、可被討伐敵徒之旨被示之也云々、

〔重編應仁記〕四　山名方勢上洛三寶院攻落事

〇上文ハ、山名ノ黨、丹波ヲ攻メシコトニ係ル、六月八日ニ收メタリ、サラバ於攝州防止メヨトテ、攝州ノ守護代秋庭備中守元明ニ、赤松勢有田、本鄕、永良下野、宇野、間島、柏原、浦上、中村駿河守、依藤、安丸、明石等ヲ加ヘテ馳下サレ、要害ヲ搆ヘ戰ケレ圧、山名方ノ軍兵等、洪水ノ堤ヲ切ルコトク、押シ破テ通リケル、其時伊豫ノ河野四郎後陣ニ打ケルヲ、赤松勢井鳥野ニテ防キ戰フ、大内、河野カ先陣ノ問田、陶、杉、内藤、廣仲、安富、神代取テ返シ、眞中ニ取籠メ相戰フニ、秋庭元明防戰不叶引退キ、赤松勢モ敵ニ手先キヲ廻サレテ、魚住ヲ初メテ、軍兵大半討レケレハ、殘兵心ハ武ケレ圧、播州ヘ切拔ケ落テ行ク、三浦、大多和ヲ始トシテ、皆一所ニ取コモリヌ、攝州ノ池田ハ少勢ナレバ、大内介ニ降參ス、同國三宅ハ、兼テ秋庭ニ恨有テ、返忠シケル故、政弘ヲ防ク兵ナクテ、大内、河野ヲ始トシ、其外ノ山名勢心安ク上京ス、

〔附錄〕

〔經覺私要鈔〕（楠葉）六十六　八月廿四日、霽

一、元次男京都ヘ夜中罷上云々、

九月十三日丙子、霽

一、元次男向立野之由申之、

十六日己卯、霽、時々雨

一、楠葉新右衞門（尉脫）自立野歸了、

十一月五日丁卯

拂曉楠葉新右衞門尉京都へ罷上云々、

木造教親義視ニ從フ

義視、伊勢ニ逃レ、北畠氏ニ寓ス、

〔公卿補任〕四十二　權大納言從二位源義視　八月廿三日夜、竊沒落、後聞、赴伊勢國（北畠）敎具卿館給云々、

權中納言從二位源（木造）敎親、四十四、　八月廿三日、相伴義視卿、沒落勢州云々、

〔大乘院日記目錄〕三　八月廿三日、新大納言（義視）殿沒落、後聞、御座伊勢國司（北畠敎具）館、

〔後法興院政家記〕二　八月廿五日戊午、朝晴夕陰、子刻許雨下、今出川殿下向伊勢國司館云々、不知其子細、太以不審事也、

〔經覺私要鈔〕六十六　八月廿六日、自昨夜雨下

今出川殿大納言義視、指東被沒落云々、是前關白（一條教房カ）殿說也云々、後聞、憑伊勢守護被落、北畠（木造）中納言敎親卿御共云々、若伊勢國司所へ可有下着用歟云雜說也云々、

一、伊勢國司敎具卿、此間數日長谷寺經廻云々、何事用哉、不審也云々、

義視出亡ノ理由

〔應仁略記〕下　今出川殿伊勢の國御下向乃事、幷翌年御歸洛、付タリ多武峰合戰、一色世保（の鳳カ）生涯事、

去ぬる八月中、細川計略によつて、上に錄せるごとし、先禁裏仙洞兩殿を寶輦を勸め奉り、將軍家に移し奉て、其後今出河殿に案内を啓し奉る、同く將軍御所に入申、俄よ御纒頭事舊畢ぬ、然る上者、公方に對して、別心の御義はしまさゝるに、軍中此申事云えあるあき次第共也、たきによつて、東乃御軍より西の方へ通せる類ひたき多し、聞懸に沙汰せらるゝ事度々ふれよふ、事繁けきれ記せるにあさえを、候人一同して申樣、おそらく代靜まらん裏、都の外へ御座所を尋ね申に、伊勢の國國司の館生山（壹志郡多氣）と云所なる、內々此旨を思擇を、隱密の義を以て上聞ふ達せ、此企て神妙也と申上意なる、こきによつて十月（八月ノ誤）の初、帝都を御出、伊勢の國司の館生の山家へ入申、寂寞の閑居御本懷とれ承えたり、則上意として國中半齋（濟シ下同）の御成敗ある、是れ今出川殿御在國を助け申をと云御下知也、上意さる上者餘儀なし、國司奉行して一國平均ふ執沙汰せ、爰に當國の守護一色（義直）方今度西方と成て御敵さる間、國の守護

伊勢生ノ山ニ居ル

義政伊勢ノ半濟ヲ義視ニ付ス

勝元義視ヲ擁セントス

義視北畠教親ノ營ニ過ギリ之ト倶ニス

有名無實なりし、○中略、勝元ノ黨世保政康、強井テ伊勢ニ入部スルコトニ係ル、五月十日ノ條ニ收メタリ、今出河殿御在庄を助け申へしと云上意にて、國中半齋せらる、初めハ國司乃手打勝て世保を追出しれきとも、終ニハ世保打取て、半齋奉行を執沙汰き、連々の合戰若干の者討る、在々所々損滅きり、○下文ハ、應仁二年八月十一日ノ條ニ收ム、

〔應仁別記〕○上文ハ、二十日ノ條ニ收メタリ、今出川御所ハ、始五月廿五日ヨリ室町御所ニ御座アリケルカ、世上溟々トアル間、還御ナル、細川勝元屋形ヘ御成アレト被申ケレハ、八月廿日、御成アラントシケルニ、京極カ内多賀豐後守相與申ケリト、(レハカ)以一色伊豫守種村入道御成有ケル處ニ、御所樣ノ御事、山名ヲ御ヒイキアレハ、此御所ヲ頼入タルト被申計ニテ、其日モ暮ニケリ、廿二日、一色伊豫守ヲ以、御一所ニ御參ノ叓勝元依相與御延引ノ由御申有、御返叓ニハ、無等閑叓肝要也、唯其御所ニトコマ〱成リシ御返叓也シカトモ、同廿三日戌ノ刻ニ御所ヲ御出アリ、先北畠中納言敎親陣所中山殿ヘ御出アリ、其レヨリ武者小路ヲ東ヘ蛸藥師之辻子ヲ一條ヘ御通アリ、富小路之釘貫ハ、富樫鶴童丸持タリ、北畠烏帽子直垂ニテ、是ハ三條(實雅)内府病氣ニテ、東山ニヲハスルヲ、○實雅薨去ノコト、九月三日ノ條ニアリ、今出川殿御尋之御使ノ由被申ケレトモ、富

義視ニ從行セル者

近江坂本ニ至ル

船ニ駕ス

二十四日山田浦ニ著ス

中山田上黒津ヲ過グ

二十五日野尻ヲ過

樫不審シテ開カス、鎰ナシト申ケルニ、敎親卿兼テ用意シテ鎰ヲ以テ開カレケル、京極ヲ南ヘ、近衞ヲ東ヘ、河原ヲ北ヘ、坂元(本)ヘ御成有、御供ニハ一色伊豫守、畠山式部少輔、北畠中納言殿ノ舍弟心性院、高倉兵衞佐、同朋西阿彌計也、種村、播磨守入道、一色九郎、同三郎、矢島、那須ナト坂元衆召具、六百計ニテ參ケリ、坂本石川次郎所ヘ御成申ケリ、京都依忩劇、御臺樣坂本ヘ御忍有、御暇乞御對面御一獻アリ、御出立御膚ニ萠黃ノ練貫、上ニカチノ御小袖赤地ノ端子ノ御袴、御劔御腰物善鬼包平、藤四郎小鍛冶鳩作等被持ケリ、御船十二艘ニテ、廿四日明方ニ江州山田ノ浦○栗太郡山田村ニ御著アリ、希代ノ事有、雜掌船ニ鮓ト云魚一尺計成カ飛入ケリ、踈忽ナル者取テ海ヘ投入ケレハ、暫有テ鱸一尺飛入ヌ、周武王ノ殷紂王ト合戰ノ時、武王ノ船ニ白魚躍入ヲ、武王俯ノ以父ノ文王ヲ祭ル、角テ紂王ヲ討タリシ也、又本朝ニハ、平ノ清盛公、熊野參詣之時、舟ヘ鱸飛入ケリ、取テ被食ケリ、其後太政大臣ヲ極メ、天下ヲ掌ニ握也、如此吉例一ナラス、賴母敷ソ人々思ハレケル、山田ヨリ勢田越ニ、中山、田上、黒津ヘ御通ノ時、北畠殿被官海津カ兄福壽寺參上メ、山中ノ春日ノ拜殿ニテ御一獻アリ、廿五日、野尻(甲賀郡)ヘ御出有、多羅尾御迎ニマイル、同夜伊

ギ伊賀服部郷荒木菩提寺ニ著ス
二十九日伊勢小倭掌光寺ニ著ス
九月三日常光寺ニ著ス
六日長谷寺ヲ發ス
北畠教具來リ迎フ
聖壽寺ニ遊ブ
所在遊覽

賀服部(阿山郡中瀬)ノ荒木ノ菩提寺ニ御著有、廿六日、夜風烈吹ケレハ、

古寺ヲカリネノ旅ノ夜嵐ニ芭蕉ナラ子ト夢ソ破ル、

古郷ハ遠コソナレイト、敷猶夜アラシニ夢ヲ吹レテ

同廿九日、伊勢國小倭(壹志郡)庄之掌光寺ニ御着アリ、後ハ山林、前ハ門田之稲葉ゥチナヒキ、折シリカホニ鳴鹿モ、猶耳ニ滿ル物ハ樵歌牧笛ノ聲、眼ニ遮物ハ竹烟松霧ノ色、何レモ都ヲオホシ出ル媒トソ成ニケル、國司御頼アリテ、御下向之由有ケレハ御請、九月三日、常光寺ヘ參著ス、同六日、長谷寺(安濃郡)ヲ御立有テ、國司參上アリ、軈テ御所ヲ立可申ノ由被申テ御飯有、○中略サテモ今出川殿ハ、伊勢ニ御座アリ、國司參有テ、無貳ソ崇敬シマイラセラレケル、小倭ノ聖壽寺ト申寺ニテアソハサレケル、

靜ナル深山ノ奧ノ隱家ニ夜ノ嵐ヲ何ト聞ラン

所々ノ山寺幽栖名所ナト御遊覽有テ、毎日御一献御慰アリト申ナカラ、サスカ都ノ空オホシメシヤルソ理ナル、

袖ニフケ都ノ秋ノ風ノツテ

トアソハサレケルハ、宮千代トテ名童ノオハシケルカ、

平尾ニ遊ブ
濱ニ遊ブ
勝元部下義政ノ近臣ヲ糺河原ニ殺ス
義政ノ近臣細川ノ家人ト相軋ル

モミチヤタヨリ君ニアイヌル

イトヤサシクソ覺ケル、同十日、平尾(飯南郡)ヘ御成アリ、吉見兵部少輔、宮中務丞、荻野修理亮、飯河孫六、小坂孫四郎、京都ヨリヲクレ奉參上ス、同九月十三日、濱ヘ御成有、

オモハスヨ都ノ月ノ後ノ名ヲ伊勢ノ浦ハノ浪ト見ントハ

○コノ後、義視、召ニ應ジテ京都ニ還ラントシ、伊勢ヲ發スルコト、二年九月十一日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、○重編應仁記異事ナシ、

二十四日、丁巳、義政。勝元ノ請ニヨリ、近臣ノ西軍ニ通ズル者ヲ逐フ、

〔宗賢卿記〕八月廿四日、山名內通之近習以下、被出室町殿、依右京大夫訴訟也、於路次多々須河原以右京大夫(勝元)手被打留之、廿余人落行云々、三四人鬪死在之、齋藤越中守カ弟已下、

〔大乘院日記目錄〕三　八月廿三日、大雨下、此夜、五番近習者數輩、被追出御所中、珍事出來、○本書、コノ條ヲ二十三日ノコトトナセドモ、蓋シ傳聞ノ誤ナラン、

〔經覺私要鈔〕御所中打幕稿候、六十六　八月廿三日、天曇、風

一、此間公方近習者令同心、門ヲ立隔、細川方者共ヲ追出、細川方近習ら合戰之間、山名方者共屬公方、御所中に入之間、細川ら合戰爲之云々、此間ハ細

近臣治罰ノ御教書下ル

勝元老臣ヲ召シテ将軍近臣ノ敵ニ通ズル者ヲ逐ハント謀ル

川、御所ヲ奉取籠、四足番屋ニ、少所ヲ作副、卽致祇候了、如此罷成之間、細川右京大夫勝元進退如何可罷成哉、不便、

廿五日

一、不動寺被來、○中略又、近習五番衆、爲細川多被治罰之由、光宣法印申下云々、

是又如何、

〔後法興院政家記〕二 八月廿五日戊午、朝晴夕陰、子刻許雨下、被（成）城下治罰之御敎書云々、武家近習輩、或城方へ引籠、或被誅戮云々、

〔應仁記〕下 東岩藏合戰幷南禪寺炎上之事

○上文ハ、南禪寺、粟田口等ノ戰ニ係ル、九月十八日ノ條ニ收ム、

去程ニ、右京大夫勝元ハ、八月十八日、香川、安富、秋場等ノ長者衆ヲ、花ノ御所ノ四足へ喚デ云ク、旁ハ未被聞候哉、殿中伺候ノ奉公衆之中ニ、敵同意之族有テ、數輩密々ニ通案內、時々廻籌策聞、然ラバ此趣ヲ達上聞、彼阿黨ヲメ不出殿中、必不思議出來セント覺也、此分云何カ仕候ン哉ト被申ケレバ、其時長者共仰天メ、談合評定モ子細ニヨル事ニソ、抑此義ハ取筈ヲ削双ホドノ火急ノ事ニ候ハズヤ、若是ヲ擬議スル所ナラバ、必蹈烈火著隻履走ン事案內ニ可候、去ハ天ノ與ルヲ不取、返テ其咎ヲ

義政勝元ニ謀反人ノ交名ヲ上ラシム

勝元番衆十二人ノ交名ヲ上ル

ウケ、時至テ不行、反受其殃事候、片時モ不被猶預、急度所經上意、彼叛逆之衆ヲ可被退出也、卒ヤ人々相催諸卒、先致公方ノ警固ト相觸ケレバ、半時ノ間ニ、究竟ノ具足武者五六千コソ馳寄ケレ、其衆ヲ以テ、卽取巻花之御所ノ四方ヲ、撰諸人之出入、於此御所中候セ給フ、公家上﨟女房衆外樣ノ人々、コハ何事ゾヤト、消膽失魂玉フ所ニ、勝元ヨリ以民部少輔敎春、上件ノ子細ヲ被入上意之御耳、雖然有誰身上スラントテ、上下共ニ約息込氣ゾ侍レケル、良有、上意ヨリ三條大納言公春ノ卿、吉良右兵衞佐義信兩人ヲ以テ被仰遣ケル樣ハ、今殿中伺候ノ仁數輩有之、而ルニ此衆悉以勝元ニ含野心也ヤ否ヤ、若悉不含野心者、早速ニ記謀叛人之交名、以テ令言上者、爲上意可被退出謀叛人ヲ、然ヲ故ナク清花雲上ノ賓客トモ不謂、妾婇淑女上﨟衆共不謂、雜人原ガ狼藉振舞之條、是何事ゾヤ、都テ敵一味之倫ラ、書姓名以言上、速可停止出入之障云云、其時勝元愼テ雖應上意、急度未能尋明謀叛人之實不實、而、十八日ヨリ到廿三日、コレヲ相尋テ、越廿三日ノ明旦ニ、五番衆十二人ノ交名ヲ書立コソ公方へマイリケレ、次第不同、一色式部少輔、佐々木大原大夫判官、上野刑部少輔、宮下野守、結城下野守、伊勢備中守、荒尾民部少輔、三上三郎、

義政十二人ニ諭シテ退去セシム

十二人西軍ヲ右クルハ上意ノ在ル所ニ從ヒシナリト陳ス

十二人殿中ニ闘死セントス

齋藤新兵衞尉、宮若狹守、齋藤藤五郎、同朋專阿彌、卽公方ヨリ此書立ヲ十二人ノ衆ニ披見サセラル、此上ハ、疾速ニ殿中ヲ罷出テ、勝元ガ止鬱憤、諸人ノ憂惱ヲトカハ、上意トメ神妙ニ可被思召旨也、此時ニ十二人之衆愼テ任御下知之旨、罷出殿中、卽奉晴散上意之朦霧、奏答シ竟テ、御使之三條殿ト吉良殿ニ曰、西陣最員ノ事ハ、不限若輩等、上ノ御心西ヘ引玉ヘハ、下々ノ奉公衆モ、上意ヲ奉思、密々ノ雜談ニモ、敵方獲利聞テハ含笑、味方ノ勝軍聞テハ顰眉候所ニ、我等依不肖、只今殿中ヲ被選出、惣ノ箭代ニ罷立ツ事、不運之至不及是非次第ニ候、雖然當時又是面目ニテ候カ、其故者山名同心人々御所中ニ多ク雖祠(祗カ)候スト、仁指ニ付テハ難遁事共ニ候間、四足ヘ屆出テ、右京大夫ガ前ニテ腹ヲ仕テ、山名ニ組セシ志ヲ遂候ハントゾ皆々申ケル、去テ兩人ハ、御前ヘ參テ、此分言上セラル、十二人ノ衆ハ、御使被歸ケレバ、物具セヨヤト、若者共於殿中討死ハ、日本國ノ諸侍ノ機敷ノ前ノ振舞也、尋常ニ合戰メ、名ヲ可殘後代、未練ノ働メ、名字ニ疵ヲ付ナトテ、思々ノ具足ニ混冑キタル究竟ノ勇夫八百計、物ノ小鳴セバ切テ出テント、打物ヲ小膝ニノセテ引ヘタル體ハ、八幡殿成共恐クハトゾ見ヘニケル、去程ニ御所中ニハ、此者共死

十二人火ヲ殿中ニ放テ勝元ヲ擊ントス

義政旨ヲ傳ヘテ之ヲ諭ス

十二人命ヲ奉ジテ退去ス

狂ニ狂ナラバ、御所モ破、公方モヤハ安穩ニハ御座有ジト、上ヲ下ヘト返セ共、門役キビシクメ、通入難儀成ケレバ、爲方ナクコソ見ニケレ、○中略、室町第行幸ノコトニ係ル、二十三日ノ條ニ收メタリ、去ホドニ、十二人之衆、此ホドハヒタスラ上意ヲコソ仰キ奉リ候所ニ、退出延引之條、甚以緩怠之由、頻波ノ御使立ケレバ、比來山名御最員ノ上意モ思ヘハ、風前ノ浮雲蹤跡ナキガ如ク成時節ナレバ、堪忍メモ無所詮、イザヤ人々御殿ニ火ヲ懸テ、四足ヘ切テ出テ、右京大夫ト一太刀打、殿中ヲケガサントコソ慍ケレ、時ニ三條殿ト吉良殿ト、十二人ノ衆ニ向テ宣樣、越王ノ左將軍大夫種語ニモ、全生持命遠而難、輕死臨節近而易シトアレバ、先皆々鎮性閑玉ヘ、旁ハ當代譜代侍トメ、鎌倉ヨリ御伴衆也、是ヲ以テ忝モ上意ハ全ク思召被捨、不有無御許容、先一端出御所中、大夫ガ散鬱憤以後、漸々ニ機ヲクツロゲ可被召返御料簡ト、對愚老竊ニ被仰下之所ニ、其望ヲ承引不仕メ、結句殿中ヲ穢ントハ、抑何事ソヤ、若上意不應、違亂ニヲヨハヽ、其身ノ沒ノミニ非、失先祖累代之忠懃、至子孫被處不忠罪科、於天下不留足身ト成ン事ヲ不爲覺悟ヤト、責理盡言ノ給ヒケレバ、皆々勝(ゲニ)トヤ思ケン、上意ノ御受ヲゾ申上ケル、兩人卽御前ヘ參シ、御受ノ趣言上シ給ヘバ、御

所中ノ人々、皆喜悦ノ眉ヲゾ開カレケル、依テ此衆御所ヲ退出スト聞ヘケレバ、是ヲ打取ラントテ、御所ヲ圍シ軍勢共、一條室町烏丸ヘ我サキニト下リケル、此由ヲ聞テ、飯尾下總守案內者ニテ、鹿苑院ノ長老細々ニ花御所ヘ參給フ、小門ヲアケサセ、自其相國寺ヘ入ケレバ、寺中ノ廣サニ行方不知成ニケル、中ニモ齋藤藤五郎ハ、常々イ、カヨハセシ女房ノ局ヘ立ヨリテ、暇乞セシ共間ニ、先衆ノ貫(ヌキ)道指テ入ヌルヲ不知ノ、只一騎今出川ヘ打出テ、勢州ノ南ヲ東ヘサシテ行時、武者ノ小路烏丸ニ待居タル共勢ガ、我ヲトラジト追昇(カケ)テ、差ツメ引ツメ散々射ケル間、馬ヨリ落テ討ニケリ、於爰廿三日ノ亥刻バカリニ、花ノ御所ノ御會ヲカマヘ、天座トノ行幸ヲゾナシ奉ケル、寧抑留龍輿奉ル事ハ、(〇天皇室町第行幸ノコトハ、二十三日ノ條ニアリ、)蓋柳營ノ御心、平生西傾キ給フ間、若將軍此衆ト同心アラバ、天子ヲ守リ奉リテ、合戰セントノヲク意トゾ聞ヘケル、又飯尾下總ヲ殿中ニテノ暗打ハ、此衆ヲ手引メ透セシ遺恨トゾ沙汰シケル、(〇重編應仁記同ジ、)

二十五日、(戊午、)前關白一條教房、鷹司房平等、亂ヲ奈良ニ避ク、

〔後法興院政家記〕(二)八月廿五日、(戊午、)朝晴、夕陰、(子刻許雨下、)鷹司前關白有光臨、(近衛房嗣)殿有御出座、余同之、暫時被談世上事、今日下向南都云々、當關白(一條兼良)幷亞相(一條政房)於京都逗留云々、前關白計下向云々、

大內政弘上洛ニヨリ一條教房亂ヲ避ク

〔經覺私要鈔〕(六十六)八月廿四日、霽、

又〇不動寺被語云、一條前關白(教房)殿、此間隨心院(嚴寶)門跡ニ御座、而依大內介上洛、九條邊モ物忩之間、可有下向由被申送禪定院、明日夜叉塚マテ可被進迎云々、則英舜可參之由被申付云々、

廿六日、自昨夜雨下

印盛來申云、一條前關白殿、昨夕酉半刻御下着云々、禪僧一人御共云々、

鷹司房平政平父子亦奈良ニ避ク

一、鷹司前關白殿(房平、)御息新大納言政平、同一乘院被下向云々、一乘院敎玄僧正者、前關白殿御息也、女中被下向云々、在所如何、

一、禪定院僧正母儀、(中御門宣俊息女也、)自一日比被下向、堯善家ニ被座云々、

風呂

廿八日

爲申御下向御禮向禪定院、前關白殿見參申了、欲歸之處、僧正被申云、今夕可有風呂、蹔無還向、專可入之由被申間、令堪忍了、則夕有風呂、前關白殿、僧正禪公、尊譽、近習者一兩人入了、予自風呂上蹔休息、然既及黃昏之間、明日

連歌

教房ノ母中御門氏亦奈良ニ赴ク

可來迎由仰之、共者共返遣了、

一、入夜有連歌、前關白殿御發句也、脇予、第三僧正被沙汰了、在座躰、治部卿顯（一條殿上人）鄕、尊譽比丘、孝承北面、光秀、圓秀、順堯法師、愛滿丸、五更時分事終了、有一獻等、

九月十日癸酉、霽

一、一條前關白殿御母儀（中御門氏）、號廊御局、依京都之儀、去月自八幡此方へ被□□、仍一日□□舍弟禪僧號龍光院被下向之由被申□□畢、仍今日進經胤申、禮之次、榼一、素麵一盆進之、輕微樣存之由申云々、

一、酉刻經胤歸來云、一條廊御局經胤被見參、不思寄之由悅喜云々、

十月十三日乙巳

今日ハ虫氣聊間斷之間、召寄輿向禪定院、前關白殿入見參、片時物語申了、而又冷故歟、聊有痛間申暇令還向了、

〔大乘院日記目錄〕三　八月廿三日、家門前關白御母儀東御方當所御下向、此間京中物忩之間、八幡ニ御座云々、

八月廿五日、前關白殿御下向、此間九條隨心院ニ御座、同大納言殿（一條政房）、自一條殿被遷隨心院云々、

廿九日、太閤關白殿入御隨心院云々、大納言殿同所、

應仁二年戊子正月一日、關白以下諸卿、東西南北之國々ニ隱居了、

○コノ後、政房ノ奈良ニ逃ルヽコト、二年七月二十六日ノ條ニ、兼良モ亦奈良ニ逃ルヽコト、同八月十九日ノ條ニ、敎房ノ土佐ニ逃ルヽコト、同九月六日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

一條兼良隨心院ニ逃ル

公卿諸國ニ逃ル

西軍ノ將畠山敎元、自ラ其營ヲ火ク、

〔宗賢卿記〕八月廿五日、畠山播磨守（敎元）自放火、依敵攻也、

〔後法興院政家記〕二　八月廿五日戊午、朝晴夕陰、子刻許雨下、京方有火事云々、入夜又有火事、

二十六日、己未、東軍ノ將細川持久、自ラ其營ヲ火ク、

〔宗賢卿記〕八月廿六日、細川安房守和泉半國守護（阿波）○持久自放火、敵打宿札於粟田口幷北白川等事、

西軍宿札ヲ粟田口北白川等ニ打ツ

二十七日、庚申、幕府、山城寺社本所領ニ令シテ、年貢半濟ヲ究濟セシム、又勝元ノ請ニ依リ、西岡ノ寺社本所領半濟分ヲ給ス、

〔東寺百合文書〕ヲ之部七下至十止

當國所々散在寺社本所領年貢半濟米事

合

右去月廿七日任御奉書之旨、來廿四日以前可有究濟、若令難澁者、以鑓(譴ヵ下同)責之使、堅可有催促者也、仍配符如件、

應仁元年九月廿一日 (花押)

(花押)

上久世

當國所々散在寺社本所領年貢米半濟米事

合

右去月廿七日任御奉書之旨、來廿四日以前可有究濟、若令難澁者、以鑓責之使、堅可有催促者也、仍配符如件、

應仁元年九月廿一日 (花押)

(花押)

下久世

〔東寺百合文書〕イ之部百廿八至百四十八

山城國西岡中脉所々散在寺社本所領(除賀茂、八幡、春日、北野領等)半濟分事、任細川右京兆勝元被下(申ヵ)請之旨、被成奉書訖、早相副使者、嚴密可被加下知、若又有及異儀之族者、云在所云交名、隨注進可被處罪科之由被仰出候也、仍執達如件、

應仁元

八月廿七日 (齋藤)親基

(布施)貞基

山名彈正忠(是豐)殿

山城國西岡中脉所々散在寺社本所領半濟分(除賀茂、八幡、春日、北野領事)事、就今度忩劇、細河右京兆被申請之訖、早參御方各可被抽軍功、然者隨忠節淺深、可有恩賞之由所被仰下也、仍執達如件、

應仁元年八月廿七日 齋藤民部大輔(親基)散位

布施(英基)下野守

中𦙾地頭御家人中

○是ヨリ先、西岡地頭等、畠山次郎ノ入京ヲ拒止セシコト、六月十七日ノ條ニ、又山名是豐ノ一族ヲ離レテ勝元ニ從ヒシコト、正月十五日ノ條ニ收メタル重編應仁記ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

二十九日、壬戌、大內政弘ノ兵、加茂ニ戰フ、

〔萩藩閥閲錄〕四十五ノ二　三浦又右衞門

○上略、全文八、三日ノ條ニ收メタリ、(八月)廿九日、帝都敵陣構加茂面、○中略於彼所ニ合戰之時、被官人數多太刀討分捕被疵之條神妙也、彌可抽忠節之狀如件、

應仁元年十月十日　大內政弘ノ判

仁保上總介(弘有)殿

○是ヨリ先、政弘ノ船岡山ニ陣セシコト、二十三日ノ條ニ見エタリ、コノ後、花坊ニ戰フコト、九月一日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

三十日、癸亥、京極持淸、自ラ其第ヲ火ク、

〔宗賢卿記〕八月卅日、佐々木大膳大夫入道(京極持淸)宿所、幷被官人等自放火、

〔後法興院政家記〕二　八月卅日、癸亥、晴陰、未刻許雨一滴下、京方有火事、京極宿所自燒云々、

〔經覺私要鈔〕六十六　九月五日、少雨下、戊辰　自京都不動寺御書狀、京極屋形自燒、其邊大略燒了、

坊城俊顯

是月、臨時除目、

〔公卿補任〕四十二　參議正四位上藤(松木)宗綱、廿三、左大弁、二月六日從三位、三月廿七日兼周防權守、九月日辭兩職、

參議正四位上藤(坊城)俊顯　元藏人頭、九月日轉左大弁、○諸家傳異事ナシ、

天台宗名刹ノ舊趾

朝廷額ヲ賜フ

美濃守護代齋藤妙椿、瑞龍寺ヲ建ツ、

〔心宗禪師錄〕上　○上略又、濃陽厚見郡金華山傍有台宗名刹之舊趾、師(○宗頤)相攸于此半嶺、與藤氏太年妙椿固師檀約、而創伽藍洪基、日日率衆、拾瓦礫、芟除荒草、而力士星馳負簣、巧匠霧列運斤、則不終五年、而其功大成、殿堂樓閣依法備者、七堂無不丹漆黝堊、聞者拍手、見者駭目云、帝釋梵王疑降地、覩史夜摩怪離天而已、四衆歡呼得未曾有也、山曰金寶、寺曰瑞龍、又辱朝廷賜額、宸翰奎畫鳳舞龍翔而爀爀然矣、從此諸方名衲江湖飽參、日日輻湊、忽爲龍象大法窟、徒衆及七百、素太年椿公欽仰師道、爲山門外護、嗣師法者九人、各各相攸于東

法ヲ嗣ク者各一院ヲ構フ

妙椿開善院ヲ構フ

宗深ヲ開山始祖トナス

稲葉山ノ麓

西之谷、華構院院者、瑞雲院(天縦受、)龍德院(西川洵、)龍振院(仁濟恕、)息耕院(玉浦珉、)雲龍菴(壽岳彰、)巣雲院(鏡隱賓、)龍岡院(瑞翁縉、)鶴栖院(獨秀才、)開善院(興宗松、)太年椿公亦奉師命、相攸于西山之半嶺、私創一院、師扁曰開善、此時興宗松少而無一物貧窮也、師憐之、命居衣鉢閣者三年、然而以開善賜興宗、勤侍衣後、被移居于開善之日、擔夫從衣鉢閣運出自己家珍者七十荷矣、此九院之外亦分東西之谷、院院樓樓如出沒于雲雨上矣、至是奉佛日禪師雪江(○宗深)命爲開山始祖、繪眞質以請贊語矣、

無辨龍蛇眼、無擒虎兒機、胡爲拈起竹篦子、容易搭著金縷衣、指槐罵柳將是作非、淩滅宗猷瞎長老、不知何處振全威、咦、宗頓首座繪余幻質、需贊、述之以塞厥請云、旹應仁初元仲穐日、前龍寶山主雪江老漢書之、

〔土岐累代記〕土岐美濃守成頼濃州守護之事

六代成頼(土岐)ハ關山流(○妙心寺)玄(慧)ノ法流ヲ皈依シ玉フ、家臣帶刀左衛門利勝入道妙椿(○本書利勝ノ勝ハ藤ノ誤寫ナラン、下文美濃明細記、美濃古蹟考等ニハ、皆利藤入道妙椿トセリ、然レドモ寛正五年七月六日ノ條ニ收メタル妙心寺文書ニ徵スレバ、利藤、妙椿ハ別人ナルコト明ケシ、本書以下之ヲ混ズルハ非ナリ、)カ計トシテ、成頼存生ノ内ニ、稲葉山ノフモトニ天台宗寺地有ケルヲ、地形ヲ改メ創シ、應仁元丁亥年八月

關山流ノ一寺

瑞龍寺

取立テ、關山流ノ一寺ヲ建立シ、金寶山瑞龍寺ト號シテ、成頼菩提所トス、莊園ヲ瑞龍寺ニ寄附セラル、(○上下略、美濃明細記、美濃國諸家系譜、竝ニ異事ナシ、)

○コノ後、瑞龍寺ヲ十刹ニ準セラルヽコト、文明二年三月十四日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

〔參考〕

〔美濃明細記附錄〕下　瑞龍寺之叓

當寺ハ齋藤帶刀左衛門尉利藤入道大年居士カ建立ノ地ナリ、大年居士ハ、悟溪和尚ニ皈依シテ、外護旦越ナリ、應仁元(丁亥)年八月、天台ノ舊跡ヲ點シテ伽藍ヲ建立シ、主君成頼ノ菩提所トス、土岐先祖ヨリ相國寺派ニテ、革手ノ正法寺旦那(ト脱カ)ナル、成頼一人關山派ニ皈依シテ、數ケ所庄園ヲ彼寺ニ寄附セラレケリ、政房、成頼ノ爲ニ法叓等ヲ勤ラルヽナリ、天文十五年、尾州織田信秀ト齋藤ト瑞龍寺ノ西南ニテ大ニ相戰フ、叱ニ備前守信秀岐阜ノ四方ヨリ火ヲ掛ケ攻ヨセケルカ、瑞龍寺モ兵火ノ爲ニ燒レケリ、其後永祿七年、慶長五年ノ合戰ニモ、武家ノ爲ニ燒ケレ圧斷絶ナク、法胤繁榮シテ、悟溪一派ノ本寺タリ、大年居士外ニ一宇ヲ建立シ、自ラ位牌所トス、開善院是ナリ、

○美濃盛衰記、明應六年トナス、ノ外異事ナシ、

〔美濃古蹟考〕（九寺院） 瑞龍寺

在厚見郡上加納村山下、開祖者悟溪和尙、於當國悟溪一派本院、塔頭雲香院、瑞微院、開善院、霍栖院、臥雲院、龍震院、息耕院、瑞雲院合八箇院、本坊者自八箇院輪番監年行夏、準十刹之地也、美濃記ニ云、長井豐後守利藤入道大平（年）居士歸敬悟溪和尙、明應六年丁巳夏四月、天台舊蹟移轉作當院、主君成賴墳墓之地、一本長井豐後守利隆、齋藤帶刀左衞門利藤作、明應六年丁巳四月、應仁元亥載八月作、應仁元年在明應六年前三十許年、申當院長井豐後利隆者、齋藤新四郎利國二男、利藤者利國父、齋藤越前守利藤號開善院權大僧都妙椿共、大年椿（庀）號、文明十一年逝、蓋文明者明應前、應仁後、利藤專執治政之時也、應仁利隆世（マヽ）非年曆役、此紛雜誌誤、今訂考之、當寺造營、應仁元丁亥八月、齋藤帶刀左衞門利藤入道大年椿爲主君成賴造營爲墳墓之地、僧都性寬仁、國家政務大抵法則有、傍好和歌、入道入佛法、其事人物卷誌セリ、（○下略）

三寶院及ビ轉法輪三條東坊城五辻諸氏ノ第火ク

九月（小甲子朔盡）

一日、（甲子、）東軍ノ將武田基綱。畠山義就ヲ等持寺ニ攻メテ克タズ、退テ三寶院ニ入ル、義就、大内政弘等ト兵ヲ合セテ基綱ヲ攻メ、三寶院ヲ焚ク、

〔宗賢卿記〕九月小一日、三寶院、轉法輪三條（實量）府、前左大納言（東坊城）益長、同顯長朝臣、（五辻）泰仲朝臣、山科中納言持俊、大外記師有朝臣（文庫炎上）等炎上、

三日、東北院炎上、禁裏御近邊、今日諸所炎上、（今度火事、或自放火、或敵方沙汰也、）（一條京極）

〔後法興院政家記〕二 九月一日（甲子、）晴、京方有火事、實相院、三寶院等燒失云々、時刻到來、言語道斷次第也、細川方迷惑之躰云々、

二日（乙丑、）晴、京方有火事、

四日（丁卯、）天晴、京方有火事、

〔經覺私要鈔〕（六十六） 九月五日、少雨下、戊辰

自京都不動寺御書狀（八月三十日）○中略、京極第燒亡ノ事ニ係ル、條ニ收メタリ、又去朔日、三寶院門跡等十六町燒了、言語道斷事也云々、又實相院門跡モ燒云々、今度者京中無所殘歟、希代時節也、

六日己巳

三寶院再建ノ計畫

自三寶院有書狀、京門跡幷候人共家悉以燒失、言語道斷次第也、迷惑可有賢察云々、就其吉野より出柱板事、被付才學（覺）分濟等可承歟、京都屬無爲者、年内一宇にても可建立心中云々、

七日庚午

急返事遣了、京御門跡燒失事、驚承之外無他、如何樣構得者雖夜歸可參申入之由報愚札了、使一夜よ加下知畢、

十日癸酉、霽

三寶院燒失ノ理由

一、三寶院燒失子細者、武田手、右衛門佐（畠山義就）在所等持寺へ矢入爲之間、畠山手者共追懸之間、三寶院内へ馳入、於路次武田手九人被打了、畠山幷朝倉手共追々馳重燒之云々、

〔應仁記〕下　大内介上洛之事

西軍ノ計畫

○上文ハ、七月二十五日ノ條ニ收メタリ、兎角シケル間、無程大内介猛勢ニテ上洛シケリ、爰ニ山名方大ニ悅デ、龍ノ水ヲ得、虎ノ風ニ嘯ガ如ク、競ホコツテ下京ノ細川方ヲ悉ク追拂、武衛ノ搆ヲ根城ニメ、細川陣ノ東ノ面ヘ攻上テ、内裏ノ警固ヲ致シ、兼テハ相國寺ヲ陣取テ、御靈口ヲ塞デ、細川方ノ通路ヲ留ントノ支度

武田基綱三寶院ニ據テ内裏ヲ警固ス

也、其時武田大膳大夫ガ弟安藝守基綱、三寶院ヲ固テ内裏ノ御警固ヲゾ致シケル、右衛門佐ヲ始トメ能登大夫（畠山義統）、大内介、土岐、六角、一色等ノ諸大名、都合其勢五萬餘騎、東陣ノ一ノ木戸ナレバトテ、三寶院ヘゾ取リ懸ケル、去ホド

基綱ノ奮鬪

ニ此基綱ハ、世ニ無隱大力、打物ヲ取テ名ヲ得タル大剛ノ者ナレバ、三寶院ノ門ノ片扉ヲ開キ、切入ル勢ヲ請留テ、卯刻ヨリ申ノ終ニ至ルマデ、太刀打事十餘箇度也、ワヅカニ二千ニ不足小勢ニテ、五萬ノ勢ニウチ合テ戰ケレバ、散々ニ成シカバ、只基綱一人ゾ鬪ケル、斯ル所ニ熊野侍ノ其中ニ、野老源

野老源三

三ト云者、奥三山ニテ隱ナキ大力ナリケル、基綱ト組デ名譽ニセントテ、持タル打物加瀝（カラリ）ト捨テ、大手ヲハダケテ懸リケリ、基綱是ヲ屹ト見テ、惡キヤツガ振舞哉、捨テ太刀一ツ受テ見ヨト云儘ニ、振アゲテ丁ド打、三枚重ノ鐵甲、磐石ヲ打ガ如ク手對メ、七尺三寸ノ太刀、ハヾキヽハヨリ打折テ、柄計コソ殘ケレ、其時基綱手ヲ失ヒ、牛ノタケルガ如ク罸テノキケレ共、敢テ追カクル者コソナカリケレ、譬ヘバ藺相如カ詐秦王、取趙璧、咸陽ヲ出シニ不異、去テ野老源三ハ、シタヽカニ打ルレ共、少モ痛ム氣色見ヘザリシガ、一太刀ナレドモ大力ニ鉢ヲ打レテ、頭ノ内頽レ、目口ヨリ血出テ、竪立（タチスクミ）木ニコツ死

花坊ノ戰

ニケレ、○下文ハ、十三日ノ條ニ收ム、重編應仁記異事ナシ、

〔萩藩閥閲錄〕四十五ノ二 三浦又右衛門

○上略、全文ハ、八月三日ノ條ニ收メタリ、九月一日同搆花坊、五日同所、○中略於彼所々合戰之時、被官人數多太刀討分捕被疵之條神妙也、彌可抽忠節之狀如件、

應仁元年十月十日　大内政弘ノ判

仁保上總介殿（弘有）

○是ヨリ先、大内政弘入京ノコト、八月二十三日ノ條ニ、細川持久、京極持清等、各自ラ其營ヲ火キシコト、同二十六日、及ビ三十日ノ條ニ見エタリ、コノ後、西軍室町第ヲ攻ムルコト、十三日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

上表ニ及バズ

二日、乙丑、左大臣足利義政ヲ罷ム、

〔宗賢卿記〕九月二日、室町殿左府御辭退、不及御表沙汰云々、

〔足利家官位記〕慈照院殿　義成、后改義政、　應仁元年九月二日辭左大臣給、

〔公卿補任〕四十二　准三宮、左大臣從一位源義—、卅三、征夷大將軍、月日辭、

〔歷代皇記〕五　左大臣　征夷大將軍從一位源義政、文正二年辭左大臣、

三日、丙寅、前内大臣從一位正親町三條實雅薨ズ、

〔公卿補任〕四十一寛正二年　前内大臣從一位藤實雅、五十三、應仁元年九月三日薨、號青蓮華院、

〔宗賢卿記〕九月三日、後日聞之、三條前内府入道實雅於泉涌寺邊、常忻、○諸家傳ニ常禧トアリ、薨去云々、五十九歲、號青蓮華院云々、

〔經覺私要鈔〕六十六　九月十日癸酉、霽

西忍入道語云、○中略又三條前内府入道實雅公、於泉涌寺死去云々、京都行末難云、可謂幸運躰等者哉、

〔大乘院日記目錄〕三　十月三日、三條前内府入道實雅、於泉涌寺入滅、

〔諸家傳〕二下　三條正親町　實雅、青蓮華院、内大臣公雅卿男、母家女房、　應永十六年誕生、同廿年正月五日從五位下、五歲、院御給、同年月日侍從、同廿一年十二月十五日從五位上、六歲、御即位敘位、同廿三年○嵯峨家譜ニハ、二十二年トアリ、正月二日六イ正五位下、八七イ歲、同廿五年三月廿七日阿波權介、同廿八年正月五日從四位下、十三歲、同廿九年三月廿七日右權少將、同卅年正月五日從四位上、十五歲、同卅一年三月十七日尾張權介、同年十月十三日右權中將、同卅二年正月五日正四位下、十七歲、○嵯峨家譜ニコノ間ニ「同年四月一日

義教遭難ノ時實雅傷ヲ被ル

解官、年月復任」トアリ、永亨二年三月卅日讃岐介、同年十一月七日近江介、同四年四月廿三日藏人頭、廿四歲、同四年七月廿五日三木、廿四歲、中將如元、同五年正月五日從三位、廿五歲、七日加敍、同年十二月廿七日權中納言、廿五歲、同九年十月十日左衞門督、使別當、同年十二月廿六日正三位、廿九行(歲カ)、行幸左大臣家賞讓、(朱書)「同十三年六月廿四日將軍有事之時、數ヶ所被疵云々」、同十三年十二月七日權大納言、卅三歲、嘉吉元(ニイ)年正月五日從二位、卅四歲、中納言之內數輩超越、不知其故、同三年三月十六日太宰權帥、文安六年十二月十二日正二位、四十一歲、寶德二年正月十六日內膳司別當、(朱書)「同三年元日踏哥內辨」、亨德二年十二月廿九日辭、申任息公綱卿、康正三年九月八日內大臣、四十九歲、長祿二年七月廿五日辭、同三年正月五日從一位、五十一歲、寛正二年七月廿九日出家、五十三歲、法名常禱、應仁元年九月三日薨、五十九歲、

世系

〔嵯峨家譜〕公雅號紹宏院、

實雅號靑蓮花院、內大臣、

公綱實雅二男、淺井家祖、

公治元公眞、又公躬、

○是ヨリ先、實雅。義政ヲ其第ニ請シテ、猿樂ヲ行ヒシコト、康正元年十一月五日ノ條ニ、皇居造營ノ事ヲ監セシコト、二年二月十六日ノ條ニ、實雅罪アリ、其采地若山莊、竹田莊等ヲ沒收セラレシコト、寛正二年十月四日ノ條ニ、再ビ采地ヲ沒收セラレシコト、三年四月十三日ノ條ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕サノ部

三條實雅

○二尊院文書一（山城）嘉吉三年十月二十八日書狀

豐遠、旨ヲ奉ジテ東寺領山城植松上野兩莊、及ビ久世上下莊、拜師、女御田等ノ兵粮米ヲ免ズ、

〔東寺百合文書〕ヲ之部一至十三

東寺領山城國植松、上野兩庄、幷久世上下庄、拜師、女御田、及散在所々田地等兵粮米事、不混自余寺社等之間、所被免除也、然者方々綺堅可被令停止之由、依仰免除之狀如件、

應仁元
九月三日　東寺雜掌

豐遠（花押）

上杉兩家ノ古老

六日、己巳、修理大夫上杉持朝卒ス、孫政眞嗣グ、

〔鎌倉大草紙〕下

同年（應仁元年）九月六日、上杉彈正少弼入道持朝、河越にて逝去を、五十歳、法名廣感院殿道朝と號を、此人上杉兩家の古老にて、諸家をおもんし、渴仰の首をあをふきしに、かくなへなく捐館し給へれ、伊豆此（足利政知）御所も、關東の諸家も力をおとし、忙然たり、○下略、

世系

〔諸家系圖纂〕十五上杉　藤原第一

氏定

持定

持朝　彈正少弼、修理大夫、實持定弟、應仁元年九月六日逝、號廣感院道朝、年五十二、

顯房　彈正少弼、修理大夫、

政眞　○事蹟略ス、

尊蓮　僧正、如來院、

女子　右京亮憲忠室、

女子　長井大膳大夫廣房室、

高救　修理亮、三浦佐原眞田明高爲子、號道倉齋、知陽院宗臭雪叟、

定政　修理大夫、顯房、政眞依早世繼家督、

梵壽　建長寺住持節翁、弟子、普濟寺、

朝昌　刑部少輔、三浦時高養子、相州七澤居住、號玄東日永、初隨應院、○持朝ノ二弟五妹略ス、

○是ヨリ先、持朝、長倉義成ト戰ヒシコト、永享七年十月二十八日ノ條ニ、足利持氏ヲ永安寺ニ攻メシコト、十一年二月十日ノ條ニ、結城氏朝ト戰ヒシコト、十二年四月十九日ノ條ニ、結城城ヲ攻メシコト、同年七月二十九日ノ條ニ、足利成氏ト分陪河原ニ戰ヒシコト、康正元年正月二十一日ノ條ニ、河越城ヲ築キシコト、長祿元年四月八日ノ條ニ見エタリ、其他ノ事蹟ハ猶ホ各條ニ散見セリ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕ウノ部

上杉持朝

○前田家所藏文書
二月一日書狀

〔前田家所藏文書〕實相院及東寺寶菩提院文書四

法華堂御領相州三浦郡武林四ケ村、幷上總國飯富庄飯富社領加納本納等

事、近年非御成敗之由承候、於于今者不可有相違候歟、然者先度罷預候仁、被仰付石渡(マヽ)知隼人入道候樣申御沙汰候者所仰候、恐々謹言、

二月一日　彈正少弼持朝(花押)

謹言　淸淨光院法印御房

七日、庚午、東軍ノ將小早川凞平、土倉民部大輔等ノ兵、西軍ト誓願寺ノ北ニ戰フ、

〔小早川什書〕ニ

小早川備後守(凞平)被官

應仁元

九月七日於誓願寺北手負事、

名井彌五郎

橫見與市左衞門尉

土倉民部大輔被官

野間大藏左衞門尉

一見畢　細川勝元ノ判

奉行泰弘

證義俊圓

寺務ハ講衆ヲ除ク

勅願料所

八日、辛未、勅願三十講ヲ春日社ニ修ス、

〔經覺私要鈔〕六十六

一、勅願御講事雖押置、神人事强非可執心之間、可始行之由、仰遣奉行綱所泰弘從儀師畢、

九月七日、庚午

八日辛未

一、自今日勅願卅講在之、證義前大僧正俊圓、權別當大僧都光淳云々、寺務雖爲法印、除講衆畢、先規如何、奉行綱所事、奬舜從儀師也、然親父隆舜法眼當年三月令逝去之間、依爲服重、泰弘從儀師ニ相誂云々、

一、坪江鄕下向神人事、如予口入、神人民部丞可下遣由、勅願衆書狀到來了、旣申異儀之間、所存外之由、內々聞及歟、重○以下闕文

九日、齋、壬申

一、勅願料所坪江下向神人事、令口入落居故歟、民部丞神人榼一双、麪五束、餠一盃出之、其外三百疋折紙進之云々、慮外之至也、得其意可含由仰經胤了、則經胤ニモ出榼云々、

十日癸酉、齋

一、遣經胤於光胤僧都所、坪江下向神人事、悦遣了、爲事次之間、扇二本遣了、左道之由仰了、

〔大乘院日記目錄〕三　九月八日、春日新三十講始行、九日、壬申、伊豫守山名敎豐卒ス、弟政豐嗣グ、

〔後法興院政家記〕二　九月十日、癸酉、晴、去比山名伊與（豫）死去云々、此間歡樂云々、

世系

〔寛政重修諸家譜〕七十一　山名持豐
敎豐　小太郎、伊豫守、彈正少弼、彈正大弼、從五位下、從四位下、
政豐　小次郎、治部少輔、彈正少弼、左衞門佐、右衞門督、從五位下、從四位下、正四位下、
女子　一色修理大夫義春が室、
豐詮　四郎、兵部少輔、從五位下、
豐保　四郎、兄豐詮が養子、
豐繼　肥後、海老名を稱し、別家となれり、子孫志賀源之助某より以下、繼嗣を詳にせず、

敎豐

敎豐　永享三年正月、はじめて普廣院義敎にまみえ、營において元服し、諱字をあたへらる、時ニ十歳、應仁元年九月九日卒す、年四十六、梅布玄嶺或ハ梅嶺、南宗嶺ニ作る、大智院と號し、葬地持豐におなし、○京都南禪寺中眞乘院、

法號

政豐

政豐　實は持豐が四男、敎豐が嗣となる、應仁元年八月、はじめて慈照院義政にまみえ、舊例のことく元服し、諱字をたまふ、

敎豐ノ事蹟

〔但馬村岡山名家譜〕三　敎豐彈正少弼、從五位下、伊豫守、從四位下、　敎豐は右衞門督持豐の嫡男にして、應永二十九年壬寅に誕生なり、少名を小太郎といふ、

一、永享三年辛亥正月に、十歳にして將軍義敎公の御前にして元服なる、一字を賜り、敎豐と名つけらる、

父持豐ニ從ヒ赤松滿祐ヲ攻ム

一、嘉吉元年辛酉六月に、父持豐に從ひ、播州に至る、赤松滿祐を攻て、自敵を討取て高名なり、

持豐ニ代リテ司職トナル

一、寶德二年庚午の春、父持豐職を辭せらる、將軍家、則敎豐を以て司職に命せらる、

一、享德三年甲戌十月八日に、父持豐京都を退て、領國但馬に蟄居ある、時に敎豐は司職たるによりて在京なる、

一、康正元年乙亥に、關東において里見、世良田、一色、石堂等野心をおこし、叛

應仁ノ役敎豐次將トナル

逆を企て討伐せらる、四人の首京都に登り、室町御所乃四足門にて實檢ある、敎豐司職たるによりて、是を沙汰せらる、〇此事他ニ所見ナシ、

一、應仁元年丁亥四月に、父持豐、細川勝元と合戰に及ふの時より、敎豐次將となりて、一族家人を進退し、諸軍を整へて戰功あり、同五月廿六日此合戰に、敎豐陣頭に進み戰はるゝを、細川方より遠矢に敎豐を射て取らんと矢を放事數多なり、敎豐流矢に左の股を射させられしとも、不日に平愈して、後に所々の軍に戰功あり、〇四月ノ戰、他書ニ見エズ、

一、同年八月に、敎豐病にかゝり、同九月九日に、陣中にをゐて卒す、時に行年四十六歳なり、南禪寺の塔頭眞乘院に葬る、法名梅南、道號玄嶺、一に宗嶺、曰大智院殿と號す、

敎豐に二男一女あり、嫡男は右衞門督政豐、正統相續なり、二男兵部少輔豐詮、次ハ女子、一色修理大夫義春の室なり、

政豐

政豐彈正少弼、從五位下、左衞門佐、從四位下、右衞門督、正四位下、政豐ハ伊豫守敎豐の嫡男にして、少名を小次郎といふ、將軍義政公の御前にをゐて元服ありて、一字を賜はりて政豐と名つく、

一、應仁元年丁亥四月に、祖父持豐と細川勝元と合戰の時に、父敎豐より從ひて軍勞あり、同年九月九日に、父敎豐卒去あるによりて、祖父持豐、直に政豐を以て家の惣領とし、一族家人被官等に至まて、皆政豐の下知を請へきの旨を命せらる、

東西南北大路燒亡

西軍日野氏ノ第ニ據リテ室町第ヲ射ル

日野氏一條氏ノ第火ク

十三日、丙子、持豐等、室町第、及ビ勝元ノ第ヲ圍ミテ之ヲ攻ム、義就、禁中ニ入リテ之ニ據ル、是日、伏見殿及ビ公卿將士ノ第宅多ク焚ク、

〔宗賢卿記〕九月十三日、今夜敵山名以下押寄室町殿、相國寺之惣門幷伏見式部卿親王殿、以前武將御座所也、烏丸儀同三司資任、裏辻一品持季卿、四條前亞相隆夏卿、甘露寺前黄門親長、綾小路前黄門有俊、權大外記康顯、淨花院、飯尾肥前守、同大和守以下、內裏仙洞、東西南北大路燒失、但兩御所無爲、雖然敵畠山右衞門佐方軍兵押入兩御所取陣云々、

十四日、敵軍勢打入日野內府勝光亭取陣、射入矢於室町殿、禁裏仙洞御迷惑云々、

自昨室町殿幷右京大夫等取圍之云々、

十八日、日野內府亭、一條殿兼良關白以下炎上、

〔後法興院政家記〕二 九月十三日、丙子、天晴、京方有火事、入夜又京方有火事、

今日自山名方可有還寄云々、
十四日丁丑、晴陰、風吹、入夜雨降、早旦有火事、西方又有火事、西岡邊云々、○中略、赤松政則、上洛ノ事ニ係ル、十四日ノ條ニ收ム、一條家門幷日野內府宿所等炎上云々、官軍及難義云々、珍事也、
十七日庚辰、天快晴、（頭書）一條家門、內府亭等無燒失之儀云々、
十九日壬午、晴、昨日燒亡一條家門、幷日野內府亭云々、

西軍諸將ノ陣地

〔經覺私要鈔〕六十六 九月十日癸酉、霽
西忍入道語云、夜前四條時衆道西所ヘ罷下、京都之儀色々演說云々、六角者六角大慈院取陣、畠山右衞門佐等持寺取陣、土岐御屋形移住云々、
十二日乙亥、自夜前雨下
一、京都之儀者、右京大夫所取卷計也云々、明日可有大寄云々、

大寄

十三日丙子、霽
一、可有大責之由、昨日申□（京カ）□都之儀如何、尤無心元者也、
十四日丁丑、霽
不動寺午刻被來、內府以下書狀在之、

京都大燒

一、京都事外燒云々、
十五日戊寅、雨下
印盛來申云、一兩日前京都大燒亡者一條殿、幷日野宿所、今出川三條宿所、伊勢黨在所等悉燒云々、自何方燒之哉、其段未聞、
十六日己卯、霽、時々雨

土岐成頼一色義直相國寺ニ陣ス

一、楠葉來申云、土岐、一色兩人者相國寺取陣、右衞門佐內裏ニ取陣云々、下村入道說也、
一、又淨花院ヨリ北ヘ室町殿惣門マテ燒了、於其外武田與右衞門佐□□□武田方、可然頸廿四取之云々、
十七日庚辰、霽
一、一條殿幷日野宿所未燒歟之由申云々、眞僞如何、

一條家ノ記錄燒失ス

〔大乘院日記目錄〕三 九月十八日、日野內大臣幷關白家等悉皆燒失了、關白家數代記錄等燒失了、百合計ハ被取出峯（光明峯寺）殿云々、自兼日、○光明峯寺兵發ニ罹リ、一條家ノ記錄マタ焚クルコト、二年八月十三日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、
〔吉川文書〕原題吉川家什書 二 御軍忠狀

一條高倉合戰吉川元經部下ノ手負注文

一、應仁元年九月十三日、於一條高倉合戰之時、手負之注文、
同名 淺枝上野介 矢疵二ヶ所、
同名 淺枝新五郎 矢疵一ヶ所、
中間 矢疵一ヶ所、
吉川次郎三郎元經（御判）
（朱書）「細川右京太夫勝元」
一見了（判）

同討死手負注文

一、應仁元年九月十三日、於一條高倉合戰時、討死手負注文、
湯淺彌次郎 討死、
同名 淺枝孫太郎
同名 同 又次郎
同名 淺枝孫五郎
山縣孫左衞門尉 鑓疵一ヶ所、
和田三郎左衞門尉 鑓疵一ヶ所、矢疵、
小野彌六 同前、
三吉左衞門太郎
才樹小六 鑓疵、
田原圖書助 鑓疵、
皮能新左衞門尉 同前、
吉川次郎三郎元經（御判）
（朱書）「細川右京大夫勝元」
一見了（判）

勝元ノ感狀

一、去十三日於合戰及太刀打、被官湯淺彌二郎討死、幷其外數輩被疵之由候、感悅至極候、彌被致忠節者本望候也、恐々謹言、
應仁元
九月廿三日 （朱書）「細川右京大夫」勝元判
吉河次郎三郎殿

吉川氏部下ノ死傷

〔吉川家史臣略記〕一 吉川經基〇初元經 應仁元年、京都に大亂起て、公家武家幷に僧房商戸に至まて、多兵火之爲に燒て、上下一日も安き心なし、〇中略 吉川次郎三郎經基も、九月上旬上京して、勝元之陣に加る、同十三日、一條高倉にて東陣西陣大に戰ふ、吉川經基力戰して、家人多疵を被る、〇本書コノ次ニ、勝元ノ

東軍淨花院ヲ棄ツ

延燒八十餘箇所

東軍ノ陣地西一條ヨリ小川東今出川マデ燒ク

感狀、及ビ元經ノ注進狀ヲ載セタリ、吉川文書ニ同ジキニヨリ略ス、

〔應仁記〕下 大內介上洛之事

○上文ハ、一日ノ條ニ收メタリ、三寶院落ヌレバ、軈テ其日淨花院ヲバ、以前還橋ノナダレヨリ京極方ニツ持セケル、一陣破レテ殘黨不全ト云ガ如ク、初合戰ニ後ヲ取武者ナレバ、一支ニモ不及取ノキケレバ、九月十三日ニ、三寶院ノ西東近衞殿ヨリ上ハ鷹司殿、淨花院、日野殿ヘ燒上レバ、東ハ花山院、廣橋殿、西園寺殿、轉法輪三條殿等ノ名在程ノ公家ノ御所、凡テ三十七カ所、武家ニハ吉良、大舘、細川下野守ガ在所ヲ初トメ、飯尾ノ肥前守等ノ奉行衆ノ舍宅マデ、都テ八十餘箇所、一片ノ煙ニ上テ、五十ジノ夢トゾ成ニケル、爰ニ物ノ哀レ成シハ、下京ヲ追出サレテ(シカ)細川方ノ者共、一條小川ヨリ東今出河迄、一條ノ大路ニ小屋ヲサシテ居タリシニ、一條殿、小笠原餘炎ニ懸テ燒ヌレバ、妻子眷屬ヲ引連テ、財物ヲ背ニ負、方角ヲ不辨、十三日ノ夜半ニ炎ノ中ニ右往左往シタル有樣ハ、サナガラ黑繩地獄ノ罪人ガ、大石負、鐵鎖ヲ傳如ク、火焚地獄ノ有樣モ、是ニハ不如トゾ覺ヌル、○重編應仁記異事ナシ、

○是ヨリ先、義就、政弘等、三寶院ヲ攻メシコト、一日ノ條ニ見エタリ、コ

南禪寺山

野田泰忠東兵ヲ導ク

ノ後、相國寺ヲ攻ムルコト、十月三日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

十四日、丁丑、赤松氏ノ兵、播磨ヨリ至ル者、攝津ノ兵ト共ニ東上シ、是日、東寺ニ陣ス、尋デ東岩倉ニ移ル、

〔見聞雜記〕○歷代殘闕日記八十四所收 九月十四日、赤松殿ノ手浦上、明石、少(小)寺、攝津國守護代同國八等、當寺○東寺ヘ着陣了、同十六日、東岩倉ヘ陣替、

〔東寺長者補任〕五 九月十四日、赤松方、細川方、播州、攝州、兩國勢五六千人、當寺ニ陣トル、十六日、陣替南禪寺山、

〔前田家所藏文書〕別本

野田彈正忠泰忠軍忠事○中略、全文ハ、正月十五日ノ條ニ收メタリ、

一(應仁元年)同九月七日、攝州播州之御勢着陣山崎、爲案內者令放火西岡中脉之御敵在所、同十四日着陣東寺事、

右所々忠節、大概注進如件、

文明六年三月 日

一見了(勝元)判

〔宗賢卿記〕九月十四日、赤松次郎手者上洛、攝州軍兵付之上洛云々、

〔後法興院政家記〕二 九月十四日丁丑、晴陰、風吹、入夜雨降、赤松二郎勢上洛云々、

〔天陰語錄〕浦上美作守壽像讚

略○上 京師陷落之初、應仁丙子(丁亥)之秋、大內左京大夫黨于叛、以向京師、則宗往攝州猪取野防之、兩軍交戈、積屍亂麻、則宗不芥蔕于懷、月○猪取野合戰ノコト、八月二十三日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、逐西軍以入京、陣洛東岩藏、敵襲則殄之、ム、又、下ノ應仁別記ニハ、則宗播磨ヨリ上京ストセリ、○下文ハ、十八日ノ條ニ收

〔應仁記〕下 東岩藏合戰幷南禪寺炎上之事

○上文ハ、八月二十三日ノ條ニ收メタリ、其後攝津國衆、大內ヲバ防キヱズト云ヘ共、其儘可有ニアラネバ、敗北セシ赤松衆ト喋シ合テ、京都ヘ打テ上ル、其勢三千計也、○下文ハ、十八日ノ條ニ收ム、

〔應仁別記〕○上文ハ、義視伊勢ニ逃レシコトニ係ル、八月二十三日ノ條ニ收メタリ、カクテ京都以外難儀ノ由、播州ヘ飛脚櫛ノ齒ヲ引カ如也、サレトモ今度猪取野合戰莫太討死手負有ケレハ、赤松次郎一家一族者トモ上洛スヘキト云ケル處ニ、浦上美作守則宗一人ナリトモ打立ケレハ、二番衆一人モ不殘打立ケリ、○下文ハ、十月一日ノ條ニ收ム、

東軍急ヲ播磨ニ告グ

十八日、辛巳、春日社下遷宮、

〔千鳥文書〕○大和 二 注當社造替幷臨時御遷宮役人事 略○中

一(朱書)「後土御門」應仁元年丁亥九月十八日下遷宮 延祐

〔大乘院日記目錄〕三 九月十八日、春日下遷宮、於作事者、下遷宮自以前作之、新例也、無力故也、

〔經覺私要鈔〕六十六 九月廿日癸未、霽

一、春日社造替、今日下□□(遷宮カ)云々、勅使自去月可被官位在奈良、右中□(弁カ)□(坊城)俊顯云々、○本書、下遷宮ヲ二十日トナセドモ、今姑ク千鳥文書、大乘院日記目錄ニ從フ、

○是ヨリ先、下遷宮延引ノコト、六月二十六日ノ條ニ見エタリ、コノ後、正遷宮ノコト、十一月十八日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、又造營ニツキ、木材ヲ運搬シ、段錢ヲ課スル等ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔經覺私要鈔〕六十五 四月廿六日辛酉、霽

下遷宮以前作事ノ新例

勅使

三輪ノ木材ヲ引ク

一、春日造替之材木、自三輪邊十市遠清引之、人夫二三千人在之云々、

廿七日壬戌、霽

布當ノ木材ヲ引ク

一、今日造宮財（材シ下同）木自布多（當シ下同）○山城相樂郡一本引付云々、布多邊者共歟引之、

廿八日癸亥、少雨灑

一、今日造替木六本自布多鄕引之、人夫七八千人在之云々、

五月大朔日乙丑、霽

一、今日造宮木三本、三輪（大和磯城郡）鄕同寺ヨリ引之由申之間、於福寺見之、且風流以下引畢、千人計在之云々、

於福寺坊主出酒了、爲痛門跡侯人孝承、泰弘來福寺、古市ヘ參之處、此寺在之由申之間來云々、

一、自福寺還向之後、食時餅以下祝着畢、

十日甲戌、霽

猿樂ノ輩若宮ノ木材ヲ供ス

木阿云、○中略造宮財木多之間、於若宮殿□□猿樂沙汰云々、先規如何、○下略

奈良段錢

一國平均ノ段錢

一、或者語云、只今爲御造替、名（奈）良反錢寺門より懸之、一國平均反錢ヲハ秋可懸之由申云々、然神殿事於奈良反錢者、不致沙汰條事舊了、爰只今先懸催云々、可爲後之煩事也、不被申子細條所存難知者也、一國平均之時不懸此庄一所、只今懸催之條、寺門之儀如何樣有子細歟、奈良反錢之菓子引付者、後々可爲其分者也、珍事々々、

〔經覺私要鈔〕六十六　九月十三日丙子、霽

一、經胤所ヘ神供出者在之トテ、菓子少々賜之頂戴了、夜前下遷宮爲躰奉見夢云々、隨分吉夢也、就中神躰出御之由、色目委渡之間畏令拜見之處、榊木中ニ少尺迦像御座之由繼拜見之、希代靈夢也、可仰可信也、

〔大乘院寺社雜事記〕三十七　四月六日

造營段錢不作分ヲ免ズ

一、自長谷寺書狀到來、自去月披露學侶、當所御造營反錢事、不作分十余貫文事、種々雖歎申入學侶儀不叶、仍來秋可沙汰、近日德改（政）事、及其沙汰之間、傳借事、一向不叶旨申之、則仰遣供目代方了、

七日

一、御造營反錢事、去年分無沙汰之間、神人三十人、自學侶楊本庄ニ伺之云々、

八日

番匠

一、番匠自去月廿八日至六日召仕之了、

造營段錢ニツキ九條庄ト長屋庄トノ爭

十八日、夜雨下、雹

一、長屋庄沙汰人申入、當庄負田之內三町分、九條庄ノ內ニ入組候、云門跡反錢、云寺門反錢、爲長屋庄、自往古于今取沙汰無相違之處、彼負田三町事、號九條領、福智堂以下致非分之訴訟之間、御造營反錢事、學侶評定及種々沙汰云々、於長屋庄者無相亂（違カ）旨、光守律師方ニ仰遣之、造營學侶二番衆一臈故也、

光守返事趣ハ、九條庄百姓等申入趣ハ、彼三町事九條領也、自長屋庄可取沙汰云々、然而只今被仰出候趣、此間福智堂披露ニ大ニ令相違候、何扁被仰出候間、不可存緩怠候云々、

郡使慶力法師申入趣ハ、長屋庄寺門反錢ハ、毎度十二貫五百文也、去年分則十二貫五百文、皆濟無相違云々、

九條庄ハ、自三四方取沙汰、其內三丁分致違亂、故此義出來云々、

長屋九條兩庄ノ田數

今案

長屋庄本田數ハ、十七町七反十五步也、

九條庄本田數四十三丁九反、七反切也、加重職非重職定ナリ、兩庄田數虛說帳、門跡帳明鏡也、散田之時方々隱田分可出來者也、其時兩庄反錢可坊進也、只今長屋庄間田共隱田分ハ沙汰人等不存知、此間取沙汰分、加彼三丁定、十二貫五百文追納之、九條庄ニ隱田又不能左右者也、

長屋庄ヨリ支證ヲ呈出ス

昨日此子細問答了、

十九日

九條庄非分ノ訴訟

一、長屋庄三丁相論事、致糺明之處、應永卅四年九月書下持參之、爲長屋庄負田三丁、九條庄入組、自長屋庄可取沙汰、如先例可爲長屋田數之內之由、故清祐法眼沁（マヽ）判加之、算師故堯專行秀也、不能左右事也、

九條百姓等非分訴訟、不可然之由仰遣光守方了、應永卅四年ハ御造營反錢也、則今度例ニ可相當也、

重職領非重職領

長屋庄ハ重職御領也、九條庄ハ重職非重職四十余町ニ相交也、共以不可見所之間、一段之成敗也、

移殿ノ壁ヲ改塗ス

廿三日

一、社頭移殿壁悉以塗直云々、毎度儀歟、仍兩庄壁塗共指合、當門跡大工孫四郎男、十輪院住、

藤鳥谷ノ木材ヲ引ク

宇智郡ノ木材ヲ引ク

木曳ヲ催ス

廿六日

一、春日藤鳥谷材木、十市今日引之、人夫以下數千人也、今度造營材木自淀可引和(マヽ)泉木津之處、土民等相支之、仍河內へ引廻、自龜背(瀬)〇大和葛城郡北引之處、去大雨ニ奈良三條口ニ引付之、希代不思儀神慮、不可謂末代云々、此外不精(淨)之人夫以下、於在々所々驗共在之、數輩蒙罪(罰)了、凡此度材木ハ希代事共也云々、南山宇智郡材木共、近日當國面々引之、

廿七日

一、木曳吉備數万人相催引之了、

一、英善教円房、十六、參門下、訓英同道也、則長柄黨也云々、對面珍重之由仰之了、或爲沙汰人難相計題目云々、學侶可御披露之由評定候也、恐々謹言、

卯月廿九(七カ)日　　沙汰人衆等

琳乘御房

反錢之時爲一庄、當庄悉以致其沙汰事無之、其子細虛說帳ニ可見者也、就中去享德三年歟、反錢事、爲門跡修造、自寺門許可申入之、其時依爲門跡修造、神殿庄事、奈良反錢ニ相加之了、此時例一庄外ハ不可有之、仍其趣芹院

神殿莊田舍田井奈良田井

福智堂代官九條莊

大御堂修理、龍花院大御堂四足等修理時、又加神殿事無之、仍今度如此仰之、重可仰之、

廿八日、下雨

一、木曳形重一支、布留野六支、數千人云々、

晦日、雨下

一、神殿庄事、自岩井川南名田間田ハ田舍田井也、河ヨリ北ハ奈良田井也、仍今度造營方ニ一國平均反錢之內、奈良反錢事ハ、只今被催促之云々、仍當庄事、奈良田井事ハ、只今無相違、田舍田井事ハ來秋可被催促之由、沙汰人衆ニ披露之、琳乘房御造營沙汰人隨一也、仍仰遣之了、返事到來、就奈良田井之反錢事、神殿田自往古及相論在所候、近來又聊令昆(混)亂子細○以下闕文、

五月一日

一、木曳三輪鄉云々、

六日、雨下

一、福智堂代官幷九條庄百姓等參申、長屋庄ト田地相亂事、九條庄者每度此

百姓等長屋莊ノ田地ヲ兼併セントス
貢田三丁ニ付テノ相論ハ應永三十四年ノ造營ノ時一決ス
九條莊田地ノ注進

分算用云々、則加長屋庄負田三丁之由申入之、予返事負田三丁事ハ、應永卅四年御造營之時、兩庄雖及相論、於此三丁者可爲長屋庄之田數旨、一段經書下一決了、只今申狀不得其意之由仰了、則長屋庄ハ毎度加負田三丁致算用云々、

福智堂注進九條庄田地事

合四十三丁九反、一反切、

此内　サウトノ十二丁五反　蚤治(マヽ)辰巳取沙汰、　別符二丁八反　長柄取沙汰、

長屋庄三丁　負田、

合十八丁三反

二十五丁六反、二反切、福智堂以下庄家所沙汰、

都合四十三丁九反、二反切歟、

以上福智堂注進折紙分也、

長屋莊ノ田地ヲ加入セルハ非ナリ

此内加長屋庄負田三丁條(余カ)事、不可然旨仰了、就中福智堂知行分之内ニ、當門跡重職御領九條庄十三丁余ハ有之、其余方々知行ハ、皆以當門跡寄所也、非重職者也、所詮九條庄四十三丁余ニ重職与非重職入組者也、長屋庄

九條莊閇口

負所三丁相論ハ非重職、九條庄与長屋庄相論也、先年門跡反錢之時、此三丁ヲ重職御領ニ令相亂(違カ)事在之、太不可然之由、嚴密ニ加問答之間、閇口了、則十三丁余分九條庄反錢皆濟了、毎度横道申狀、沙汰外次第也、不能承引、

八日

一、神殿反錢事、學侶返事等如此、誠一國平均上者、遲速沙汰不可及子細事也、仍可沙汰之由仰名主等了、

神殿奈良反錢、其沙汰□□□先規兩方之間、非理之一段急度難究候、今度事御造替料間、以御敬神儀、不日其沙汰候樣、御下知可目出度候、殊更一國悉致其沙汰之間、御難澁旁不得其意之間、内々御傳達可目出候旨、學侶評定候也、恐々謹言、

五月八日　供目代融專

琳乘御房

神殿田井被准奈良事、是非樣(致カ)先規兩扁之間、急度難窮決候、只今事以一國平均之儀、奈良爲中同篇(マヽ)默依事候間、御難澁且無其謂上者、以御敬神

負田三丁ノ事決定

儀、早々運上御下知御目出候、於落居之有無者、追而加糺明可申定旨、能々可洩披露旨學侶集儀候、仍衆儀折紙執進上候、於子細者、明日以院入十講參懃之次、可有言上旨可有御披露候、恐々謹言、

五月八日　經算判

尋尊殿

十四日

一、長屋庄負田三丁事、可爲九條庄之內之由、福智堂掠申入之條不可然、應永卅四年御造替之時、一段一決事也、只今申狀不可出、學侶更以不可承引之由仰遣了、得其意旨、學侶返事到來、珍重々々、

長屋庄負田三丁之事、福智堂掠申分、子細被仰出候、畏入存候、彼負田之事、爲長屋庄內旨得其意、可致催促由被仰出候旨、學侶同心申入之由、可令洩御披露候、恐惶謹言、

五月十四日　供目代融專

伊与上座御房

十五日

神殿莊大小佃ノ反錢ヲ除ク

一、神殿庄寺門反錢之時、於大小佃者每度被閣之、只今一庄悉被定住連之間、此佃事可被相除之由兩頭人申入之、則嘉吉二年九月廿四日故清祐法眼返事案、幷應永廿五年寺門書狀案兩通、故法眼自筆進之、不能左右事也、

神殿庄反錢事、大小佃爲除田之支證、可出帶之由承候間、去應永廿五年依爲除田、被拔默札候證文案進之候、如此支證分明上者、默札事早々被上候者可目出旨、可有御披露候、恐々謹言、

九月廿四日　清祐

供目代御房

神殿庄除田事、於大小佃分合二丁二反者、拔默札不可有段錢、依仰之儀候、於自余田地者、爲傍例可爲難儀之間、不可閣之候、此由可有御披露旨評定候也、恐々謹言、

三月十七日　供目代善圓

因幡法橋殿

數年八反分百姓等隱田也、仍二丁二反分云々、其後算田之間、八反

分出顯了、然間其以後如本之兩佃三丁也、

廿四日

一、經算來、神殿庄大佃小佃三丁田地住連事、於當佃者、御造替以下反錢爲一庄不致其沙汰由仰付之、仍住連事、被上候樣可披露旨仰之、明日沙汰人集會ニ此趣亙細可申付云々、

廿五日

一、神殿庄大小佃反錢事、學侶返事到來、則田地之住連事上之云々、仍不及注（住）連本之沙汰者也、

（御造替沙汰人）

神殿庄大小佃反錢之事、被出申候、支證雖不分明候、只今之事、先以可上默札旨加下知之由、可有洩御披露旨評定候也、恐々謹言、

五月廿五日　（一番衆）沙汰人衆　奉

琳乘御房

廿六日

一、漆師給神殿庄一丁之內四反年貢（去年分）、一向無沙汰、仍田地ニ神木立之、然而二反小山戶、二反光林院作主云々、令申子細也、此條以外事雖爲作主、年貢一向致無沙汰者、不可定用事也、此等子細重以可致問答事也、漆工師与四郎參申入者也、

廿九日、（雨下）

一、神殿庄漆工師田一丁之內四反、去年々貢無沙汰之間、召光林院英暹得業、重々問答之了、號作主職、此下地事七郎次郎男自專、剩去年分一向無沙汰之間、下地事自此方可入新百姓之由仰付也、但雖無作主□□□去年分年貢致沙汰、以後事も、本年貢□無爲者必□作主有無ハ仰も無益事也、所詮年貢致其沙汰、如此間可自專歟、無其儀者、一向不可成其綺之旨、堅加問答罷出、存知者ニ相尋、重々可申入左右云々、小山戶此下地ニ存知事在之、仍昨日此子細仰遣松林院了、當庄ハ作主職事、自往古無之者也、近年如此任雅意方□□□號作主之由有其聞、但無年貢違亂上ハ不□□樣沙汰者也、於向後者、就違亂可落作主□□也、

六月十一日

一、宗藝（學賢房）參問、九條庄與長屋庄相論田數事、先度云門跡云學侶、任一決之旨、自九條庄致其沙汰畢云々、雖爲一旦福智堂掠申條不可然事也、

晦日

一、自明後日兩川用水事、神殿庄□□□□□□□則給公文目代了、畑森新庄

同申之、

西軍。赤松、細川二氏ノ兵ヲ東岩倉ニ攻ムルコト連日、西軍敗績ス、南禪寺災ニ罹ル、

〔武家年代記〕裏書下 九十八至同廿七日、東岩倉合戰、播作備之勢、幷細川右京兆之御勢、攝州守護代上洛之處、赤松次郎法師(政則)下京御敵之間、楯籠彼山了、南禪寺幷諸院悉兵火、

岩倉山合戰

〔中村文書〕〇播磨

於去十八日、岩倉山合戰被疵、忠節感悅至候、必可有恩賞候、彌軍功憑入候、恐々謹言、

(應仁元年)九月廿八日　(赤松)政則(花押)

中村三郎殿

野田泰忠丹波ヲ經テ入京ス

〔前田家所藏文書〕別本

野田彈正忠泰忠軍忠事〇中略、全文ハ、正月十五日ノ條ニ收メタリ、

一、(九月)同十六日着陣岩藏山、同十七日八日合戰、雖然御搆之御合戰難儀之由、依有其聞、泰忠一人經丹波路、自長坂口上落(洛)仕、御感狀在之、〇中略

右所々忠節、大概注進如件、

文明六年三月　日

一見了(勝元)判

〔宗賢卿記〕九月十六日、次郎法師手移住東山云々、

十七日、於東山合戰、

上生院燒ク

十八日、上生院南禪寺内炎上、〇南禪寺炎上ヲ、二條寺主家記拔萃二十日トシ、二十二日ノ條所收後法興院政家記二十六日トセリ、

〔後法興院政家記〕二 九月十六日己卯、晴陰、午刻許小雨灑、晩景參平等院、次參殿御方、自寶池院有音信、京都之儀可屬無爲歟之由有沙汰云々、太不足信用、不審事也、京方有火事、

十七日庚辰、天快晴、世上之儀無爲之子細無其儀云々、

十八日辛巳、陰、京方有火事、又東山方有火事、

西軍大ニ敗ル

廿一日甲申、晴、東山邊有火事、傳聞、赤松勢東石藏邊ニ取陣云々、去十八日、自山名方推寄云々、寄手以外損事云々、

廿四日丁亥、陰、東山方有火事云々、

廿五日戊子、陰、及黃昏雨下、入夜京方有火事、

廿六日己丑、早旦雨止、晴陰風吹、東山邊兩三度有火事、南禪寺云々、

廿七日庚寅、晴陰、東山方有火事、

廿八日辛卯、晴陰風吹、東山方有火事、

十月二日甲午、晴陰、東山方有火事、

四日乙未、晴、東山方亦有火事、

〔經覺私要鈔〕六十六　九月廿日癸未、霽

岡崎ノ土民政則ノ兵ヲ入レズ

一、京都事ハ赤松勢、泉兩守護、(細川常有)刑部少輔、(細川成春)幷淡路守護等東岩藏欲入、然貝鐘ヲ鳴、不入立之間、南禪寺邊正傳院岡崎等ニ欲取陣處、其邊ヲモ地下人不入立之間、其近邊山ニ引上テ取陣間、管領ニハ(孝景)朝倉、右衛門佐ハ(マヽ)甲斐庄、山名ニハ(義直)垣屋、一色、(成頼)土岐、各一頭ツヽ出之、彼勢ヲ可責トテ罷上ケルト云、京下者申云々、〇常有、成春、上洛ノコト、十月二十日條ノ宗賢卿記ニ見ユ、本書恐クハ訛傳ナラン、

義就日野ノ第址ニ陣ス

右衛門佐ハ、日野燒跡ニ取陣、

廿二日乙酉、霽、夕雨

政則ノ兵兵粮ヲ南禪寺ニ徵ス

一、酉刻元次男語云、一昨日赤松手者共、懸兵粮南禪寺間、內々西方ヘ申合之處、急請取候ヘ、可了簡之由返答之間、五百貫分請負、則可持送之由令問答之處、此段者難義候、定又自西方如此可被申間、只押入被召樣ニ候ハヽ、可然由と返答之間、甲等三百人計入之處、門ヲ指テ悉打致了、是土岐方馳入沙汰云々、無言語次第也、不便、又云、於細川方ハ四方止道之間、一切無通路云々、實否如何、是譽田內者說也、

土岐成頼赤松氏ノ兵ヲ誘殺ス

東軍通路ヲ絶タル

廿五日戊子、天曇

古市胤榮ノ兵上京ス

今日古市甲(胤榮)十五大將萩左京亮、一族若黨相副、楠葉元次男上遣了、これへも朝倉申子細在之間、此子細遣狀於朝倉了、

廿七日庚寅

古市氏ノ兵黒谷法然坊ニ陣ス

上京都古市勢(者カ)□黒谷法然房寺ニ取陣、其邊ニ朝倉取陣故也云々、是赤松勢南禪寺邊山ニ取陣之間、是ニ向テ取陣、朝倉幷土岐同近邊ニ取向陣云々、

〔東寺長者補任〕五　九月十四日、赤松方、細川方、播州攝州兩國勢五六千人、當寺ニ陣トル、〇播攝ノ兵入京シテ、東寺ニ陣セシコト、十四日ノ條ニアリ、十六日陣替南禪寺山、此時自去年依動亂如此、彼寺悉燒亡、依之御道具等、悉九月廿一日奉入醍醐寺、每日記在

南禪寺燒ク

之、

〔二條寺主家記拔萃〕○續南行雜錄所收 應仁元年九月二十日夜、赤松次郎法師之手放火、南禪寺燒、○和漢合符、異事ナシ、

〔天陰語錄〕浦上美作守(則宗)壽像讃

○上文ハ、則宗入京、東寺ニ陣セシコトニ係ル、十四日ノ條ニ收メタリ、其冬十月、敵焚北京相國寺、猛烟已及柳營、則宗介馬出岩藏陣、且行且戰入北京、以護赤松之陣、官軍吐氣、精神一倍也、○下略、相國寺ノ火クルコト、十月三日ノ條ニアリ、

播磨及ビ攝津ノ兵岩倉ニ陣ス

〔應仁記〕下 東岩藏合戰幷南禪寺炎上之事

○上文ハ、攝津ノ兵京都ニ入リシコトニ係ル、十四日ノ條ニ收メタリ、東寺ヨリ大宮ヲ上リヘ讚州(細川成之)陣ヘ取入ント、五條迄雖打上ト、讚州ノ陣ヨリハ、手ヲ合テ不出逢、從山名方馳向テ、拒留ント欲スル間、其勢五條ヲ東ヘ六條河原ヘナダレテ、三十三間(堂脫カ)ノ北ヲシ(汁)ル谷越ニ山科經テ、南禪寺ノ上ナル岩倉ニ陣ヲ取、日モ既ニ暮ケレハ、邊ノ林ノ木ヲ切クベテ、數萬ノ雲火(カヽリ)ヲ燒ケレハ、京中ハ只如晝、山名方ニ是ヲ見テ、急ヤ人々、彼コヘ衝驅テ打落サント僉議メ、九月十八日ノ早天ニ、明ルヲ遲シトゾ推寄ケル、兵書ニ、合圖違則ハ軍ニ無利云ガ如、此諸勢ノ責口皆不

南禪寺口ノ戰

汰(ソロハ)メ、最前大内方、南禪寺ヨリ攻アカル、上ノ山ニハ寄來敵ノ猛勢成ヲミテ、既ニ藤木越ニ、三井寺ヘ取ノカントセシカ、嶮難ヲツタイテ唯一手ニ攻上ル間、石ヲアタラサントテ大石ヲ投懸レバ、サシモ剛ナル大内衆モ、ナジカハ少モタマルベキ、谷底ヘコソ崩レニケレ、

粟田口ノ戰

其次ニ山名一家ノ軍兵共、粟田口、日ノヲカ峠ヨリ攻上ル、是モ只一口ナレバ、前ノ如ク磐石ヲ崩シ懸ク、是モタマラズ引退、

山科口ノ戰

三番ニ畠山ノ一族衆遊佐譽田ヲ先トメ、山科口ヨリ攻上ル、城ノ中ニハ前ノ兩度ノ敵ヲ追ナタラシテ、勝ニ乘ル故ニ、險(嶮)峯ヨリ切クヅス事ハ、サナガラ龍田、泊瀨ノ山下風ノ紅葉ヲ散ス如也、

如意嶽ノ戰

其後半時計有テ、甲斐朝倉衆、如意ガ嵩ヨリ下シケル、此岩倉山ト云ハ、四方切レタル名山ナレバ、如(マヽ)意嵩ヨリ下シケリ、谷深ク隔レバ、下リ渡澘所ヲ、石礫ニテゾ打ノケケル、若諸口同時ニ責上ル者ナラハ、城中ハ一支モサヽヘ間敷者ヲトゾ申ケル、其時ノ猛勢ニ付テ、洛中洛外ノ物取惡黨ドモ、モノトリセンタメニ軍勢ニマキレテ、南禪寺亂入、モノヲトルノミナラス、火ヲ付テヤキ拂ヌ、粟田口ニハ、花頂、靑蓮院等ノ諸門跡、北ハ元應寺岡崎ノ諸寺院家ナリ、去ハ京中コソ軍場ト成リタル共、東山南禪寺邊ハ何事カ有ベキトテ、京中ノ重寶財

赤松勢等東軍ニ合ス

産ヲバ、皆東山ヘ隱シ置シニ、不計如此成行事、洛陽同時ニ滅亡時節トゾ見ヘニケル、去ホドニ諸大名ノ軍勢ト、京中邊土ノ亂妨人ト亂入シ、數日經テ取問、諸商人受之、奈良ト坂本ニハ日市ヲ立テゾ賣買ケル、就中岩倉山城衆ハ、勝閧作テ神樂岡ヲ經テ、御靈口ヘゾ入ニケル、○重編應仁記、八月八日ニ係クル、ノ外、異事ナキニヨリ略ス、

〔應仁別記〕○上文ハ、義視、伊勢ニ逃レシコトニ係ル、八月二十三日ノ條ニ收メタリ、カクテ京都以外難儀ノ由播州ヘ飛脚櫛ノ齒ヲ引ガ如也、サレドモ今度猪取野合戰莫太討死手負有ケレバ、赤松次郎一家一族者ドモ、上洛スベキト云ケル處ニ、浦上美作守則宗一人ナリトモ打立ケレバ、二番衆一人モ不殘打立ケリ、○以上ノ事ハ、十四日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、攝州ヲ打通テ、南禪寺ノ東岩藏ニ陣取、此由畠山、山名、大內聞テ、十月一日ニ三万人ニテ責上、浦上ハ俄ニ取上タル荒所ナレバ、尺木一モ無リケリ、木々透岩ノ陰ヲ小楯ニ取、散々射白シ、少疼所ヲ、浦山（上カ）爰コツト下知シケレバ、四方八方ヘ突テ出、切テ出ケレバ、輪變ノ山ヲ崩ガゴトク捲落ケレバ、楯物ノ具ヲ捨テクヅレ落ケリ、死殘者ドモ都ヲ差テ引退ク、角テ浦山（上）京都ヲ直下バ、相國寺佛殿、法塔、諸塔マテ燒テ、烟ノ內ニテ公方ノ有樣見分ズ、

浦上則宗奮戰ス

御所ト相國寺ハ、築地一ノ間也、中々殘ベキトハ思ハ子ドモ、ヨシヤタヾ都ノ內ニテ死バヤトテ、（十月）二日ノ夜岩藏ヲ打下シテ、下紀ノ森ヲ小當ニシテ、御靈宮ヘ取入、柳原ヨリマイリケリ、赤松次郎對面シテ、死タル人ノ蘇生シタル樣ニ、互ニ思ハレケルモ理ナリ、軈テ披露有ケレバ、御感カギリナカリケリ、勝元ハ漢高祖之項門ニ會セシ時、范增ト項莊トガ高祖ヲ討ン謀ニ、大平樂ヲ奏トテ、劔ヲヌイテ舞シニ、項伯アヒ舞ストテ立ヘダテシ其間ニ、張良（噲ジ下同）走出テ樊會ニカクト告タリシ、樊會鐵ノ楯ヲ以門ヲ押破、內ヘ入、嗔テ立タリ、其時高祖ノ心頼母敷ト、今ノ浦上ヲ待得テノ勝元ノ心內、必可打勝トゾ被思ケル、○下文ハ、蓮池戰ノコトニ係ル、十月三日ノ條ニ收ム、

浦山則宗赤松政則ト對面ス

〔山名家譜〕但馬村岡 三　持豐　同（應仁元年）九月よ、細川方よゟ岩倉よ砦を構ふ、同十八日よ、大內介政弘、斯波義廉を遣はし、其砦を攻とる、○本書、西軍岩倉砦ヲ攻取ルトナスハ誤レリ、

○是ヨリ先、赤松氏ノ兵播磨ヨリ至ル者、東岩倉ニ陣セシコト、十四日ノ條ニ見エタリ、コノ後、政則ノ陣ニ合スルコト、十月二日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

古市上洛ヲ謀ル

朝倉古市ヲ招ク

〔經覺私要鈔〕六十六 九月十一日甲戌、齋

一、今日可越河州之由、古市支度之處、越智又出止夫云々、如何、

十二日乙亥、自夜前雨下

巳刻楠葉新右衞門尉元次來、夜前下向云々、古市上洛事、猶計略之處、山名禪門状以下下了、自朝倉方是へも申賜了、

十三日丙子、齋

一、古市上洛事、朝倉申之趣、召稻垣兵庫助家則仰遣胤榮畢、朝倉書状ヲ遣、只如此申、如何樣可返事哉之由仰計也、

合戰祈禱料所

赤松政則、備前金岡東莊跡、御寺半濟、竝ニ藤太給國松名壹分、三島跡等ヲ、同國西大寺ニ寄附シテ、祈禱料所トナシ、戰捷ヲ祈ル、

〔黄薇古簡集〕八 ○備前上道郡西大寺村金陵山西大寺所藏

備前國金岡東庄跡御寺半濟幷藤太給國松名壹分、三島跡等事、爲今度合戰御祈禱料所、備劦金岡西大寺被寄進訖、早任下知可被全所務之由候也、仍執達如件、

應仁元

(付箋)阿閉彌正忠

重能(花押)

九月十八日

(付箋)浦上殿

則宗(花押)

西大寺住持元秀禪師

同懺法料所

備前金岡東庄跡御寺半濟、幷藤太給國松名壹分、三島跡等事、今度被差(依合)戰爲御祈禱懺法料所、當國金岡西大寺被寄進畢、於此度者一段之上者知(マヽ)地分早任下知可被□渡□□□□由也、仍執達如件、

應仁元

重能(花押)

九月十八日

則宗(花押)

松田遠江入道殿

渡付狀

當寺懺法料所備州所々事、任去九月十八日御奉書之旨、所渡付狀如件、

應仁元

十一月廿四日

遠江

藤榮(花押)

西大寺別當御坊

上紙ニ 松田遠江守殿御祈禱狀と有

二十日、癸未、上皇、俄ニ御出家アラセラル、准大臣烏丸資任、從テ出家ス、是

後花園院ノ宸翰

時世ヲ歎カセ給フ

世ヲ捨テ給ハントス

世ノ擾亂ヲ耻ジ給フ

城南ニ移ラセ給ハントス

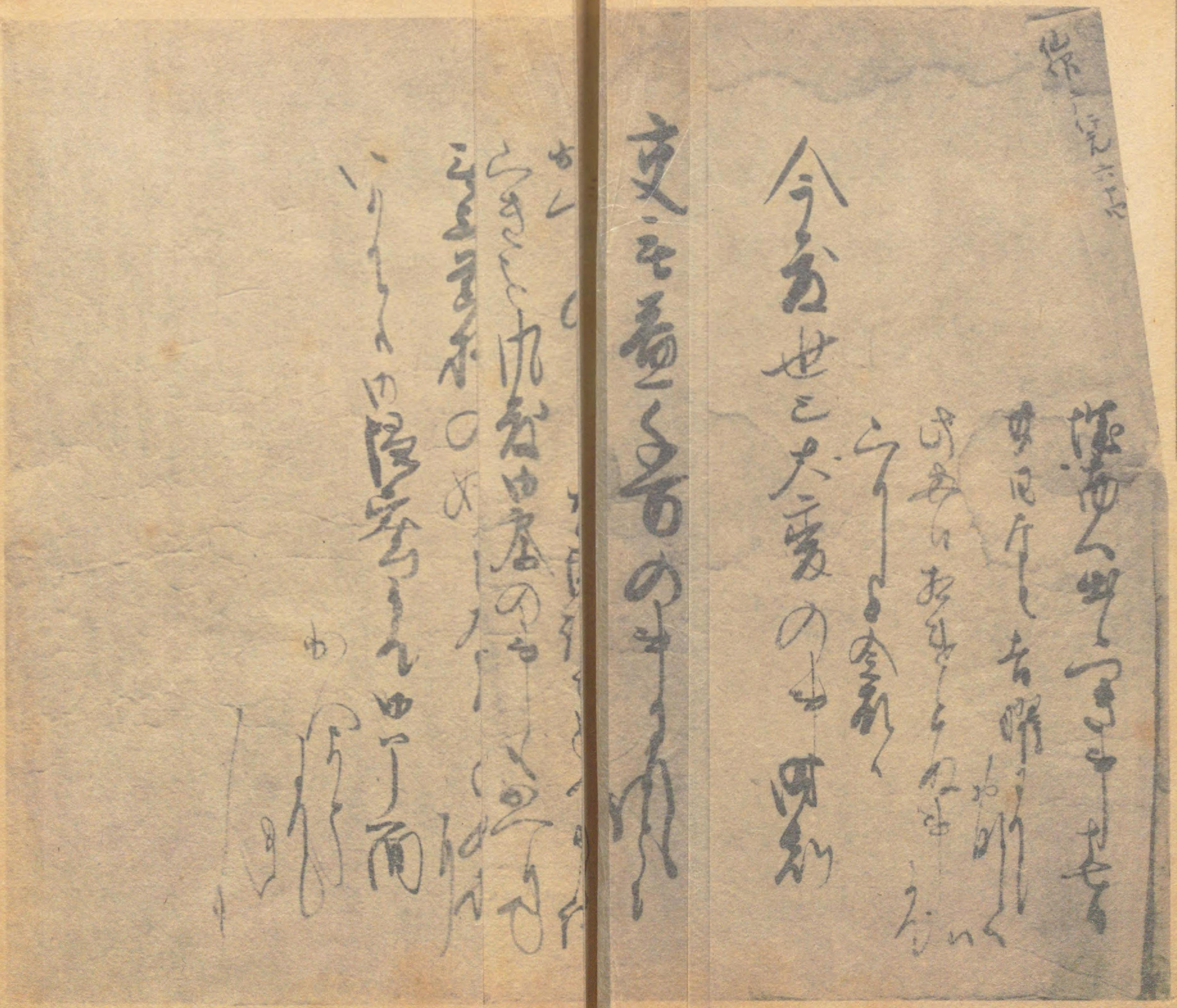
日、前權大納言正二位萬里小路冬房、大臣ニ准ジ、從一位ニ敍ス、尋デ亦出家ス、

〔伏見宮御記錄〕元二後花園院　仙仰 广仁元、六、十四、

城南へ出候へき事、十七日廿日なと吉曜にて候、おなしくは、此兩日相違候はぬ事にて候へかしと念願候、

今度世上大變の事、時刻到來とは申なから、倚々驚歎入候次第にて候、これにつき候ては、予あらましの事、年來の本望にて候へとも、在位の間此事は、とかく堪忍をいたし候、御代始の大儀とも、まと〳〵を申沙汰し候、いまはをき候ては、うれ執心候はぬ所に、かゝる大亂出來し候、いよ〳〵人間の交無益千万の事にて候ほとに、近日風度捨世の本意をとけ候へき心中にて候、かやうの事あえさゝしき様におほしめし候はんすれとも、日來の本望にて候うへ、當御代の始にあたり候て、かやうの珍事出來し候事、人めなちもろさ〳〵めむほくなき次第にて候、これよりまさるけうなる不思議なと出來候ては、いよ〳〵老後の耻辱も口惜く覺候ほとに、かやうの時節を善知識とも思ひなし候ひつきて、なかと存定候事にて候、さ候ほとに城南

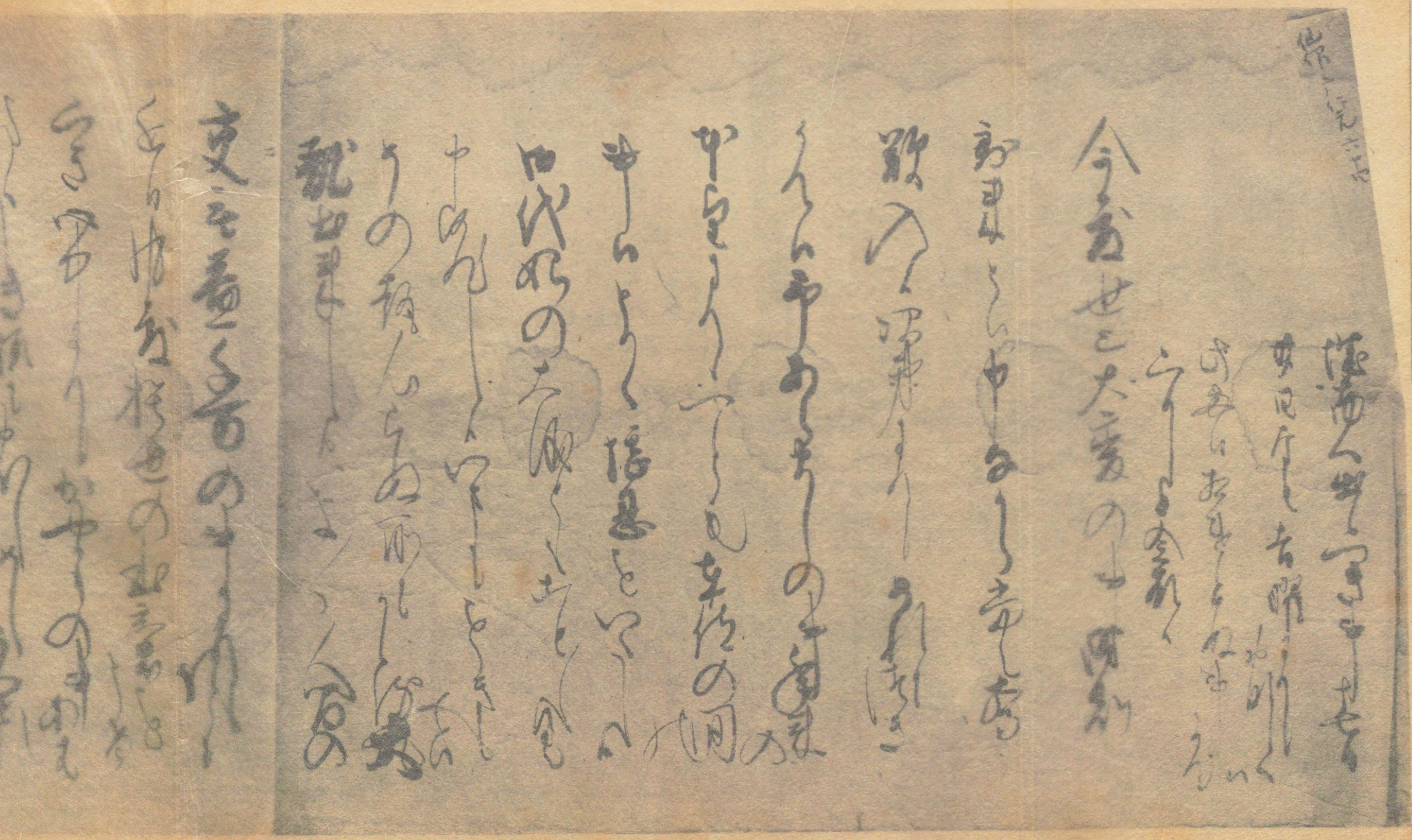
後花園上皇宸翰　伏見宮家御所藏



原寸

縦一尺八分
横五尺九寸三分

東京製版所謹製



後花園上皇宸翰　伏見宮家御所藏

原寸　縱一尺八分
橫五尺九寸三分

[illegible]

文之善く書のまけれ

[illegible]の[illegible]

[illegible]かゝれのまかせ

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]かきの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の

[illegible]

[illegible]

[illegible]のまゝの[illegible]

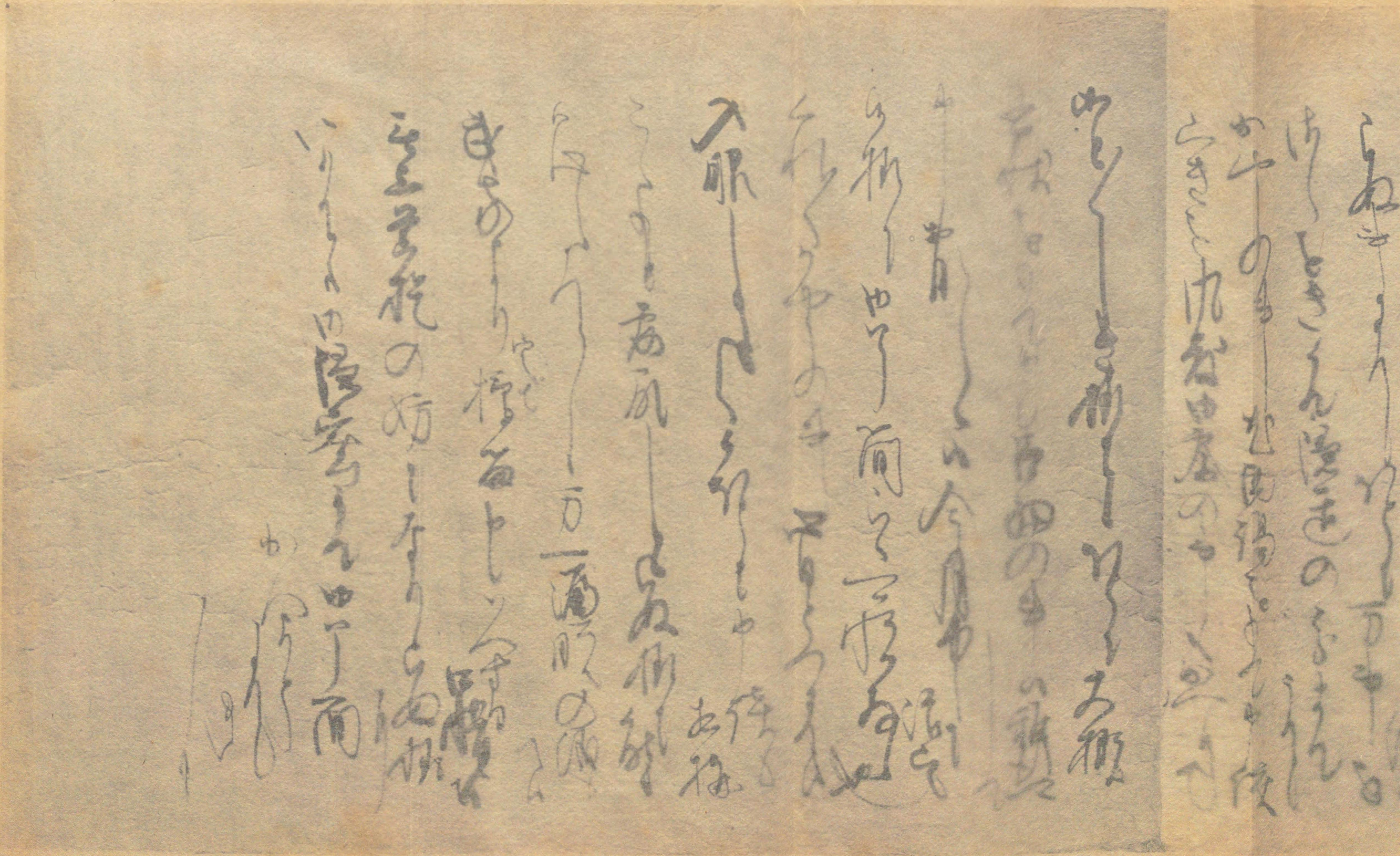
[illegible]の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

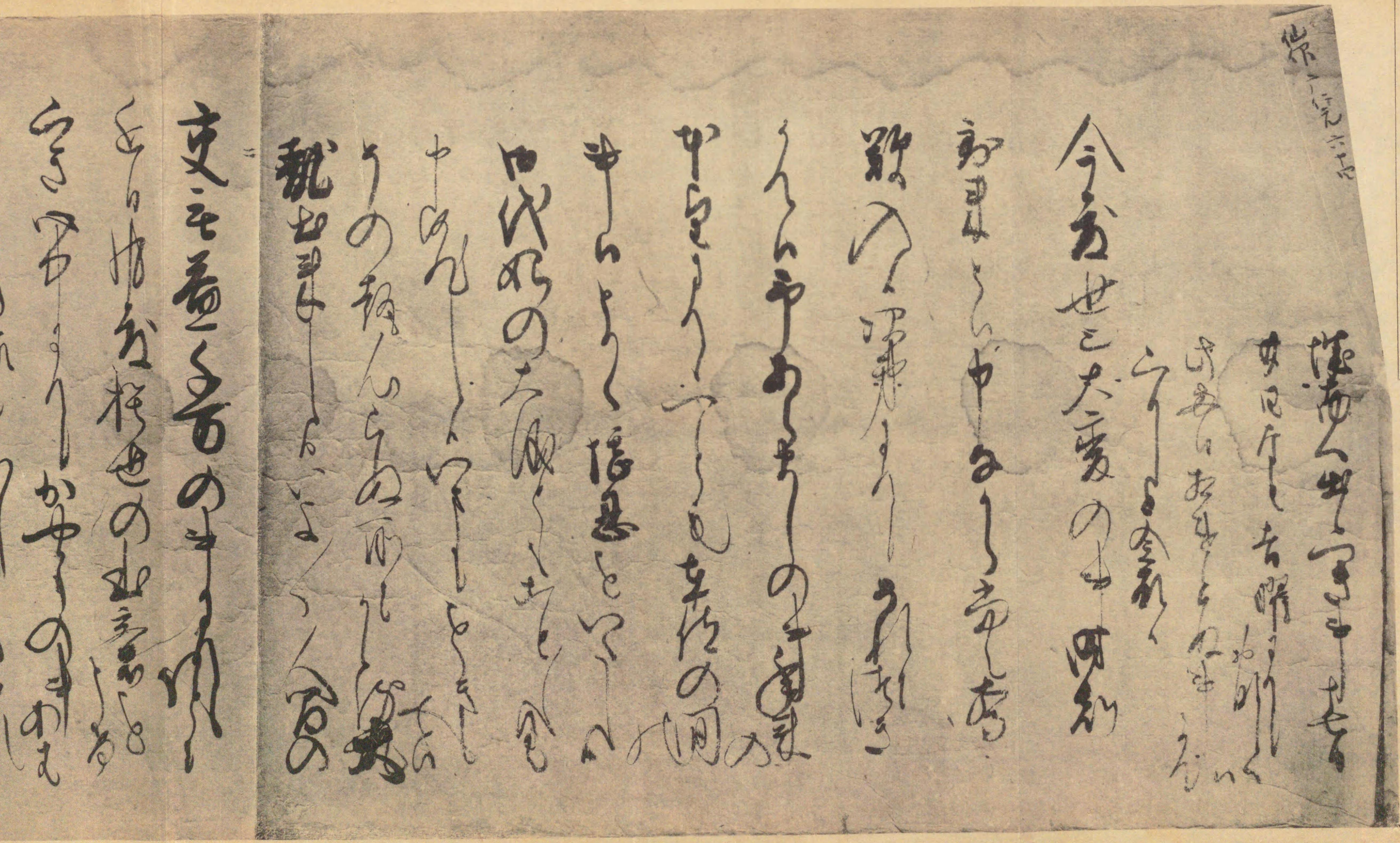
うこの此ておわれし侍りしわれは
さまおの菩志らうくにかやは
文こゝ清つきさまらすは衆
陽也ともわ牢もゆはれ
身たゝのさうらはせられたく
出家の菩提心ねわれし
われらなん肝要なりし事も
世尊摂受の御代へ流布寛事の
たゝしゆ法華代のしこ幸
此あるこりしりうえてならん
つきのまうまうしなり出来の
劫世なしとまかいま西方ね
らわこまたかしし日中白
けしときくん浄土のおまそし
おかの書ま見理とかしも後
ふきとれ都由房のやくなり



東京製版所謹製

後花園上皇宸翰

伏見宮家御所藏



原寸　縦一尺八分　横五尺九寸三分

文ミ善之清行のまゐれ[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]かの[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]当四代の[illegible]

[illegible]かの[illegible]

中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

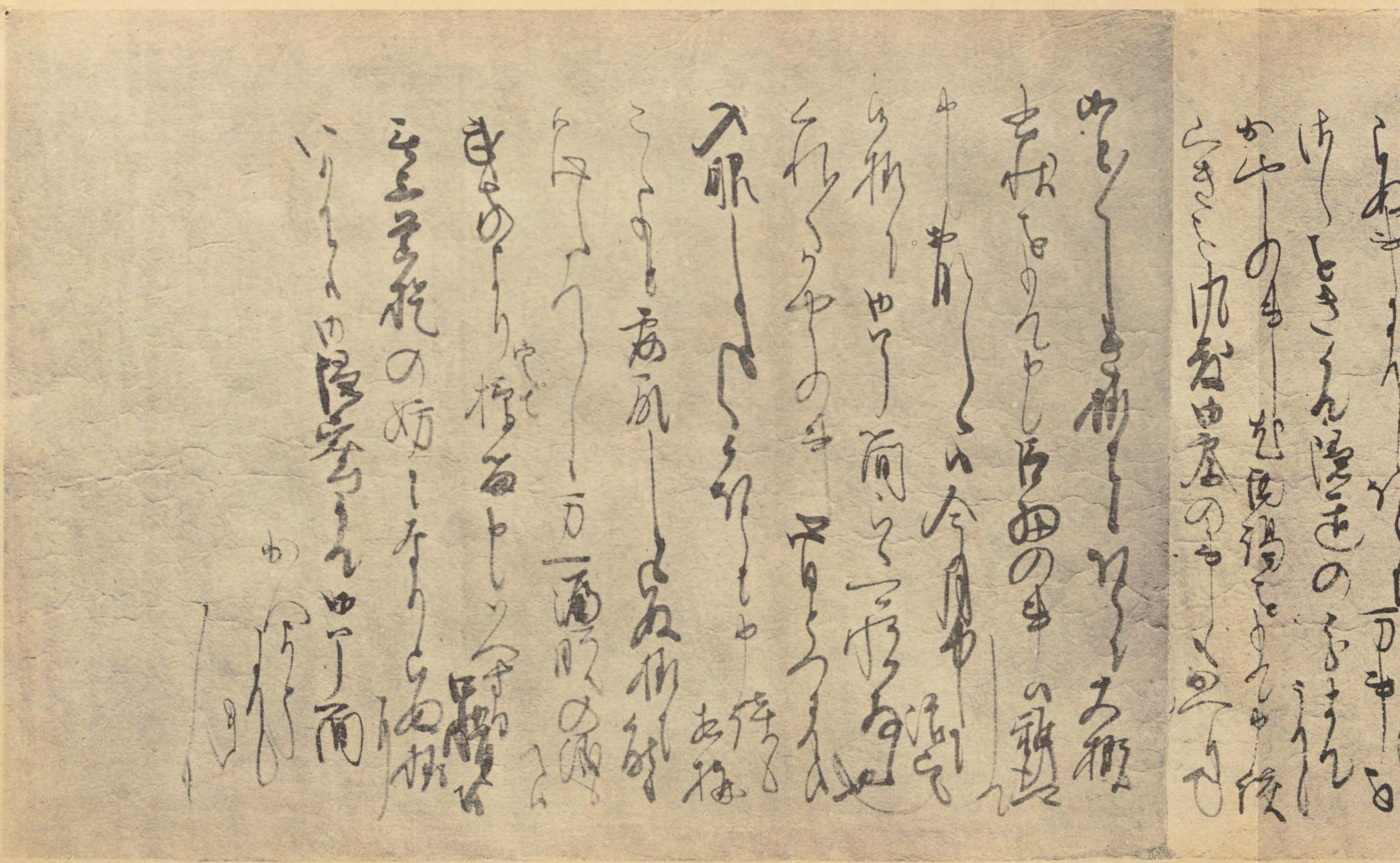
[illegible]

[illegible]の[illegible]の

[illegible]の[illegible]

[illegible]かく[illegible]

そこの地にて御所し[illegible]しおきて
まきあの弟子ともくはかやはの
文字の清つきさまさえす[illegible]
陽も[illegible]申しも申されて
見たりのさることはこれまで
世家の[illegible]ねんごろ
われらかん[illegible]事ありし事も
世尊の時代の[illegible]實すの
たりし申陰陽歴代のしま
[illegible]あ子りけるにはなるらん
つきのまことにこそ[illegible]の
説世なりとも武田[illegible]の所に
られる[illegible]りける[illegible]百申る
仕しときく陰陽の[illegible]
か山の[illegible]陽ともれてい後
ゝききし九[illegible]由屋の事[illegible]
ゆゑしと称し[illegible]れ[illegible]大称
[illegible]しかし[illegible]田の事の称
中[illegible]しい今[illegible]
[illegible]称[illegible]也了聞て[illegible]



東京製版所謹製

幕府抑留ノ虞アリ

の事ハ、故郷の事にても候へハ、さやうの在所なとにか事をもかくし候へき歟と覺候、かこも〻可然樣に仰付られ候ハヽ、生前の芳志さるへく候、かやうの事更ゝ申談へき方も候ハす候、今に隔心も候ハぬ心中にて申候事にて候へハ、なにかのさゝをもう地をかれ候て、出家の素懷むなしからぬ樣に御れうけん肝要にて候、尙々世靜謐の時代にハ、花山寛平のためしも候、澆季末代の今、遁世修行之儀、あなかちはうなんになり候へき事にても候はゝしく候、建武の亂世なとにても、本式御落飾の儀ハ候ハぬ事にて候へとも、万事をさしをき候て、隱遁の分まてにて候、かやうの事、尤面謁をもて申談候へきを、風度御參の事も、かへりてこと〳〵しき樣に候へとも、大概書狀をもて申候、巨細の事ハ雅行卿(庭田)して申候、おれ〳〵くハ今月中に治定候樣に御了簡候ハヽ可悅存候也、くれ〳〵かやうの事、心ほとつにてハ入眼しかさく候へとも申談候、相構こゝもと露顯し候ぬ樣に、能々御心え候へく候、万一漏脫の儀候てハ、武家より定て抑留申候ハんする口惜候、無上菩提の妨になり候ハぬ樣に、いかにも御隱密にて御了簡かんようにて候、かしく、

應仁元年九月二十日

御素意ヲ遂ゲサセ給フ

〔山賤記〕○上文ハ、天皇、上皇室町第ニ幸シ給フコトニ係ル、八月二十三日ノ條ニ収メタリ、その外東山西山まて、やきのゝ原のそる〱と、のこる草木乃陰もなし、もはこしに楚漢の東西をわかちて世ゝかひしさめしみゆとならは、兩陣より川かみ溝渠をほりかひ帷幕𪜈へなく侍るうちにこもらせ給て、あけくれ宸襟をいさめしを世はふ、かくて(應仁二年)はきのとし九月十九日よや、にはかに御もとゆひきらせ給ひし事そあさましきひとふしに侍る、その比はぬしミにのあき住侍しかとみ、ある御事もやかてもきこえ奉、宮古より申をくりし時りおところし覺えそ、まいりてもうけたまはらまほしく侍なから、行かふ道乃せやそからに、いやしきたるさへな𪜈身をかくし、あらぬ事なとめくみ侍るよし聞しあえ、御ふミにておどろきなんきたなふる心中をもかゝ申さてありしついてみ、

さるとても思ふさのミ此君か世をうむくときけは猶そかなしき

諸共にあらましかそれの墨衣おくれぬる身をそうらむる

御返事いかしかと待見さてまつるみ、かゝる亂を世よりまて、ましく月乃御そい𪜈ときられなから、な𪜈公武のため、御身をはかならすにおもふ人こ

御幽閑ノ御素志ヲ遂ゲ給フ

そなさしなきかと、いとよそ〱しきひしりこゝろえ、ちなく〱とおほせられ侍、

さりともとたのミ此末をしらぬ世み背くかひなき我身とをしき
ふる里に立もあへられ墨衣見し世かさりものしらけらはし

おほよそ御遁世は、修因うちみうしき、感果ほかみあらそれて、時いさゝるとはいへとも、此世ひの亂、御身ひとつのなんきみおほしおさるゝよや、かまてもふゝる御あらましを、ほの〱おほせ給れしかと、世かく申とゝめ侍しよ、はねり御ほん井𪜈とけられ、ありさへ幽閑の御すまゐ、猶かれそき給そぬ御うらミを、はれし仰らせし事いかさら此こゝちして、まんほのおもひきそみさいきり侍り、

有したよ淺はしかりし墨染の衣うき世の色よ成ぬる
あそまけよ昨日此夢の世かさりになふのうつゝもはさやならはし 下○文ハ、上皇崩御ノコトニ係ル、文明二年十二月二十七日ノ條ニ収ム、

自ラ御髪ヲ切リ給フ

〔皇年代畧記〕應仁元年九月廿日、於左大臣室町亭俄御出家、四十九、自切御髪給、後奉剃之、御戒師增運(諱)僧正、寺實相院、隨便宜被召之、法緯圓滿智國佛統、

〔本朝皇胤紹運錄〕後花園院　應仁元年九廿、俄手令切御本鳥給、御出家、法諱圓滿智、御戒師增運僧正、陣中隨便宜被召之云々、

○下ノ宗賢卿記上皇ノ御出家ヲ十八日トシ、政家記十七日トシ、山賤記二年九月十九日トス、今皇年代略記、本朝皇胤紹運錄ニ從フ、

〔公卿補任〕四十二　前權大納言正二位藤冬房（萬里小路）四十五、九月廿日准大臣宣下、同日敍從一位、

近臣ノ薙髮

〔宗賢卿記〕九月十八日、仙院御出家、實相院被參之、仙洞御出家事、

大變ニツキ御述懷

〔後法興院政家記〕二　九月廿二日乙酉、晴、傳聞、去十七日、仙洞御出家云々、近臣四人又出家云々、今度之就大變御述懷云々、風聞之説如此、近日巷説滿耳間、不知實説如何、甚驚入存者也、

仙洞御出家、御戒師幷近臣兩人出家事、

廿三日丙戌、降、自申刻小雨下、後聞、仙洞御出家、十九日、御戒師實相院增運僧正云々、近臣兩人烏丸儀同資任、万里小路前大納言冬房、出家云々、委細事追而可尋記、

後日出家ノ輩

〔大乘院日記目錄〕三　九月廿日、上皇俄手自被切御本鳥、上下仰天也、世上樣被歎思召故也、無力、俄ニ御出家、戒師實相院大僧正、後日出家輩、万里少路儀同冬房、（隆夏）四條大納言等也、各出修行云、○隆夏ノ薙髮ハ、傳聞ノ誤ナリ、

万里小路冬房出家ニツキテノ説

〔經覺私要鈔〕六十六　九月廿六日己丑、且雨、霽曇不定、

一、楠葉入道語云、昨日自京都大乘院ヘ下向者語、又以御書自太閤被申送云、仙洞御落餝、裏築地大納言持季卿○烏丸資任ノ誤、幷万里少路前大納言冬房卿、同出家云々、其外事未聞、於冬房者□□□公既昇丞相了、可有其望之處、出家之條定有所存歟、日野昇內府冥罰歟、被禁籠爲躰也、仙院又如然、公私蒙其罰如此之間、且天道不昇丞相而令出家云々、御戒師誰人哉、可尋之、後聞、御戒師者、實相院增運僧正云々、

〔華頂要略〕百四十三　諸門跡傳四　園城寺　實相院　增運准后　應仁元年九月廿日、後花園院御落餝御戒師、

〔諸家傳〕六下　烏丸資任　文正二年九月　日出家、五十一歲、法名西響、

〔諸家傳〕七中　萬里小路冬房　應仁元年十月五日出家、四十五歲、法名弘房、又弘圓、

公卿四散ス

〔應仁略記〕下　公家仁所々に暫住之事

○上文ハ、八月二十三日ノ條ニ收メタリ、或ハ攝政攝祿（錄）の殿下、或ハ三家執柄の大臣家、大元（相）臣、諸卿上雲客たちまちに殿上乃交りを捨て、測らさる田舍乃塵よ其身を移し、九重の月を雲居の外に隔てつゝ、あるもはらさる旅客の栖居、見聞

冬房素懷ヲ遂グ

冬房北谷ニ隱栖ス

寺社本所等押領セラル

南禪相國二寺ノ僧徒所在ニ流離ス

天皇上皇幽囚ニ在スガ如シ

覺知、一たとして心をと、むへきやうなし、中にも万里の小路儀同三司冬房卿、幼年弱冠のそれかみより、眞言の望みなきせし仁等、かされさいつころ勅許を申うけ、東寺の邊まてそしえて密壇に入て、其身公砌にはてなから、貴行の身と成されしかは、今度彼在所炎上の後、叡山西塔院北谷榮泉院に閑居して、三蜜乃觀月を澄されさり、其外世を恨み、身を顧ぬ(のカ)有士、月卿雲客、或は高野の霧に交わり、或は吉野の月に伴なふ、山林流浪一方ならす、五畿内幷江州東西所々の山家、身を安んする仁は稀也、かく成なん終て、いつを限りと知へき國々は、寺社本所、或は押領、或は半濟知行を全うする人なし、去ぬる九月の末、相國寺南禪寺炎上の後は、五山の僧衆數千人、長老以上東堂西堂老若沙喝在々處々暫住し、多分は坂本山上有緣に付て寄宿せらる、酒屋、土倉、有德の輩、都て京中廢滅す、隨ふ程のさくひ、あけて計ふへからは、大津、松本、戸津、比叡辻、仰木、堅田、比良、小松、賤士か臥屋の元までも、處を□て申べき歟、昔を忍ぶ都路の跡、心を訪ぬ餘所の涙、詞を絶する次第共也、八月以來、院(内カ)は裏兩殿を將軍乃御所に押籠られておはしませは、天子の御號は有とや申へき御風情なり、天下に武門を先とし、將軍乃家に三職を守て申は、

騷亂ノ眞情

征旗ヲ賜フモ治伐ノ効ナシ

元弘ト應仁トヲ比較シテ世道ノ陵夷ヲ嘆ズ

一天四海の擁護、德を以て國をおさめ、弓矢を袋に入なとこそ申なるに、此亂事は情を案する人を(に脱カ)猜む情識、欲心に誇る愚暗、國家を覆す源となれり、初五月廿六日の起りは、細川よりて御旗を賜つて、山名を亡さんと企てし合戰の、七月八月よりは逆寄の弓矢と成て、終には非道の臨幸行幸を申沙汰し、治罰を申請といへとも、天是を許さゝる歟、治伐乃德も隱沒せりとみえ、御旗を申出とも治征の効もなきに似たり、者のなみ人王九十五代後醍醐の天皇、東夷の道をやめん爲に、綸旨の大言あり告文を載らる、草案は吉田の中納言冬方の卿書たり、勅使は万里の小路の中納言宣房の卿也、勅使關東に下着有て、既に勅宣の趣を示して綸旨を渡さる、相模の入道高時、秋田の城の介に申付て請取申を、拜見せむとする處に、二階堂の出羽の入道々蘊堅く諫めて申なう、綸旨乃告文を載られさる先例、異朝にも本朝(にも脱カ)其例あるへからす、凡人輙く拜見せん事思ひよらさる事也、七ヶ日壇所に納め置れ、御祈禱衆に仰せて、天衆地類に理て申されて拜見あるへき哉乃趣頻に申けれとも、相模入道用ひす、何か苦からんとて、齋藤太郎左衞門利行物書也、讀盡させけれは、目〻よ鼻血垂て、讀果すして退出し、其日の中に血を吐て

宮人諸貴ノ漂泊

死にたり、時澆季ょ及んて、道塗炭に落をといへとも、君臣上下禮を違ふ時ハ、さほゟ佛神の罰もあるんると、人皆懼恐まけると太平記よハ書さり、彼ハ元弘年中、其よる以來、此應仁の世季現量そる所雲泥乃意ゐる、是ハ此上下君臣の道、何んゟ是非をへき哉、凡慮其際を去らを、此亂何ふと方を得て落居すへきや、一天の君國家のあるし、責一人ふ歸をとみ給ふ、次ゟ局々の御所女房、幷に貴人法體諸出家の尼衆達、各寧(亭)を出て閣を捨ゟ、思ひ〳〵の沈淪、目も當らまさる乃風情なる、藪里、修學院、鞍馬寺、八瀨、大原、夢にも告さる山賤の閑居、柴乃庵の冬籠る、問人稀ある雪の樞、昨日の樂み今日の憂へ、雪月花乃翫ひハ、折を捨しと戯まを〳〵、蘭麝の香をせ色〳〵の衣替へ、所々の物詣で、さあゟら夢の内のむゟしとあれり、東山西山の花御覽、春日御社參の車立、御幸、臨幸、御院參、連日乃御遊、一日の御膳、あらゆる裡の御節會、浮雲の榮耀、時遷る事過ぬ、○南禪寺炎上ノコト、十八日ニ、相國寺ノコト、十月三日ノ條ニ見ユ、

朝倉孝景、舊ニ仍リ、越前足羽社領、竝ニ神官敷地館屋村人加輿丁ニ、臨時ノ課役ヲ停止セシム、

〔足羽神社文書〕○越前

足羽大明神宮領、竝神官敷地館屋村人加輿丁以下之事、任先例諸臨時課役令(停止カ)條上上者、公私不可有其煩、然者神事等(無脫カ)懈怠可有執沙汰之狀如件、

應仁元

九月廿日　(朝倉)孝景御判

社神主殿

二十二日、乙酉、六角政高入京シ、東山ニ陣ス、

〔後法興院政家記〕二

九月廿三日、丙戌、降、自申刻小雨下、當東山邊有火事、昨夕六角四郎(政高)上洛、東山ニ取陣云々、

○是ヨリ先、赤松氏ノ軍、西軍ト東山ニ戰フコト十八日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

東軍相慶ス

十月（大盡、癸巳朔）

二日、（甲午、）白旗アリ、室町第ニ墮ツ、

〔後法興院政家記〕ニ　十月十八日（庚戌、）晴陰不定、未刻許時雨下、或云、今月二日、室町殿之寢殿之上ヘ白旗一流降下云々、（白旗一流降下室町殿寢殿上事、）言語道斷希代吉事云々、細川方諸陣令祝着云々、近日巷説滿耳之間不足信用、

〔臥雲日件録〕（坤）　十月五日、――今月（二）三日晚、白旗三流降于府第上宮、皆相賀云々、

幕府、竹原弘景ノ大内政弘ニ黨セルニヨリ、其所領ヲ奪ヒテ、之ヲ其子道祖德（弘平）ニ與フ、

〔小早川什書〕ニ

竹原又四郎弘景事、今度大篇爲奉公仁之間、不日馳參可致忠節之處、屬大内新介（政弘）手上洛云々、罪科難遁、所詮以息道祖德、弘景跡被充行畢、全領知、彌可致奉公之旨、可被申付之由所被仰下也、仍執達如件、

應仁元年十月二日

下野守（布施貞基）判

肥前守（飯尾之種）判

小早河備後守（凞平）殿

小早河竹原又四郎弘景事、被充行訖、早守先例可被致其沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

應仁元年十月二日

下野守判

肥前守判

小早河道祖德殿

〔竹原小早川家系〕弘景

「弘平（道祖德、又四郎、中務少輔、安藝守、）

應仁元年十月二日、父弘景跡被宛行、（父弘景屬大内新助（介）一手上洛、依之被礙所領、）

○コノ後、幕府、小早川凞平ニ命ジテ弘景ヲ誅セシムルコト、十二月二十九日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

三日、（乙未、）院宣ヲ興福寺ニ下シ、忠節ヲ致サシム、義政モ亦、内書ヲ同寺ニ下シ、兵ヲ出シテ山名氏ヲ擊タシム、

〔經覺私要鈔〕（六十六）　十月九日癸丑

山名宗全治罰ノ院宣

山名右衞門督入道宗全(治罰之カ)□□□院宣、幷御內書在之、就今度兵革事、可致忠節之由、可令相觸滿寺賜(給カ)旨、院御氣色所候也、仍執達如件、

十月三日　(甘露寺親長)按察使

謹上　興福寺別當法印(孝祐)御房

追申、天下靜謐事、可致禱祈之由、同可令下知給也、

御內書

山名右衞門督入道宗全事、被成治罰院宣上者、不移時刻參御方、致忠節者可爲神妙也、

十月三日　(義政)御判

興福寺衆徒中

奉書案

就院宣幷御內書、可有上洛之處、于今無其儀之條、如何樣之次第哉、既合戰之間、折角上者率猛勢、不廻時刻馳參、可被致忠節由被仰出候、仍執達如件、

十月五日　(布施)貞基判

(飯尾)之種判

興福寺衆徒中

治罰ノ院宣

〔大乘院日記目錄〕三　十月三日、山名入道治罰院宣、

〔後法興院政家記〕二　九月十三日丙子、天晴、治罰事無勅許事、治罰事未有勅許云々、

十月五日丁酉、天晴、明日被成治罰云々、(頭書)〇本書、明日トアルハ、恐クハ誤ナラン、

相國寺以下諸氏第宅多ク燒ク

西軍、東軍ヲ相國寺ニ攻ム、寺僧西軍ニ應シ、火ヲ放チテ之ヲ焚ク、西軍遂ニ之ヲ陷イル、明日、政長、攻メテ寺址ヲ復ス、

〔宗賢卿記〕十月二日、相國寺塔頭炎上、

三日、相國寺燒失、敵寄懸之、

四日、今出川殿三條內府宿所也、伊勢守以下炎上、

〔後法興院政家記〕二　十月三日乙未、晴、京方有自辰刻至申刻火事、相國寺云々、今日有大合戰云々、

四日丙申、晴、京方有大燒亡、昨日相國寺以下燒亡事、相國寺塔頭燒失、其外伯(神祇伯白川資益)卿宿所以下炎上云々、有大合戰云々、

西軍室町第ト東陣トノ間ヲ截タントス
西軍天皇法皇及ビ將軍ヲ迎フトノ説
朝倉孝景古市胤榮相國寺址ニ陣ス
一色義直等武田信賢ノ陣ヲ燒ク

〔經覺私要鈔〕六十六
十月三日乙未
入夜古市(胤榮)來申云、只今自京都矢負罷下申云、昨日畠山右衞門佐、武田大膳(信賢)大夫取陣所(相國寺)、□□□□□□罷向責戰之間、武田ヲ追退□□寺ヲ燒拂、細川與室町殿間ヲ立切之間、禁裏仙洞幷室町殿ヲハ山名方ヘ奉取了、室町殿近習者共思切テ相振舞之間、無念細川ヲハ退了、室町殿モ半燒了、然而以□□□火ヲハ消畢云々、
四日丙申
一、今日事外京都燒之由人々申云々、仍於北口見之、久光坊相告了、煙北山ニ立覆テ不分明、燒段ハ一定也、在所ハ不聞、
五日丁酉、齋、誠斜日如小春
一、楠葉入道來語云、相國寺者悉燒了、其跡ニ朝倉取陣、古市勢モ朝倉同陣云々、
一、申刻室家(西)榮清(春円房)來、京都ヨリ狀在之、其面ハ畠山右衞門佐內者遊佐幷一色右京大夫、武田陣ヲ取タル勝定院ヲ追落テ燒拂□□□(今出カ)川殿(元三條實雅公宿所)、幷伊勢守屋形、譽田□□□□マテ燒之、其跡ニ陣ヲ取了、右衞門佐ハ

畠山義就細川教之及ビ白川氏第ヲ燒キ之ニ陣ス
相國寺ノ僧西軍ニ通ジ火ヲ放ツ
相國寺三日ニ亙リテ燒ク
武者小路今出川ノ戰

細川(教之)下野幷伯宿所ヲ惣門ノ前兩所ヲ燒拂了、其跡ニ陣ヲ取之間(マヽ)、

〔二條寺主家記拔萃〕(○續南行雜錄所收)
應仁元年十月三日、相國寺煙上、於彼寺公方方御勢楯籠處、山名方與力衆畠山右衞門佐、幷武衞內朝倉勢以下寄來、放火云々、但於僧衆中引級(汲カ)躰、合戰最中、自寺內立火云々、當年洛中神社佛閣、其外在家燒失、不知其數、

〔東寺私用集〕應仁元(丁亥)十月二日、三日、四日之三ヶ日中ニ、相國寺悉燒之、自二條上東西南北、悉此時皆燒之、

〔東寺長者補任〕五
十月二三四之三ヶ日ニ、悉相國寺燒亡、畠山右衞門佐殿勢燒之、自二條上者東西南北悉燒之、北畠ノ塔許殘了、

〔相國寺前住籍〕再住維馨和尙、○中略(應仁元)同年十月初三日卯刻、敵軍攻寺、從庫堂出火、七堂幷東方諸院鹿苑一時爲焦土、同四日午刻西方諸院始于雲頂終于大德、皆燬兵矣、

〔吉川文書〕(原題吉川家什書)二
一、應仁元年十月二日、於武者小路今出川合戰之時、太刀打手負注文、
同名
江田左近將監

今出川東ノ戰

同名
小枝大和守
山縣孫左衞門尉 鑓疵一ヶ所、
皮能新左衞門尉 同前、
中間二人

吉川次郎三郎元經 御判

（朱書）「細川右京大夫勝元」
一見了判

應仁元年十月
一、去二日、於今出川東合戰之時、太刀打手負注文、

同名
江田左近將監
小枝大和守 被官戸津川新左衞門尉矢疵一ヶ所、
被官
山縣孫左衞門尉 矢疵一ヶ所、鑓疵一ヶ所、

同三日太刀打、
同名（朝下同）
淺枝孫太郎 切疵、
同 又次郎

同四日手負、
中間討死、
淺枝上野守（經定）（介） 飛礫、
同 孫五郎 同、
被官
三宅圖書助 同、
同
須藤助太郎 矢疵、

吉川次郎三郎

（朱書）「細川右京大夫勝元」
承了判

北小路高倉ノ戰

一、應仁元年拾月三日、於北小路高倉合戰之時、太刀打手負注文、
同名
淺枝孫太郎 鑓疵一ヶ所、
同名
同 又次郎 同前、
中間與一左衞門討死、

鹿苑院口ノ戰

同四日、於鹿苑院口之槺（構カ）手負、

同名淺枝上野介飛　礫、
同名淺枝孫五郎同　前、

吉川次郞三郎元經御判

（朱書）「細川右京太夫勝元」

一見了判

一、度々於攻口合戰、被官人數輩及太刀打、或捕取、或被疵之由候、尤以神妙、彌可勵軍功旨可被申含候、恐々謹言、

應仁元

十月十二日　　勝元判

（朱書）「細川右京大夫」

吉川次郞三郎殿

北小路室町等ノ戰

〔萩藩閥閱錄〕四十五ノ二　三浦又右衞門

○上略、全文ハ八月三日ノ條ニ收メタリ、十月四日、北小路室町等於彼所々合戰之時、被官人數多太刀討分捕被疵之條神妙也、彌可抽忠節之狀如件、

應仁元年十月十日　　大内政弘ノ判

仁保（弘有）上總介殿

白雲之構

〔小早川什書〕ニ

今月三日、於白雲之構、親類被官人數輩注文在之、或討死、或被疵之條、尤神妙、彌可被抽戰功之由被仰出也、仍執達如件、

應仁元

十月七日　　（布施）貞基判
　　　　　　（飯尾）之種判

小早川（凞平）備後守殿

今井秀遠北小路ニ戰フ

〔今井軍記〕秀遠守備中　同（應仁元年）十月四日、相國寺合戰、北小路ふおゐて合戰いさし、秀遠疵をかふむる、八郎五郎一族家子郞等百餘人疵をゝふむる、數度御感狀有之、

〔應仁記〕下

相國寺炎上之事

去九月十三日ニ、三寶院、淨花院ヲ責落テヨリ後、相國寺燒落サントゾ巧ミケル、其故ハ、下京ヲバ悉山名方ヨリ追出サレ、內裏ヨリ東ハ、又三寶院ノ時燒失ソ曠野ト成レバ、細川方ニハ只相國寺ヘ通入ソ、詰城ニ賴力ヨリ外、更ニ餘所ニ足溜ナシ、若相國寺ヲ灰燼ト成スナラバ、要害モナキ野原トナリ

西軍相國寺ヲ攻ム

山名方ノ僧火ヲ相國寺ニ放ツ

西軍之ヲ見テ齊シク相國寺ヲ攻ム

京極武田二氏高倉烏丸ノ陣ヲ棄テヽ走ル

相國寺ノ東門破ル

テ、敵ハヨモ一時片時モタマリ得候ハジト評議シ、相國寺ヲ目懸ケテセメ落サントテ攻上ル、細川方ニモ、一條ヨリ上ヘアゲタテヽハ、身方ノ勢働難協シ、城ヘノ出入難儀成ベシトテ、東ハ烏丸殿、高倉ノ御所、西ハ伊勢因幡守（貞誠）ガ宿所ヨリ、三條殿ヘ持續テ、晝夜ヲ不分戰ヒ暮ス所ニ、山名方ノ惡僧有テ、十月三日ニ、相國寺ニ火ヲコソ懸ニケレ、去程ニ、近日ニ相國寺ヲ敵ニ被取テハ、先非ヲ悔テモ不可有甲斐トテ、安富民部元綱三千餘騎ニ、長野ヲ始トシ、伊勢衆ヲ相添テゾ持セケル、サテ寺ノ會圖ノ烟立ケレバ、兼ヨリ待儲タル事ナレバ、組ノ大名ニ右衞門佐義就、同修理大夫（義統）、大内介政弘、一色左京大夫義直、土岐右京大夫成頼、六角四郎高頼等ノ軍兵二三萬人、一條室町ヨリ東、烏丸、東洞院、高倉四五町ガ間ヲ、眞平ニコソ切テ上リケレ、其體サナガラ朝熊ノ鹽時ニ潮ノ指込ムガ如也、依之高倉ノ御所ト烏丸殿ヲ堅メシ京極、武田兩人ハ、早既ニ敵軍相國寺ヘ取入リヌト心得テ、出雲路ヲ指テゾ雪頽ケル、三條殿ヲバ伊勢關ト、備前ノ勝田次郎左衞門尉ト兩人ノ勢、ワヅカ五百計テ相拘ヘケレドモ、敵猛勢ナレバ一支モ不支、次郎左衞門尉ハ討レテ、關ハ取テノキニケル、斯リケレバ、相國寺東門堅メシ伊勢衆等、寺ニ火ヲ懸ル

安富元綱兄弟相國寺惣門ヲ力拒ス

西軍東門ヨリ埊入ス

元綱兄弟之ニ馳セテ戰死ス

總門ノ激戰

ヲ見テ、左手右手難持所ゾトテ、皆同心ニ引テ歸ル、民部ガ葉武者共、是ヲ見テ、今ハ協ジトヤ思ヒケン、過半ハ取テゾノキニケル、爰ニ安富民部兄弟ハ、纔ノ手勢ト相倶ニ、相國寺ノ惣門ヲ堅メテ、石橋ヨリ責入敵ヲ請留テ、七度マデコソ込出シケレ、一マクリマクツテ歸ル、其跡ニ手負死人ノ臥タルハ、河原ノ石ニ異ナラズ、或時民部合戰ノ隙ニ、弟ヲ近付テ云樣、サテモ今日ノ合戰ニ、敵モ身方モ今ヲ限リト覺ヘタリ、就其惣門破テハ、定テ屋形ノ可及御大事、汝ト六郎トハ、如何ニモシテ鹿苑院ヨリカケ透テ、四足ヘ參リ、屋形ノ假借（カイシヤク）仕リ、賀茂邊ヘ御伴イタシ、如何ニモシテ、丹波ヘ越シマイラスベシ、當責口ノ鏬（スキマ）ナキヲ思フニ、サコソ花ノ御所ノツウ門ノ火急ナルラント云所ニ、東ノ門ヨリ敵漫々ト切入レハ、其マヽ、兄弟馳向、餓鬼メキタナシトハ云ナガラ、今朝ヨリ數箇度ノ戰ニ疲レハテヽ、只落鳥ノ如ニシ、胸板ハツレ箆深ニ射サセテ、其儘臥テゾ討レケル、弟モ荒手ト組デ、相トモニ勝負ヲコソ決シケレ、惣シテ此民部ガ持口ノ戰ヒハカリニ、敵身方ノ死人五百餘人、手負ノ數ハ、算數ニモ不可及トゾ承、サテ惣門ヲバ大内衆、土岐衆コソハ攻ニケレ、今日敵ヲ追落サズンバ、再本陣ヘ歸ラジト自稱シ、キリカヽリケル軍場

長ヨリ昏ニ至リ交綏ス

西軍車八輛ヲ以テ首級ヲ運搬ス

總門防禦ノ諸氏

元綱ノ妻子沒落

ナレバ、互ニ戰フ勢力ノ焔ハ、火炎トナツテ燒雲、打違ル太刀ノ光ハ、赫灼トソ火花トチル、俄ニホツタル小堀一ヲ、越ツコサレツ逐ツヲハレツ、搏交ヘテ死ルモアリ、組テ勝負ヲ遂モアリ、刄ヲツカミ鏃ヲカミテ、未明ノ天ヨリ黃昏ニ至マデノ合戰ニ、敵身方倶ニ闘贏テ相引ニコソ引退キケレ、於爰大内方、土岐方ヘ取得ル程ノ首、車八兩西陣ヘゾ運ビケル、取得ザルホドノ死骸ハ、白雲ノ門ヨリ東、今出川マデノ堀ニ埋レテ、幾千萬ト云數ヲ不知、此中過半ハ、寄手ノ屍ガイトゾ申ケル、又ホリソコヨリカヅキ上ルシガイノ中ニ、生テ上ル者敵身方共ニ多カリケル、此ソウ門ノ受手ハ、細川方ノ馬廻ノ諸侍、同赤松衆、公方奉公ノ衆ノ軍兵ニハ、石見ノ佐波、高橋、安藝ノ毛利、小早川等也、彼人々惜名捨命戰ヒケレバ、堀ヘハマルホドノ赤松衆三百人トゾ聞ヘケル、自然合戰ノ鹽合惡クメ、ナダレ立、行勢ノ二千三千伐ルヽ事ハ、昔ヨリ儘有事也、未聞太刀場ヲ不去終日戰ヒ暮メ、如此猛勢ノ伐ルヽト云事ヲ、サテ元綱ガ足弱共ハ、丹波ヲ指テ落行ケバ、跡問者モナカリシニ、此六郎ニ近付シ僧ノアリケルガ思樣、若亂ニアラズメ、此人角ナリ給ハヽ、サコソ勇々敷キトムライナンドモ可有ニ、犬(猜カ)エノコノ死シタル樣ニ、其シガイヲ

蓮池頽レ

一色義直六角高賴花御所ヲ攻メントシテ相國寺址ニ陣ス

サヘ不見事歎カシサヨトテ、陣屋ノ傍ニ卓ヲ一脚立テ、中隱(陰)ノ儀式ヲゾシツライケル、或時ハタチ計ナル御(マヽ)間ニ上(イーケ)エノ短冊ヲ硯バコノ蓋ニノセテ指置キケル、其歌ハ、

サメヤラヌ夢トゾ思フウキ人ノ烟トナリシ其夕部ヨリ

是ヲ能々尋聞バ、有(或)家ノ人ノ息女ト常々文ヲ通セシ其便トソ沙汰アリケル、此六郎十六歳ヲ一期トメ、ヤミ〳〵ト討レケレバ、ヲシマヌ人コソナカリケレ、〇重編應仁記ニ「又或説ニ、六郎ガ死ハマコトニアラス、六郎ハ此戰場ヲ迯レ出テ、出家トナリシトモ云傳フ」トアルノ外、異事ナキニヨリ略ス、

相國寺蓮池頽之事

相國寺既燒畢ヌレバ、初冬ノ時雨折ヲ得テ、紅葉散シク木葉ノ雨ニ灰燼ハヤ火濕烟納、昨日マデハ摩尼寶喜見ヲ欺シ妙莊嚴域ゾカシ、今日何ゾ燒野ガ原トナラントハ、爰ニ一色左京大夫義直、六角四郎高賴兩人ハ、責口ノスキマナクメ、先日合戰ニ不會事ヲ遺恨ニテ、花御所ノ北モミ飯ガ古屋敷、富樫介ガ跡ヨリ攻入ラントテ、佛殿ノ跡ニハ高賴ガ衆陣ヲ取ル、山門之アトヲバ義直ノ軍兵コソ堅メケレ、是ハ西面ノ諸塔頭ノ火、シメルヲ待トコソ

市民流離

見ヘニケレ、去ホトニ細川方ニハ、一條ヨリ北ハ出雲路、東ハ川崎ヲ領メ、詰城ニハ相國寺ヲ憑ヨリ外ハ亦無他所ニ、此寺既灰場トナリ、東ノ民家悉クムナシキ野トナレバ、陣中ノ老少男女、僧比丘尼、失魂消肝、取物モ不取敢、子ヲ逆ニ負、辷顛テ賀茂ヲ指落行有樣ハ、只淡津ノ原ノ秋風ニ、小花波寄如也、此故ニ搆ノ中悉ク周章サハイデ、タマルベシトモ見ヘザリケル、爰ニ一宮

一宮正梅自カラ奮テ總門ヲ守ル

正梅、（正字不知之）勝元ノ前ニ參申樣、抑干戈ト賴ミ思召安富民部兄弟ハ、石橋ニテ討死仕リ、又赤松衆ヲ始トメ、可立御用馬廻ノ衆モ、惣門ニテ數輩討レ、或ハ手負テ候也、長ナシキ面々ハ虎口々々ノ取合シゲクメ、拔足換手ヘキ樣モ不見候ヘバ、御大事ト存候、但シ某一人候ハヾ、一萬騎ノ兵ニハ可勝候、御心安思召候ベシ、若惣門ニテソレガシ討死仕ルト被聞召候ハヾ、其御覺悟ヲナサレ候ヘトテ、フスベ草ノ腹卷ニ同毛ノ五枚甲ニ高角打テ居頭ニ著、七尺三寸ノ棟ニ錢ヲ伏ル程ノ大太刀ヲワキニ舁込テ、惣門ヘ出、片閾ヲ開テ、二王立ニ立テ、敵ヲ麾テ名乘カケタル體ハ、正ク刀八毗沙門ノ如向阿修羅也、然

細川政之勝元ニ説キ西軍ノ相國寺址ニ陣セル

ル所ニ讃岐守政之四足ヘ馳向テ、京兆ニ向テ被申ケルハ、抑相國寺ノ燒跡ヲ敵軍陣取リ候ナル、若ツノ儀ニテ候ハヽ、此搆ノ通路聽テ可留存シ候、若

者ヲ撃退セントス

於留通路者、公方ノ御警固如何ガ被申候ハンヤ、先敵軍陣ヲ不取堅其前ニ、不被廻時日、急度諸勢ヲ指ツカワサレ、寺中ニ入ル强卒追出サレ候ベシ、若不然ハ、此城ノ軍勢ハ、皆不異圈蹄鼎魚ニ存候トゾ申サレケル、其時勝元、政之ニ對シ被申ケルハ、ソレガシモ其ノ義ニ候テ、先刻山名彈正忠ニ申遣シ候所ニ、近日百々ノ口ヲ相拘テ、晝夜トナク闘ヒ透シ候也、若某此口ヲ取リ退キ候ハヾ、搆卽時ニ可破之由被申候間、誰カ候ハンヤト被申ケル所ニ、秋庭備中守進出テ申樣、畠山左衞門督殿（政長）ヲ向ケ可被申モヤ候ラン、今千騎萬騎ヲモ驅頽スル人ハ、恐クハ此殿トコソ存候ヘト申ケレバ、京兆ゲニモ此人アリト被申テ、卽備中守ヲ使者トシテコソ被呼ケレ、政長、秋庭ト伴ニ被

勝元政長ヲシテ相國寺址ヲ回復セシム

出ケレバ、勝元向政長ニ被申ケルハ、相國寺ノアトニ引ヘタル敵ヲ不追落ハ、此搆可及難儀覺候間、如何ガ仕リ候ハンヤ、哀政長大將トシテ追伐セラレ候ヘカシ、若於御同心ハ、軍中專一ノ御高名、公私至德ノ御忠節ト可存候ト被申ケレバ、政長モ勝元ノ存分ノ如ク、若シ敵軍此儘募者ナラバ、我方トテモ如何ガアラント、浮沈至極ニ被存ケル間、不及思案領掌メ被申ケルハ、我々發向仕候ハン事安キ間ニ候ヘ共、去御靈合戰以後者、士卒悉ク牢籠メ、

政之東條元康ヲシテ政長ヲ援ケシム

政長必勝ヲ期ス

政長ノ計畫

纔二千不過小勢也ト聞ヘ候ニ、敵ハ某ガ同名右衞門佐ヲ始トメ、大内介、一色、土岐、六角ガ衆、凡ソ二三萬騎モ有ル樣ニ申候間、無加勢者如何成候ハンヤト申サレケル時、讚岐守政之、政長之無擬宜領掌セラレシ事ヲ感悦メ申サレケルハ、拙者モ同(時)事ニ罷向テ可致合戰候ヘ共、某ガ構ヘヲモ不打置敵取カケ候間、東條近(元康)江守ヲ召具セラレ候ヘトテ、東條ヲコソ被相添ケレ、近江守卽政之ノ下知ヲ承テ、政長ト一同ニ花御所ノ四足ヲ立テ、室町ヲ上ヘ打テアガラレケルヲ、見物ノ者共申アヘリ、敵ノ猛勢ナル事ハ、相國寺ノ燒跡ヨリ内裏マデハ尺寸ノスキマモナク支タルニ、此小勢ニテハイカヽ利ヲ得ラレンヤト、各氣ヲ込、息ヲ呑デ居タル所ニ、政長馬上ニテ自稱メ云、縱今敵百萬騎候共、何條切頽サデ候ベキ、相カマヘテ當陣ノ人々心安被思候ヘ、此合戰伐勝タスンバ、今度ノ弓矢ハソレガシ一人ノ惣贏ニテ可有候間、諸人證人タルベキ由ヲ罰テ透ラレケルヲ、後ニ思合レバ、此合戰ニ切勝ベキ事ヲ兼テ知ラレケルト、武勇ノ才ヲ不怖者コソナカリケレ、去ホドニ政長、普廣院燒跡ヨリ打出、東條ヲバ東河原ヘ打トヲシ、西ヲウケテ橫鑓ヲ入ヨトノ策事(ハカリコト)也、政長ノ其日ノ出立ハ、黑革威ノ腹卷ニ、ヒロ袖ツケテ、小泉甲

高賴ノ佛殿ノ址ニ義直山門ノ址ニ陣ス

神保長誠ノ策ヲ攻撃ズ獻

政長ノ兵奮進ス

東條ノ兵横ニ西軍ヲ衝ク

高賴ノ兵潰ユ

ノ緖ヲシメ、馬ヨリ下立テ長刀ヲツエニツキ、南ヲ屹ト見玉フニ、佛殿ノ跡ヨリ山門ノ前マデ支タル勢、凡七八千トゾ覺ヘケル、アレハ誰手ナルラント問ハルレバ、佛殿ノアトニ引ヘタルハ高賴ノ衆ニテ候、又山門ノアトナルハ一色殿ニテ御座候、其南惣門ノ前ノ石橋ヨリ下ヘ持續タルハ右衞門佐殿ニテ候ト答ケル、其時ニ神保ノ宗右衞門長誠、向政長申樣、抑無勢ニシテ多勢ニ逢事、軍義ノ大事テ候ハズヤ、爰ハ勢ヲ間(マ)荒(ハラ)ニ不遣、一所ニ潛デ懸リ候ハヾ、敵必小勢ナリト見カケテ、縅(ツ)マヌ事ハ候マジ、然バ其時一口ニ込カクル者ナラバ、何條頽サデ候ベキ、若後ニ殿(ヲク)ルヽ者候ハヾ、追立テ被進候ベシ、此衆千人一枕ニ討死センニ、利ヲ得ヌ事ハ候マジトテ、楯ヲ眞向ニ指笄(カサシ)、敵ノ虎口ヘ突カケテ、一二百帖ノ楯ヲ捨テ鑓ヲ入レバ、東ヨリ東條ガ衆二千計橫鑓ニカヽリケルガ、東條ガ先陣ニ進テ鑓ヲ入ルヽ、ジ討セジト郞黨前ニ立ントシ、政長、神保ト一所ニ討死セントテ、諸軍ヲ分テ虎口ヘ進ントス、士卒ハ主ヲ討セジト我モ〳〵ト進ミケレバ、其名聞ユル近江源氏、一時ハ拘テ戰ケレドモ、面ニ立兵者五六十人、枕ヲ並テ討ルレバ、葉武者ハナダレテノキニケル、山門ノ一色方(イニヒカヘタル)ハ、六角方ノ敗軍ニ鑓ノサバキガ不成メ、

義直ノ兵亦潰ユ

畠山義就戰ハントス

義就進デ政長ニ當ランドシ敗兵ニ堅ラレテ果サズ

是ヨリ後兩軍對持シ諸國大ニ亂ル

敵カト思ヘバ身方ノ弱郎、身方ト思ヘバ敵ノ强卒ニメ、敵身方ヲ不分、面ニ立石川九郎被討バ、ソノ儘蓮池ヘ巻キ込レテ、侍ノ首六百餘コソトラレケレ、其時ノ語鬪ニ云、先度花ノ御所ノツウ門ニテ、車八兩西陣ヘ引セラレシ首ノ返報、六角方ノ首ヲツヘテ八百此方ヘ給リ置候、不足ナリト御堪忍候ヘトゾ呼ケル、サテ義就ハ、惣門ノ石橋ニヒカヘラレシガ、呼甲斐庄云レケルハ、彼佛殿ノ北ニ打出タル敵ノ中ニ、騂小旗指ツレタル勢一二千見ヘタルハ、正シク尾張守ガ手ト見ユルナリ、此衆一手セズト云事アルベカラズ、佛殿ニ陣取衆ノ鑓前シドロニ見ヘタレバ、一定潰ナントト覺ユル也、爰ニ二番鑓ヲ造レト云モハテザルニ、頽レカヽレバ敗軍トヨセ合テ鑓ヲ釋カン樣ゾナキ、自其以後ハ敵身方共ニ戰イ羸レテ、互ニ弓箭ヲ停止、相國寺ノ間ニ要害ヲ搆ヘ、堀ヲホリ何ヲ期トモナク取合テ、山名方ヨリ鶴翼ニ陣ヲ張リ、細川方ノ口ヲトメテ、ムシ落サントシ、細川方ハ左衞門督ニタスケラレテ、乾鳥ノ出繳、鼎魚ノ水ヲ得タル心チメ、御靈口一ヲ守テ、魚鱗ニ城ヲ搆ヘテ、應仁元年ノ五月廿五日ノ寅刻ヨリ合戰始テ、文明九年丁酉十一月ニ至ル迄、十一年ノ間對陣メ、勝元ハ運ヲゾ開カレケル、雖然其敗北ノ衆諸國ヘ下、面々ニ分國ヲ領シ、押領寺社本所領、不屬京都間其天罰ニヤ、自敵出來メ、無爲無事ナル事更ニナク、都鄙遠境共ニ修羅道トゾ成ニケル、都テ諸大名ノ昔ヨリ在國スル事ハ無之故ニ、暫ノ程ト皆々被思召ノ間、京都ヨリ在京アレトノ召文アレバ、可有上洛禮物ヲ取テ、有心得之人、今如此トゾ申傳ケル、

○本書末項ハ、相國寺ノ戰ニ關係ナシト雖モ、便宜コヽニ收ム、

赤松政則ノ軍奮鬪ス

義政夫人等義政ニ避難ヲ勸ム

義政宴飲自若

〔應仁別記〕○上文ハ、浦上則宗、赤松政則ノ軍ニ至ルコトニ係ル、九月十八日ノ條ニ收メタリ、去程ニ同（十月）四日、（畠山）右衞門佐義就、同左衞門佐義統、大內新介政弘、相國寺ノ蓮池表ヘ打出、赤松次郎政則相向、數刻ノ合戰ニ一族太田三郎始トシテ、安丸與次郎以下赤松被官五十三人一所ニ討死ス、既ニ難儀也ケルヲ、浦上安丸河內守身命ヲ捨テ戰ケレハ、御所中ヘハ切入サリケリ、佛殿之燒跡一色大內衆責入ントシケルヲハ、赤松道祖松丸同伊豆守、武田治部少輔手ヲ碎テ防ケレハ、敵味方手負死人マテニテ、是モ責ハ入ラサリケリ、カクテ四方ヨリ時ノ聲天地モ動計ナルニ、餘烟八方ヨリ御殿ヘ覆ケレハ、御臺ヲ始トシテ上﨟、中﨟、局、町女房、輿ヲ醒、先鞍馬、貴布禰、北丹波邊マテモト、內々御臺樣被仰ケレトモ、御所樣ハチトモ御騷ナク、常ノ御氣色ニテ御酒宴ニテ有ケル、爰松田次郎左衞門尉

松田次郎左衛門尉杯酒ノ恩ニ感ジテ戰死ス

申樣、洛中ノ御合戰、今ハ限ト存候、御盃ヲ被下ハ生前ノ面目冥途ノ訴ニ仕候ヘシト申ケレハ、御土器ヲ被下ケリ、頂戴シテ我百年ノ命ヲ、君カ一日ノ恩ニ報トハ是ナルヘシトテ、獨言シテ罷出テ、遂ニ討死シケルコソヤサシケレ、角テ晩景ニ及テ、細川讃岐守成之我カ屋形ノマハリ堅固ニ持セテ、兵部大輔勝久打連テ、公方ヘ被參ケル、諸人ノ心中ニ、是ソ御所樣ヲ落シマイラセラルヽ、御警固ト意得テ、尾張守政長、山名彈正是豐、武田治部少輔、有馬上総介元家等御スヘヽハイリテ居ラレケル、讃岐守北ノ御門ヨリ御スヘヽ參リ、各目禮計シテ、ツト參ラレケルニ、御臺樣ヨリ春日ノ局ヲ以、此世中ノ有樣如何有ヘキ、一マツ鞍馬邊、若狹、丹波ノ方ヘモ御供申サレヨカシト思召ヨシ被仰出ケレハ、讃岐守謹テ承、御敵トモ蜂起トハ申ナカラ、此上ニ何條候ヘキ、我等名字ノ者五人モ十八モ討死仕テ候ハヽ、其時成之何方ヘモ御供申ヘシ、東西ノ敵ハ唯今被官ニ申付、追拂セ候ヘシト申テ追出（退カ）シ、御スヘヲ被通ケル時、旁ハ敵ヲ指置テ、爰ニハトイ（マヽ）ナリ〳〵出ラル、東條近江守出向、畏テ有ケルニ、急東西ノ敵トモ追拂候ヘキト下知セラレケル、則罷立テ少ノ猶豫ナク打テ出ス、大將ト云士卒ト云、勇々敷ソ見ヘタリケル、敵

細川勝久殿中ノ婦女ヲ勵マス

東條元康一色義直ヲ撃退ス

ニハ折節一色左京大夫入替テ有ケルニ渡合、唯一戰ニ追捲リ、一色被官石川佐渡守始トシテ、賴切タリケル兵討死ス、其頭共取、東條近江守本陣ニ皈、頸トモ卽實撿サセ申ケル、右衞門佐義就無念之由被申ケレトモ、旣ニ暮ケレハ敵モ味方モ陣ヲソ守ケル、爰ニヲカシキ事ノ有ケルハ、宗（惣）門ノ東ノ脇ニ浦上美作守楯ノ陰ニアリケル處ヲ、秋庭豐前守通リケルヲ、浦上言葉ヲカケテ、以外此口難儀也、秋庭殿御合力アレト云ケルヲ、此入道今度攝州猪取野ニテ迯破タリト云人口巷ニ滿タル叓ヲ思出シテ、イカニ浦上殿々々、某カ名ナ高クノ玉ソ、身カ名ヲ敵カ聞テハ、結句キヲヒ候ハンスルソト云テ打通ケル、是モ誠ハ名人ナレハト褒タリケル、○中略都ノ叓ヲ伊勢ニテ殿モ、アフナキ叓ト申也、世ノ有樣ノアサマシキヲ御覽シテ、公方樣、○八月二十三日ノ條參照、聞召セハ、十月一二日、一條東河原面、相國寺モ燒ヌ、室町殿御

日暮レテ兩軍交綏ス

義政ノ述懷

ハカナクモ猶オサマレトオモフカナ角亂タル世ヲハイトハテ

御所樣アソハサレケルソコトハリ成、勝元ノム子ト憑マレシ今度ノ亂モツハラナル安富民部モ、東門口ニテ討死シタリト聞召、イトヽアハレニ思召、御歎ハ無限、○下文ハ、二年四月九日ノ條ニ收ム、

○是ヨリ先、西軍、東將赤松政則等ノ兵ヲ東岩倉ニ攻メ、敗績セシコト、九月十八日ノ條ニ見エタリ、コノ後、勝元、西軍ヲ攻ムルコト、二年正月一日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

相國寺廢ス

〔京都御所東山御文庫記錄〕○諸寺　五山　山城

散說

索訶世界南瞻部夃大日本國山城州萬年山相國承天禪寺者、鹿苑院太上天皇未准天皇、任相國公之時、爲修三世心行、永德三年癸亥、創建之官寺也、承後小松帝之天命、而寺名相國承天、寔有以者也、雖然如此、至應仁丁亥之亂世、而諸伽籃罹其災、多年廢矣、○下略

朝枝經定吉川元經ヲ戸板ニ載セテ退ク

〔吉川家譜〕ニ經基（初名元經）○上文ハ略ス、上ニ見エタル吉川文書ニ同ジ、按スルニ、朝枝氏家系ニ、上野介經定、十月於鹿苑院口、飛礫疵二ヶ所、此時奉載玉臺（元經）公於戸板、引退北野トアリ、森脇氏家系ニ、七郎左衞門尉經卿（鄉カ）今出川合戰ノ時被疵トアリ、

讚岐ノ香川香西安富諸氏勝元ニ屬ス

〔讚岐國大日記〕後土御門帝應仁元年、細川右京大夫勝元、生于永享庚戌、山名金吾入道宗全生于應永甲申也、起於義政將軍之政道不直、勝元與宗全合戰、讚岐國士香川、香西、奈良、安富屬勝元、十月三日、京師相國寺炎上、其時安富民部丞元綱、見義爲勇而討死、○下略

〔讚陽簪筆錄〕○人品　讚岐　安富元綱、世々仕（住カ）大內郡、應仁之軍、促香西、奈良、十川之國士、屬細川勝元、應仁元年十月二（三）日、於相國寺軍討死、

赤松政則ノ部下中村五郎左衞門尉、美作ニ入リ、院莊ニ據ル、山名掃部頭ノ兵、妙見城等ヲ守リテ之ヲ拒グ、政則、更ニ廣岡祐貴ヲ遣ハシ、五郎左衞門尉ヲ援ケシム、

〔應仁別記〕サテモ美作國叓、山名掃部頭フマヘテ有シカトモ、大內新介（政弘）可到同道由被申間、打連テ上洛シ玉フ、○以上ハ、既ニ六月十三日ノ條ニ收メタリ、又赤松內ニ、中村五郎左衞門尉ト云者纔ニナリシカ、大功上ニ立ン叓ヲ朝暮希フ者ナレハ、傍輩トモ十八計相語テ、同十月三日切テ入、院ノ庄ヲフマヘ、數度大略利ヲ得シカトモ、東郡ヘ敵出テ、妙見ノ城、菩提寺○勝田郡豐並村、和介山等ニ籠シカハ、政則一名字ニ廣岡民部少輔祐貴ニ人勢ヲ相添テ差下ス、三箇年ノ間合戰無止時、乍去太町（マヽ）ハ山城ノ柏（狛）ノ城ニテ討死シ、掃部頭又病死シケル、其子彥房モ盡期山ノ合戰打負テ、伯耆國ヘ落行ケリ、粟井加賀、松原彈正、和介山ニ

テ討死ス、中村カ所々ニテ合戰筆ニ難盡、自是後ハ赤松三ヶ國手ニ入ケル、

〇下略、

〇是ヨリ先、山名掃部頭、赤松氏ノ兵ヲ擊退セシコト、六月十三日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

四日、丙申、前權大納言從一位正親町持季出家ス、

〔公卿補任〕四十二　前權大納言從一位藤持季、（正親町）五十三、十月四日出家、法名空慶、

〔諸家傳〕三下　正親町持季實季卿男、母、　應永廿二年誕生、〇正親町家譜、コノ間ニ「應永卅一年十二月廿五日元服、侍從、于時從四位下、」トアリ、同卅二年正月卅日任右權少將、五位下」トアリ、永享十年三月卅日藏人頭、廿四歲、于時從四位下、右權中將、〇正親町家譜ニハ「永享十年三月廿九日補藏人頭、同日轉右權中將、于時從四位下」トアリ、嘉吉元年三月十六日參議、廿七歲、右中將如元、〇正親町家譜「于時正四位上」トアリ、同年十二月十一日從三位、廿七歲、同三年三月十六日但馬權守、文安三年正月五日正三位、卅二歲、同月廿九日權中納言、卅二歲、同五年正月十六日奏兼官慶、同五年正月十八日右衞門督、同六年閏十月十七日轉左、寶德二年正月十日從二位、卅六歲、同三年三月廿六日權大納言、卅七歲、止督、超前權中納言具定卿、實鄉卿、長資卿等、享德三年正月五日正二位、四十歲、同年八月十六日辭、長祿三年十二月三日從一位、四十五歲、文正二年十月四日出家、五十三歲、法名空慶、

〇コノ後、持季薨去ノコト、文明四年七月十五日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

五日、丁酉、義就、義廉、持豐連署シテ、書ヲ東大、興福兩寺ニ遺リ之ヲ誘フ、

〔經覺私要鈔〕六十六　十月五日丁酉、霽、誠斜日如小春、

一、榮淸語云、東大寺□（興）福寺へ右衞門佐、（義就）管領武衞（義廉）（山名）□□□□（三人カ）連狀ニテ□（可カ）蒙扶持、然者可寄進領知之由申遣云々、東大寺返答ニハ、朝夕天下安寧懇祈致之條不珍次第也、殊如此承候上者、可致精誠之由返答云々、於興福寺者今日學侶六方へ可披露云々、返答之樣未聞、

〇コノ後、西軍諸將マタ連署シテ、東大、興福兩寺ノ僧徒ヲ誘フコト、二十五日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

九日、辛丑、淨土寺准三宮持辨寂ス、

〔後法興院政家記〕二　十月五日丁酉、天晴、參殿御方、自三寶院醍醐也有音信、淨土寺門主不例以外之間、附弟事被所望家門若公事、門主不例以外之間、附弟事家門若公政禪當年中入室候者可目出之由、自彼門跡被示送云々、有書狀、此事自去比內々雖有契約子細、依無庶幾、于今不及沙汰、雖然今自三寶院以傳申之間、先有御領狀、

政譚入室治定

若王子僧正入滅

義視ノ師

相國寺塔供養ノ唄師

第百五十四代座主

十五日、丁未、晴、去九日、(浄土寺門主入滅事、)浄土寺門主入滅云々、〇大乘院日記目錄ニハ、十四日ニ寂ストナス、

十二月十一日、癸卯、晴、參殿御方、(浄土寺候人參申、若公入室治定目出事、)浄土寺候人參殿御方、若公入室之事御治定之間、目出爲其禮參云々、(諸願院云々)年內入室事、旁難事行間、隨躰春中必可有其沙汰歟云々、涯分年中事可致奔走云々、殿有御對面、

〔宗賢卿記〕十月廿七日、明王院云、浄土寺(持辨)、梶井(義承)等門跡、幷若王子僧正等入滅云々、可尋知其日矣、〇義承ノ寂スルコト、是月(十四)日ノ條ニアリ、參看スベシ、

〔大乘院日記目錄〕三　十月同日、浄土寺准后義弁(持)入滅、新大納言殿本師也、

〔華頂要略〕百四十五　諸門跡傳六　浄土寺　山上本坊、號金剛壽院、當寺者、於東山粟田郷、明救僧正創立之、而文明十一年、大將軍義政公壞破當寺、被營別館、准北山金閣、號銀閣寺、

持辨准三宮　大將軍義持公息、實小川大納言(イ贈右大臣)滿詮卿息、師主慈辨僧正　應永六年九月十五日、相國寺塔供養唄師、同廿八年四月十日補天台座主、十九歲、同三十五年四月辭座主、

〔華頂要略〕百二十四　天台座主記五　第百五十四　持辨僧正(イ大)　浄土寺、大將軍義持公(イ滿)男、實贈左大臣滿詮公(イ寶篋院一品左大臣義詮公孫)男云々、浄土寺慈辨僧正入室、

應永廿八年四月十日(イ廿八)宣命、(イ任座主)十九歲、〇中略　同卅二年九月廿二日(イ廿日)拜堂、廿三歲、同卅五年(イ三)四月辭、

〔足利系圖〕滿詮　〇事蹟略ス、

世系

- 義運　大僧正、准三宮、
- 持辨　大僧正、浄土寺、准三宮、
- 義賢　三寶院大僧正、
- 持國　大僧正、
- 義快　地藏院、青蓮院門跡、

奉書

十六日、戊申、幕府、伊勢大神宮ニ、天下靜謐ヲ祈ラシム、

〔內宮引付〕

一、天下靜謐御祈禱事、近日別而可抽精誠之趣、可被下知兩宮禰宜中之由所被仰下也、仍執達如件、

應仁元年十月十六日

肥前守(飯尾之種)判

修理大夫(攝津之親)判

祭主二位殿(藤波清忠)

下知狀

之趣、御奉書案献之、且存知且可被下知二宮之狀如件、

十月廿一日　神祇大副判(藤波淸忠)、

大司御館

宮司告狀

案幷祭主下知到來、仍献覽之可令存知給候、恐々謹言、

十一月十九日　大宮司判

(荒木田)氏長

謹上　內宮長殿

皇太神宮神主

依御敎書注進、天下靜謐御祈禱、近日別而抽精誠間事

右去月十六日御奉書偁、同廿一日祭主下知偁、今月十九日宮司告狀偁、天下靜謐御祈禱叓、近日別而可抽精誠之由事、謹所請如件、者任被仰下之旨、天下靜謐御祈禱、禰宜等一同抽懇誠者也、仍注進如件、以解、

應仁元年十一月廿日

大內人(荒木田)安行上

禰宜從四位上荒木田神主氏經十八

○是ヨリ先、幕府、兵革靜謐ヲ大神宮ニ祈リシコト、五月二十九日ノ條ニ見エタリ、コノ後、神主等解狀ヲ上リ、假殿遷宮ヲ行ヒ、御裝束等ノ違失ヲ正シ、心御柱ノ顚倒ヲ改メラレシコト、二年三月是月ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

十七日、己酉、法皇、義政賦スル所ノ百韻連歌ニ勅點ヲ加ヘ給フ、

〔慈照院殿御吟百韻〕應仁元年十月十七日、法皇御勅點、

何人

とたれ木をそむる落葉の時雨かな
あらしそさはるひはらまたそら
雲もなきみねよこ不まる月いて、
夜るをとすこし山河乃なミ
誰か志くいはねよかゝる瀧まくら
苔のむしろは露そみたるゝ

應仁元年十月十七日

雨すくる庭のかるかや折ふして
野分のかせのあらきゆふくれ
なきいさる虫の聲々いとなきに
やゝはださむく秋ふくるころ
しくれふる袖にや霜を重ぬらん
ものおもふ身そとまてねられぬ
みたれたる世をのみなけく我こゝろ
竹のかきねのあれゝかくれ家
住なれて松を友なる山のおく
花ちりぬれハとふ人もなし
鳥かへる春の暮かさ物さひて
こゑ老になりのこるうくひす
あり明の月かきかすむ宮のうち
不のかに見ゆる神乃御あかし
古文をよめはなへ〳〵もし消て

すきはあらハに壁そこにほるゝ
あなかまや風にうらむるきり〳〵す
野邊のまくすのしさ葉ちる比
はきなしな秋をもしらぬ岡の松
まつになみたの露そふりそふ
ひとりねの袂に月や深ぬらん
來ぬ夜をはくる鐘のねもうし
あひみしもはかなき夢の別路に
こてうとひかひ春そ暮（イすき）ゆく
花園のうつろふあとハふりはて、
志賀の宮こにのこるさくら木
唐崎や行幸せし代ハ程とをし
なへぬまつりハ時をたかへす
宿ことの星の手向の秋をへて
てらも雲ゐの月そさやけき

應仁元年十月十七日

霧はれて數こそみゆれ天津鴈
いなはのかせや露そらぬらん
を山田のかりほの眞萩ちりにけり
えとのちきりのかはる身そうき
とたゆる中はそのまゝとひ絶て
いつをかたりのなさけなりけむ
忍ふそよむかしの友もなくなみさ
軒もる月のかすむふる郷
くちのこる梅やなえ〳〵にほふらん
柳はあせそなくとしえなき
のどかなる暮にかゝりの鞠の音
ふむやいさこは沓の跡あり
降しきる汀の雪に鴨おりゐ
あ浦、入江のあしのむらさち
難波人なく火かすかに消殘り

こや身にしめと衣うつころ
夢なへておたこそあかせ月の本
とはれぬ床にかよふ秋かせ
音をそなくあふてふをやかさ鵲
ふりにもせめてちきりをかはや
山なあミ花をきなえと人まちて
くらしそまふる春雨のそら
はく〳〵となすをなくて日はなかく
身はつらつるにかゝるくるしき
老ぬれはなゝ脇息をちからにて
手にとる經のこゑそきこゆる
わりえてやいとゝなへなる法の華
しれは衣の玉もあくきれ
うた名ゆへなみされ袖に猶おちて
ゐのふる文もよそにもきけり

應仁元年十月十七日

鴈の行すゑは霞や消ぬらん
雪こそのこれこしひと淺山
春はまさ風から海の興つなみ
けふはつりふもいてぬうら人
松原の木陰に網を懸ほして
ゆふ日見へすく雲のをち方
いくたひか月待秋の時雨らん
なみさもしかやつまこふるこゑ
おもふこともるや早田乃ほのめかし
いかてそとしをふる乃山かせ
わきかへる瀧つ心をなをせきて
いしまのし水むすふすゝしさ
ふねとむるいそへの松の木がくれに
よ川や千鳥乃うらつたふ聲
埋れぬ雪には遠き跡みえて

けふりやしるへかよふ炭やき
山かけてかすめるをのゝ下もえに
さとはいく田のわかなつむらむ
作るへき賤か苗代しめをたて
水のなかれそ聲あまさかる
よむ歌に古今の名もしるし
なをくちならぬ柿のもとつ葉
秋ふかくなるや木のみはおちそひて
外山の月にさるさけふなり
寐覺にや衣うるほす旅乃空
わかふるさとをこふるよな〳〵
いとちかく音こそすまのうらの浪
あかしのせとをかよふえや舟
時鳥幾聲鳴て過ぬらむ
五月雨はるゝをちの山々

應仁元年十月十七日

入日さす麓のあふち色ハへて
むらくく雲のあひく半天
劔こそ國をれさむる寳なれ
神のしるしを實(イ君)そうけつく

十八日、庚戌、京極持清、其子勝秀ト倶ニ近江ニ至リ、六角高賴ノ部兵ヲ高瀨城ニ攻メテ之ヲ陷イル、

〔今井軍記〕高遠美濃守

應仁元年、中務少輔殿(京極持清)、正覺院殿(京極勝秀)、六角殿(高賴)御取合、十月十八日御下向、十二月十三日まて、私宅ふはしく御供仕、下ノ手仰付らま、北郡磯野寄族衆同道仕、下安食(近江犬上郡)ふ陣取、高瀨城攻落、御敵數十八の頸取、次の年甲賀御出陣仰付られ、大佐治南山ふ固む、

〔前田家所藏文書〕別本

野田彈正忠泰忠軍忠事○中略、全文ハ、正月十五日ノ條ニ收メタリ、

一、惣門之御搆、六角殿御拘之處、就江州御敵蜂起下向之間、爲西岡中脉之輩可相固之由被仰付、霜月廿七日、其年中相拘之、

右所々忠節大概注進如件、

親舍弟ト雖モ私ニ音信セズ

三隅福屋二氏ノ庇護ニヨリテ宥サル

文明六年三月日

一見了判(勝元)

○コノ後、勝秀、觀音寺城ヲ陷イルコト、二年三月二十八日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

吉川元經。左近將監武經ノ還住ヲ許ス、是日、武經、誓書ヲ元經ニ致ス、

〔吉川文書〕原題吉川家什書 二諸家狀

就愚身上短慮、還住之儀、致侘事之處、御赦免之上者、爲對元經并御子孫、不可有余儀緩怠、旨大師勸請之記請文、令言上條々事、

一、親舍弟之事、一段緩怠之間、於御意不容者、音信不通、敢不可許容也、

一、雖致他家當方緣者近付、御意之外、聊不可知音扆屭偏頗事、

一、我々事、以三隅殿(長信)、福屋殿(國兼)御扶持、雖御免候、如此旨證文言上之間、自今日而不可憑他之力事、

右條々聊有違犯之儀者、勸請申之處、可蒙諸天諸聖之御罰者也、

至心合掌稽首和南、三世十方盡虛空遍法界諸佛如來、應正等覺諸大菩薩摩訶薩、總忩怒聖衆、一切聲聞、辟支佛衆、梵王帝釋、四大天王、十二天、十八天、

五世八天、日月五星、二十八宿、堅牢地神、大辯(辯)才天、
維應仁初元歲次丁亥十月十八日　「名字不知」左近將監　武經血判　○江田左近將監疵ヲ蒙ルノコトハ三日ノ條ニアリ、

海野氏幸、村上賴清ト戰ヒテ敗死ス、賴清其所領ヲ奪フ、

〔守矢氏舊記〕○坤信濃　此年、(文正二年)海野大亂、村上切勝、所領被持候、

〔參考海野歷代記〕二十六代氏幸小太郎、信濃守、又伊勢守、後花園後土御門兩朝、承家三十年、　矢島家傳曰、應仁元年丁亥十月十八日、村上左京大夫賴清ト戰ヒ討死、小縣郡開善寺ニ葬ル、近來地ヲ掘リ所出寶印塔一面アリ、其文ニ曰、爲相當過天定阿彌禪門今猶存ス、豈氏幸ノ墓ナル歟、

〔附錄〕
文正二年丁亥、花會、即應仁元年、此年、海野大亂、村上氏切勝、海野所領ヲ奪フ、

〔守矢氏舊記〕○坤信濃　岩下治野(海カ)滿幸、此歲(應仁元年)十二月十四日、於海海(野カ)打死候、子息二歲ニテ御頭被勤候、○上下略

十九日、辛亥、臨時敍位、

〔公卿補任〕四十二　參議正四位上藤(坊城)俊顯　十月十九日敍從三位、
參議正四位下源(堀河)具茂　十月十九日敍從三位、
非參議從三位藤(飛鳥井)雅康　十月十九日敍、父前權大納言雅親卿、實者弟、母、
非參議從三位藤親宗　十月十九日敍、父故正三位親繼卿男、母、
非參議從三位藤雅遠　十月十九日敍、元左中將、父入道從二位雅豐卿、母、
非參議從三位菅顯長　十月十九日敍、父贈大納言長政卿、實故權大納言菅在豐卿二男、母、
非參議從三位菅(東坊城)長淸廿八、十月十九日敍、父前權大納言益長卿、母、

大內政弘、相國寺ニ陣シ、義就、山名氏第ノ西ニ陣ス、

〔經覺私要鈔〕六十六　十月十九日辛亥
一、京都事、大內介(政弘)陣替云々、相國寺內ニ居、餘程大勢云々、於右衞門佐(畠山義就)者、山名屋形西ヘ取陣云々、朝倉可爲一所由申云々、

廿日壬子
京都之儀延々由有其聞、一天下煩言說難及者也、
○是ヨリ先、政弘、船岡山ニ陣セシコト、八月二十三日ノ條ニ、義就勝元

東西兩軍對持ノ狀況

ヲ攻メ禁中ヲ奪ヒテ之ニ據リシコト、九月十三日ノ條ニ見エタリ、コノ後、東軍、政弘ノ船岡山ノ營ヲ攻メ、之ヲ火クコト、十二月七日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

〔參考〕

〔應仁別記〕○上文ハ、赤松氏ノ兵、美作ニ戰ヒテ敗退セシコトニ係ル、六月十三日ノ條ニ收メタリ、角テ京都ノ趣、山名殿東ノ門ノトヲリハ藥師寺與一取向フ、芝ノ藥師ハ太田(垣カ)鹽土佐守備後衆相抱ケレハ、悲田寺、能成寺、只安富又三郎取向フ、安居院口ハ鹽冶周防守相抱ハ、讚岐國上田衆、近江國ノ今井礒野衆相向フ、大宮ハ山名兵部少輔政清被相抱、實相院ノ內ハ畠山尾張守相向、小河坊城殿燒跡ハ細川下野守相向、又勘解由小路武衞へハ細川讚岐守取向、同兵部大輔相向、(惣カ)宗門南ヨリ巽ノ角マテハ赤松次郎相拘、土岐美濃守、大內新介相向、公方樣三間御厩ノトヲリ赤松七條又次郎政資拘、七間厩ノトヲリヨリ八幡ノ艮ノ角ハ赤松伊豆守相拘、畠山右衞門佐義就、同左衞門佐相向、此ウラムカイ相國寺佛殿燒跡眞中(ナカ)ヨリ、毎日此構ヨリ、出合野伏有ケル、彼燒跡イサヽカ石サシ高ケレハ、競ノ方コレヘ取アカリ、ヲクレタル方追被下ケリ、巽ノ角ナトハアマリニ

赤松貞村ノ兵義就ノ兵ト日ニ相國寺址ニ相戰フ

アヒチカクナレハ、出合叓細々ナカリケリ、伊豆守構ノ北ハ伊勢守、其北ハ細川和泉ノ兩守護、猶其北ハ淡路守、西藏口ヲ武田相拘、後ニハ北白川へ城廓ヲ構、江州ノ通路ヲスル間、別人相拘、賀茂口馬場ノ通ハ山名彈正忠相拘也、後ニハ備後下向也、四國西國通路ハ、長坂峠ニ、丹波國住人宇津佐々井兩人關ヲ居テ守テ、上下ノ人ヲ通ケリ、畑井田賀茂ヲ通ケリ、又勝元依訴訟伊勢へ下リシ人々モ召返ケリ、所謂一色治部少輔、同左馬助、同上野、刑部少輔、有馬右馬助、伊勢備中守、佐々木大原判官、結城下野守、荒尾治部丞、進士美濃守、齋藤兵衞尉、同藤五郎カ子息等也○下文ハ、赤松氏ノ臣中村五郎左衞門尉、美作ニ打入ルコトニ係ル、三日ノ條ニ、又一色治部大輔以下室町第ヲ逐ハレシコト、八月二十四日ノ條ニ收メタリ、

義政曩ニ逐ヒシ近臣ヲ伊勢ヨリ召還ス

二十日、壬子、和泉守護細川持久、同常有、淡路守護細川成春等、各兵ヲ率井テ、丹波ヨリ入京ス、

〔宗賢卿記〕十月廿日、和泉守護、幷淡路守護(細川成春)等通氷所○丹波桑田郡上洛、被示案內者也、

〔後法興院政家記〕二十月廿日壬子、晴、早旦參殿御方、乾方有火事、嵯峨云々、和泉兩守護、(細川持久、同常有)播磨奧郡勢等上洛云々、

〔前田家所藏文書〕別本

野田彈正忠泰忠軍忠事〇中略、全文ハ、正月十五日ノ條ニ收メタリ、

一、殘御被官人衆、同淡路殿、和泉兩守護殿上落、（洛）依被仰付路次案內者罷上、御構致祗候事、〇中略

右所々忠節大概注進如件、

一見了判（勝元）

〔經覺私要鈔〕六十六

十月十三日乙巳

今日泉兩守護可着南都之由有其聞之間、勝觀房等兩三人覺朝以下召具、柿寺ヘ罷向、暫雖相待、曾以無其儀之上、今日ハ虫氣聊間斷之間、召寄輿向禪定院、

二十五日、丁巳、西軍ノ諸將、復タ連署シテ、書ヲ東大、興福兩寺ニ致シ、勅書內書ノ下レルコトヲ傳ヘテ之ヲ誘フ、

〔經覺私要鈔〕六十六

十月廿九日辛酉、霽

一、戌下刻楠葉新右衞門尉元次自京都下向、西方大名八人以連狀申寺務云々、

就今度世上時宜、已前具如令啓候、近日御成敗悉右京大夫（細川勝元）自由之所行候、既被成勅書御內書候、殊昵近之衆大略此方馳來候、以是等上意忝之趣可有還迹候、然上者公武共以御無爲之儀必□（定）□（候カ）又可然在所可奉寄附候、尙々御同心各可爲抃（抃）悅候、恐々謹言、

十月廿五日

謹上　興福寺々務

美乃守（成賴）判　土岐

兵部少輔（山名政淸）判　山名一族

大內介（政弘）

相模守（敎之）判　能登守殿

左衞門佐（畠山義統）判

一色

□□□□判

□□□□判（山名カ）

□□□□判（畠山）

左兵衞佐判　管領武衞

□（朝倉）□孝景自是可付遣□

□管領申云々、

東大寺ヘ同文擧狀在之、則付遣了、

〇是ヨリ先、勅書及ビ內書ヲ興福寺ニ下シ、コト、三日ノ條ニ、義就、義廉、持豐連署、天下安寧ヲ興福東大兩寺ニ祈ラシメシコト、五日ノ條ニ

見エタリ、竝ニ參看スベシ、

二十六日、戊午、幕府、西岡ノ民ニ命ジテ、東寺領山城上野莊拜師東西九條、植松莊等ノ半濟、及ビ東寺八幡宮領山城久世上下莊ノ違亂ヲ停メシム、

〔東寺百合文書〕ヲ之部一至十三

東寺領山城國上野庄拜師東西九條植松庄等事、混西岡半濟類違亂云々、太不可然、早加下知、可被止其綺之由候也、仍執達如件、

應仁元　親基（花押）

十月廿六日　貞基（花押）

西岡面々中

〔東寺百合文書〕京之部三十八至目錄外

山城國久世上下庄事、爲東寺八幡宮領之處、違亂云々、早加下知可(被)請止其妨之由候也、仍執達如件、

應仁元　齋藤民部大輔

十月廿六日　布施下野守　親基（花押）

半濟ヲ止ム

衆徒一味セズ

貞基（花押）

西岡面々中

山城國久世上下庄事、爲東寺八幡宮領處、違亂云々、早可被止半濟儀之由候也、仍執達如件、

應仁元　親基

十月廿六日　貞基

右京兆代

○是ヨリ先、西岡地頭等、畠山次郎ノ入京ヲ拒止セシコト、六月十七日ノ條ニ、幕府、勝元ニ西岡寺社本所領半濟ヲ給セシコト、八月二十七日ノ條ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

是月、天皇、法皇、延暦寺ニ幸セラレントシテ止メ給フ、

〔後法興院政家記〕ニ　十月廿一日、癸丑、陰、入夜雨下、京都去四日以後無合戰云々、主上、仙洞山門ヘ可有臨幸之由有沙汰、然而衆徒等不一味間、不可有其儀云々、

官歷

勅使ヲ義就、義廉等ノ營ニ遣シ、兵ヲ戢メンコトヲ諭シ給フ、

〔後法興院政家記〕二　十月廿三日、乙卯、或晴或陰、傳聞、此間以勅使、畠山(義就)衞武(義廉)(武衞カ)等陣ヘ被仰遣有子細間、近日一途可有落居歟之由有世風(聞脱カ)云々、太不審也、

○コノ事、或ハ一時ノ風聞ニ止マルモ知ルベカラズト雖モ、姑ク本文ニ據リテ掲書ス、

前左大臣從一位三條實量出家ス、

〔公卿補任〕四十二　前左大臣從一位藤實量(轉法輪三條)五十三、十月日出家、

〔諸家傳〕二上　後三條左大臣　三條實量、元│尚、改│教、又│量、公冬公男、母水無瀬左中將女、　應永廿二乙未年誕生、正長二年八月卅日從三位、十五歲、左中將如故、父前右大臣公光公亭依爲皇居賞也、　永享二年正月六日從二位、十六歲、中將如元、越階、　同年三月卅日越中權守、同四年三月日權中納言、十八歲、　同十二年正月六日正二位、廿六歲、　文安四年三月廿四日兼右近衞大將、卅三歲、　同五年正月十六日拜賀、「(朱書)寶德二年白馬內弁、于時權大納言大將、」寶德二年六月廿七日內大臣、右大將如元、卅六歲、「(朱書)任大臣節會內辨、權大納言通尙卿、」同三年三月日辭大將、同四年十月日辭、享德二年正月五日從一位、卅九歲、　長祿元年六月十七日右大臣、四十三歲、年月日辭、長祿三年十二月八日左大臣、四十五歲、以左大臣押關白上、依位階上臈可

法名

梶井准后

官歷第百五十五代座主

第百五十七代座主

也、但依關白無一座宣下也、同四年七月廿七日辭、應仁元年十月日出家、法名禪空、

○コノ後、實量薨去ノコト、文明十五年十二月十九日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

前天台座主准三宮義承寂ス、

〔後法興院政家記〕二　十月卅日、壬戌、晴、傳聞、此間梶井准后、○中略等之僧正死去事、○中略梶井准后入滅云々、

〔大乘院日記目錄〕三　十月日、梶井准后義承入滅、新大納言伯父、○下略

〔常樂記〕　應仁元年丁亥、梶井准后御入滅、

〔華頂要略〕百二十四　天台座主記五　第百五十五　義承大僧正　圓融坊、號梨下准后、　鹿苑院義滿公男、梶井明承親王弟子、(イ師主僧正相嚴)應永卅五年(イ正長元年四月十日)四月五日宣命、于時執當兼舜、永亨(享)三年八月辭、

第百五十七　義承大僧正(イ准三宮)(イナシ)圓融房、　永亨七年四月八日(イ廿三)還補、于時執當堯全、同月廿三日受宣命歟、嘉吉元年爲准三后、元大僧正、○下略

〔華頂要略〕百四十一　諸門跡傳二　圓融坊　在東塔、梨本號榮光坊、在京洛、梶井號圓德院、在東坂本、

義承准三宮　鹿苑院入道相國義滿公息、明承親王弟子、　應永十九年三月十日入室得度、正長元年四月十日補天台座主、永享三年辭座主、同七年四月廿三日還補座主、嘉吉元

世系

年月日任准三宮、(元大僧正、)文安四年辭座主、應仁元年五月廿五日入大原、(御宿坊來迎院、)(南坊號淨蓮華院、)同年八月十六日門跡近邊軍勢亂入、西坊炎上、自九月一日御門跡勤行、於南坊被勤之、本尊聖教等連々移南坊云々、同年十一月入滅、

〔尊卑分脉〕(九)清和源氏　足利

義滿○事蹟略ス、
- 義敎○事蹟略ス、
- 法尊大僧正、准三后、御室、
- 尊滿山、僧正、法性寺座主、青蓮院、應永十遁世、一品尊道入道親王弟子、
- 義承山、天台座主、大僧正、梶井、
- 義隆禪、
- 義昭東、准后、大僧正、大覺寺、

○是ヨリ先、義承ノ亂ヲ大原ニ避ケシコト、五月二十五日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

十一月大癸亥朔盡

四日、丙寅、幕府、山城北岩倉西八鄕內玉泉庵田畠山林ヲ闕所地ト爲シシモ、實相院門跡ノ管地タルヲ以テ、同門跡ヲシテ領知ヲ全クセシム、

〔實相院文書〕(愛宕郡)○山城一

山城國北岩藏西八鄕內玉泉庵田畠山林等事、爲闕所雖壹岐宮內少輔申給、當門跡檢斷以下進止之上者、可被全領知之由、被仰出候也、仍執達如件、

應仁元
十一月四日　(飯尾)元連(花押)
(布施)貞基(花押)

實相院門跡雜掌

八日、庚午、仁和寺眞光院前大僧正禪信寂ス、

〔東寺長者補任〕五

應永廿八年、禪信去年六月加任、○二長者、去年夏比炎旱、於神泉苑被修孔雀經法、爲勤仕阿闍梨、俄加任宣下云々、同卅三年十二月間拜任、○一長者、追可尋勘之、未長者依爲宿老、面々辭退、同卅四年(後七日法參勤、三月自眞光院、)廿一日、灌頂院御影供々養法事、以定額一﨟令勤之、於拜堂者可延引也、粗有其聽、別當方被相尋處、寺務御返事趣、舊冬寺務拜任刻、拜堂延引事所申請也、

寺衆其先規ナキヲ争フ

仙洞御室竝ニ禪信ヲ可トセラル幕府之ヲ不可トス

勅書案

仍延引治定云々、加定額評定、先規更以無之旨、及度々雖申入、猶延引可有之由被仰、結句未拜堂輩、寺內出入例、先規有之云々、然者以其例、今度雖爲未拜堂、入寺々家、而可勤供養法之由、被仰遂畢、先規｜者寛信々忠例云々、於此兩條者、依爲大禮以前、雖爲未拜堂、寺內出入旨所見古記也、於今度自由延引、更以非准據、所詮及度々、盡先規雖申入、寺務御返事、只同篇而無落居、此上者、先御室申、不事行者、仙洞樣可申入、定額評議治定了、御室列參、兩人年預寶嚴院寶淸法印、寶泉院快壽律師、

御室御返事趣、寺務返事同篇於無落居、取調一門門跡意見之狀、相副、寺家目安、武家樣申入、先以目安管領申入、則以奉行加賀守披露之處、折節三寶院室町殿御修法中間、御所中御座間、從上樣以奉行加賀守有御尋處、先規無其例之由有御返事、仙洞幷御室非例御沙汰也、依被思食、大覺寺殿有御再任、御影供々養法可有勤仕之由、仙洞御執奏、同廿日宣下云々、

一、意見狀人數　三寶院　大覺寺殿　金剛乘院　理性院　水本　慈尊院

其外數通有之、

一、勅書案

御室御書案

東寺僧綱等ノ上書

窮困ト稱シテ拜堂ヲ遂ゲザルハ未聞ノ新儀ナリ

來廿一日、東寺御影供寺務僧正參勤事、依遂（未遂カ）未拜堂、手代事、仰定額申候之處、及異儀云々、先規之上者、何申子細哉、嚴密加下知、追怱々可遂拜堂之由可被仰含禪信僧正候也、謹言、

三月八日　御判

一、御室御書案

御影供事、自仙洞如此被仰出候、此上者怱々被仰定額、可被執行候也、謹言、

三月八日　御判

東寺現住僧綱大法師等謹言上、

請殊欲蒙一宗諸門跡御意見、當寺務依不被遂拜堂、灌頂院御影供々養法被權（推カ）寺家供僧一﨟之間事、

右謹考故實、去延喜年中、觀賢僧正爲重尊師之儀、致如在之禮、自掬濆瀁之水、手拾禪林之菓、於灌頂道場奠大師眞影已降、事既成恆規、其儀于今新、依之一門僧經（綱）守﨟次致執事役、一宗長者抽懇精、勤供養法、長者若有公儀、幷病暇等故障之時、定額一﨟致其沙汰事、古今之流例也、而今度當寺務眞光院稱窮困、依不被遂拜堂、被權（推カ）寺家一﨟之條、前代未聞之新儀也、若今度被募此儀者、後

り

一宗ノ大事

代無力之輩雖居此職、引今之非儀爲例、豈可被遂拜堂之節乎、若爾者職之零落、宗之陵遲、何事如于此乎、因玆寺僧等致訴訟之處、稱有寬信法務幷信忠僧正之例、雖爲未拜堂、出入寺中、可勤供養法云々、是亦以外之參差也、如彼兩例者、依爲大禮已前、雖爲未拜堂、被勤供養法、更非自由之義者也、以此旨重致愁訴之處、無其理之餘、恣被奉掠天聽之條、言語道斷之次第也、所詮一宗之大事不可過于此、何偏費定額等若勞（苦カ）乎、偏欲蒙一門之御意見、若所申應其理者、早於此連署之奥、各可被加御署御署次第不同、者也、然欲以一同之申狀、奉仰上裁理訴、若達上聞者、裁訴何停滯乎、仍現住僧綱大法師等謹連署之狀如件、

應永卅四年三月日　私云聖淸之作

就寺務拜堂延引、連署狀令披閱候了、可得其意候也、恐々謹言、

三月廿日　法印賢長

謹上　東寺供僧御中

就東寺々務拜堂延引事、寺家被歎申之趣承候了、誠不違先規歟之由存候也、恐々謹言、

三月廿日　僧正宗觀

東寺供僧御中

就寺務拜堂延引事、寺家申狀之旨、加一見了、衆儀之趣可得其意候也、恐々謹言、

三月十八日　僧正隆寬

東寺供僧御中

再ビ一長者ト爲ル

拜堂

永享五年十二月廿七日長者宣下、法務同日參賀、引物執行方許無之、後七日法勤之、拜堂三月廿一日、同御影供行之、凡僧別當宗賢法印號觀智院、目代淨聽、執事妙法院賢快、

上卿中御門中納言

永享五年十二月廿七日　宣

僧正禪信

宜爲如舊東寺長者、

藏人頭左近衞權中將藤原隆遠奉

同法務宣下有之、

三タビ一長者トナル

永享六年七月十三日宣下、賢快入滅以後、十八ヶ日無寺務之再任、珍皇寺散錢以下知行之、諸職如元、

上卿日野中納言

永享六年七月十三日　宣旨

僧正禪信

宜爲如舊東寺長者

藏人左少辨藤原明豐奉

四タビ一長者トナル
拜堂御影供供養法ニ出仕ナシ

長祿二年、再三宣下、今度不可及參賀之由、被相觸之、去年十月十六日宣下、別當宗杲僧都、同年十一月十三日拜堂、御影供々養法寺務無出仕之間、供僧一﨟宏寬法印行之、片壇師公杲法印定額四﨟行之、執事二人寶幢院大覺寺權僧正實乘、皆明寺仁和寺權僧正能春、同四年寬正元、去年十二月九日、前大僧正禪信故障已後未補之間、去長祿元年十月九日任供僧中連署之狀、廿八日修正、以折紙相觸之、

別勅ニヨリ後七日法ヲ行フ

後七日法延引、三月六日、爲後七日法始行、先寺務前大僧正禪信別敕之由有奉書、仍同自八日、於大里內裏紫宸殿行之、同十四日結願之、於小御所加點有之、如例差圖在別、〇差圖所見ナシ、

五タビ一長者トナル

四月十九日宣下、同日寺務相觸之、不及參賀、六月廿九日、食堂佛舍利根本三粒外分散、根本水輪納之、不知數、小箱今寶藏納之、巨細別紙有之、〇別紙所見ナシ、

〔仁和寺諸院家記〕眞光院　前大僧正禪信洞院大納言實信卿息、受灌頂於禪守僧正、十九、後常瑜伽院御室御附法重受、廿三、　應永廿年六月十五日入室得度、十四、同廿五年正月廿五日於甘露王院入壇、十九、于時僧都、同廿七年庚子七月朔日任權僧正、廿一、同月日加任東寺長者、同三十三年丙午十二月十八日寺務宣下、同三十四年十一月廿一日爲禁裏御祈於仙洞、率六口伴僧、藥師法修之、于時年廿八、永享五年癸丑十二月廿九日法務宣下、（七）應仁元年十一月八日入滅、六十八、〇仁和謝法記同ジ、

石山寺座主

〔石山寺座主傳記〕〇近江　第廿一座主禪信大僧正　按、禪信大僧正、洞院大納言實信卿息、後常瑜伽院御室御附法、又禪守附法、仁和寺眞光院、又號成就院、

舊記云、眞守座主牢籠之刻、新被任座主職了、就而非師資相承之間、可斷絕之

條、令歎思給之處、杲雅法印極此流之奥旨由、無其隱之間、對彼終令繼脈畢云々、

四タビ長者法務ニ補ス

當寺座主職、以法流相承爲規模之事、右禪信僧正自記分明者歟、院家記云、眞光院前大僧正禪信、洞院大納言正二位實信息、應永七年誕生、同廿年六月十五日入室得度、十四、應仁元年十一月八日入滅、六十八、寺務法務再三宣下、成就院等數ヶ院領之、委細如記、其餘行狀出諸書、今略之、

〔傳燈廣錄〕廣澤方　東寺百四十八代長者仁和眞光院禪信傳

法務名禪信、字義明、嗣眞譽灯、厥暉光蔓衍于諸方、詔爲東寺百四十八世法務、亦復百六十四代、百七十四與五、四般敍長者法務、諒爲希有、惜矣哉、無曲記、故不悉也、付法九人、

付法

敎實曰宰相闍梨、寬驗曰紀伊上人、覺延曰少將闍梨、玄睿曰月輪房闍梨、覺義曰圓惣房、玄証式部少輔維光之子、隆信明禪院住持、行延少將法眼、宗禪曰光法房法橋、

石山坊ニ於テ寂ス

〔常樂記〕應仁元年丁亥、眞光院僧正逝去、於石山坊、

九日、辛未、勝元、丹波栗作郷地頭職内田畠山林金屋村ヲ久下三郎ニ還付ス、

〔久下文書〕○丹波

割分ノ地

丹波國栗作郷（氷上郡）地頭職内田畠山林金屋村、久下隼人佐重直跡事、爲割分之地上者被返付訖、任代々御判以下支證之旨、可被全領知之由、所被（仰下也ノ誤カ）遣仍執達如件、

應仁元年十一月九日　右京大夫（細川勝元）

久下三郎

久下三郎（政光カ）殿

山名敎言、等持寺院領備後信敷東西代官職ヲ山内豐成ニ預ク、

〔山内首藤文書〕三豐成上

等持寺院領備後國之内信敷東西代官職事、尤此方被官之者ニ可申付候へ共、以各別之儀、其へ預ヶ進候、有限年貢本役等、如先々嚴密ニ可有執沙汰候、若有難澀之儀者、可違變申候也、恐々謹言、

應仁元　十一月九日　（山名）敎言（花押）

山内新左衞門尉（豐成）殿

進候

十日、壬申、義政、五十韻連歌ヲ行フ、

〔愚句〕○後鑑百十九、義政將軍記附錄九所載　十一月十日、五十韻連歌に、

いくたひ春をまたひきつらん
ちりし後又さく花もうつろひて
おくなりけりはみえぬ山てら
おこなひにあらふ閼伽つき音おかし
心さへなをすみのふるをのねに
さとはかつらのやとにふりゆく
あたゝめ酒のきくのさかつき
みる人のよはひなる月かけたかく

十一日、癸酉、朝倉孝景、越前足羽神宮寺執當ニ、社莊毎月ノ神供ヲ安堵セシム、

〔足羽神社文書〕○越前

（越前足羽郡）社之庄神宮寺毎月晦日神御□□○原本供米ノ二字ヲ塡ス、事、如先々不可有相違之状如件、

應仁元
十一月十一日　　孝景（朝倉）（花押）

執當殿

姫山城
庄山城

赤松政則、播磨姫路城ヲ修メテ之ニ居ル、

〔嘉吉之記〕○播磨 滿祐弟義雅孫次郎法師丸トテ、五歳成ヲ召テ、敍三品、兵部少輔政則賜官府宣旨、加賀半國拜領、于時長祿二年八月（マヽ）、而后克復播磨備前應仁元年十一月十一日、再營姫路城居之、而亦治美作、果播磨備前復田（旧）領、○上下略

○コノ後、政則、置鹽城ヲ築クコト、文明元年是歳ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

〔參考〕

〔播磨古城記〕○播磨

姫山城　飾東郡　國衛（衙カ）庄姫路

城主赤松筑前守貞範、圓心ノ次男、貞和年中、此山ニ新城ヲ築ク、是當城ノ始ナリ、後亦同郡庄山城ニ移リ居シ、家臣小寺肥前守頼秀赤松ノ族ナリ、一ヲ目代トシテ、此城ニ置ク、其ヨリ小寺四世相續ク處ニ、嘉吉ノ亂ニ、當主小寺景重モ滿祐ト同自殺ス、其後赤松家二十余年中絶ス、其間山名宗全當國ヲ領ス、應仁元年、兵部少輔政則再ヒ當國ヲ奪返シ、暫ク當城ニ居リ、其後文明元年、置鹽城

鷺山城

三方三座檜皮葺相論

大乘院座衆社中ニ入リテ自殺セントス

三方等分ノ議ニ決シ相論落著ス

ニ移リ、當城ハ舊例ニ任セ、小寺伊勢守ヲ置ク、

〔赤松諸家大系圖〕○三播磨播諸城交替連綿之記　飾東郡

赤松兵部少輔政則ト云有、山名宗全、嘉吉元年、當國ヲ領シ、長祿二年迄テ十八年、姫路城落亡タリ、應仁元丁亥年五月、姫路山鷺山ノ城營補、本丸間十八、横間十二、鶴見丸號二丸間廿八、横間三十、在住三年也、文明元年ヨリ置鹽城移リ、

十二日、甲戌、春日社立柱上棟、

〔經覺私要鈔〕六十六　十一月十二日甲戌、霽

今日春日社棟上□□□□□□□□云々、

抑檜皮葺一乘院座、大乘院座、寺衆三方三座在之、其內大乘院座依爲本長者宣□□□□□□以下支證非可子細明□□□□□□□□可根本之由□□□□□□□結構雖有種々謀計、支證之趣、自大乘院披露之間、面ニハ令屈伏了、以內儀於集會席取樣以下トテ、寺座可自專之由令一決之間、大乘院座衆乍持數通之支證、泥證文失面目之間、座衆之內少々走入社中、可生涯之由申之間、學侶六方令仰天、種々雖相誘、思定生涯之間不承諾、仍三方一乘院座、大乘院座、寺座、等分ニ可取之由相誘之間、以其分、只今事者、先以落居云々、始終之儀如何、

一、文安四年ニハ、左少弁(日野)勝光勅使之由載愚記了、今度之儀如何、可尋記、

(十三日)□□□乙亥

今日大乘院座葺□□□□□□□□□□□□□□支證持道理之處□□□□□□□□□給之由、寺門令欝忿破却云々、不便之次第也、依門跡之不背、匪啻泥支證、剩被破却屋內、云彼、云□□□□□□□時葺等生逢之條□□□□□□眼前之間□□□□□□□□□始終不蒙其罰哉、此條若無子細者、非儀無道者共可倍增之間、寺門上下不可無爲、一寺之滅亡不可廻踵者歟、

十四日丙子

番匠藤實男上棟餠少給之、千秋万歲之祝着也、可悅令仰付了、

〔大乘院日記目錄〕三　十一月十二日、春日立柱、上棟、檜皮葺相論事出來、珍事、新儀也、

〔興福寺略年代記〕應仁元年十一月十二日、上(春日)棟、

○是ヨリ先、春日社假殿遷宮ノコト、九月十八日ノ條ニ見エタリ、コノ後、正遷宮ノコト、本月十八日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

十四日、丙子、山城西岡近傍火ク、

〔後法興院政家記〕二　十一月十四日、丙子、晴陰、
（頭書）西岡邊燒了、
十八日、庚辰、晴陰、小雪散、西岡邊有火事云々、

〔附錄〕

〔經覺私要鈔〕六十六　十一月十六日戊寅、霽
楠葉入道語云、畠山右衞門佐一勢、大內□□□幡云々、用□□□□□□□□
□

十五日、丁丑、石清水放生會ヲ追行ス、

〔續史愚抄〕後土御門院上 三十九　十一月十五日丁丑、此日、被行石清水放生會、社家沙汰也、秘抄、親長卿記追、
○是ヨリ先、石清水放生會ヲ停メシコト、八月十五日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

幕府、長谷川清長ニ、武藏富久莊ヲ與フ、

〔古今消息集〕七
袖判 東山殿義政也、
武藏國富久庄事、所宛行長谷川中務少輔清長也、者守先例、可致沙汰之狀如件、
應仁元年十一月十五日

幕府、禁制ヲ長樂寺ニ揭グ、

〔和簡禮經〕上
慈照院殿御代
禁制　長樂寺
一、甲乙人等亂入狼藉事
一、寺內放飼牛馬事
一、剪取竹木事
右條々堅被停止訖、若有違犯之輩者、速可處嚴科之由所被仰出也、仍下知如件、
應仁元年十一月十五日　右京大夫源朝臣（細川勝元）判

十八日、庚辰、春日社正遷宮、

冬至
勅使坊城俊顯九月以來勅使奈良ニ滯在

〔千鳥文書〕○大和二
注當社造替幷臨時御遷宮人事、○中略
一、應仁元年十一月十八日正遷宮、 正預 延祐

〔經覺私要鈔〕六十六
十一月十八日庚辰、冬至也、
今日春日社上(正)遷宮也、勅使左中辨(坊城)俊顯云々、自去九月令在南者也、且依兵革天下觸穢之間、自京都下向不可叶之間、殿下以下御計ニテ、如此永々令在南者也、於煩一向自寺門沙汰也云々、爲向後煩以下可尋記、○勅使奈良滯在ノコト、九月十八日、下遷宮ノ條ニモ見エタリ、
廿六日壬子、齋
一、祭禮田樂頭□□□□□□□□□律師□□□□□□□□
□□□共奈良入云々、其內□三屋座俊□越智、高松、万歲一族云々、

〔大乘院日記目錄〕三
十一月十八日、春日正遷宮、

〔興福寺略年代記〕
應仁元年十一月十八日、(春日)正遷宮、
○是ヨリ先、春日社立柱上棟ノコト、十二日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

冬至ノ垂示

〔附錄〕
〔心宗禪師錄〕上
應仁元冬至之垂示 今日書雲令節、雪覆千山爲白銀闕、淨躶躶赤洒洒、明歷歷露堂堂、發揮靈鷲雄機、顯示少室密旨、恁麼事且置、陰向何處去、陽從何處來、諸人各自下一轉語、代云、一冬二冬叉手當胸、

十九日、辛巳、京都合戰アリ、

〔後法興院政家記〕二
十一月廿一日、癸未、晴、自一昨日京都有合戰云々、雖然無殊事云々、

〔附錄〕
〔經覺私要鈔〕六十六
十一月四日丙寅、旦雨
一、及夕、稗田矢負令下向申云々、自細川、山名ヲ責云々、不實事也、
九日辛未、齋
一、彥次郎男來、京都之儀淵底相尋畢、所詮無殊事云々、

二十六日、戊子、細川持久。大內政弘ノ兵、攝津中島ヲ侵サントスルヲ聞キ、和田備前守ニ命ジテ之ニ備ヘシム、尋デ、細川持賢モ亦、毛利豐元ヲシテ、兵ヲ出シテ赴キ禦ガシム、

細川持久
細川持賢

〔和田文書〕二
（上包）「和田備前守殿　持久」
大內勢近日攝州中島〻亂入之由聞候之間、兼者以飛脚申下候、國之用心一大事候、宿老之面々加談合、自然之儀出來候者、堅可被相支候、次就堺南庄事、兩守護代方より可申下候、努々不可有如在候、恐々謹言、
應仁元年
十一月廿六日　（細川）持久（花押）
（盛助カ）和田備前守殿

〔毛利文書〕九豐元樣御代二
就京都大篇事、被致參洛候之由承候、先以目出候、雖然大內勢令亂入攝州中島候之間、差下代官候、直令進發彼島候て、此方之儀預御合力候者、可令悦喜候、同自（細川勝元）右京大夫方以書狀令申候、此段自武（國信）田方も可被申候、恐々謹言、
（應仁元年ナルベシ）
十一月卅日　（細川持賢）道賢（花押）
毛利少輔太郎殿
○コノ後、豐元舟橋ニ戰フコト、十二月十一日ノ條ニ、政弘ノ兵、攝津諸郡ヲ攻略スルコト、二年正月二十四日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシ、

義政、近江伊香立莊ヲ青蓮院ニ還付シ、不動院顯豪ヲシテ、元ノ如ク之ヲ領セシム、
〔華頂要略〕門主傳二十二十一尊應准后　十一月廿六日、從將軍義政公御書到來、
（花押）慈照院殿判也、
青蓮院門跡領近江國伊香（滋賀郡）立庄事、所返付也、早不動院僧都顯豪如元令領知、可專公用之狀如件、
應仁元年十一月廿六日

二十七日、己丑、義政、土御門有宣ニ長日祈禱料所ヲ還付シ、元ノ如ク之ヲ領セシム、
〔土御門文書〕二
長日祈禱料所但馬國朝來郡東河庄幷衣摺村、播磨國河（川邊）𨕫北條領家、紀伊國鳴神領家、攝津國山田下司職、芹野公文職、美濃國津保下保、同國片方郡佐野鄉、平賀鄉等事、所返付也、早如元可全領知之狀如件、
應仁元年十一月廿七日　（義政）（花押）

刑部卿殿(土御門有宣)

祝ノ次第
髪置

二十八日、庚寅、義政ノ子義尚、髪置及ビ着袴ノ儀ヲ行フ、天皇、法皇劍ヲ賜リテ、之ヲ賀シ給フ、

〔後法興院政家記〕二十一月廿七日、己丑、晴、明日武家若公髪置幷着袴云々、武家若公髪置幷着袴事、爲禮自今日被遣太刀、

〔常德院殿御髪置記〕常德院殿御髪置次第

若君さま御祝記錄應仁元十一廿八雨降

應仁元年丁亥十一月廿八日庚寅

若君樣御祝次第

先御髪置未時、　御箸直申時、　御着袴同時、　御撫物出御身固、三位(土御門)在盛、刑部(土御門)卿有宣、

常御所於御琴之間有之、もり物百廿合、西方ニ(伊勢)被置之、

日野內府勝光、御樣御祗候、同兵庫助貞宗祗候、

御祝奉行飯尾大和守元連同斷候、

一、御髪置、御粉御所樣付まいらせらる、

若君樣御水干をめして、紅のうたおり物、御もんこうに鶴ひし、御扇よこめ龜のを御もちありて、六本さてふ御むあひあり、御吉方いぬゐ、

箸直

一、御箸直、御そ〻を御所樣まいらせらる、又御こわ御向ひあり、御所さは三つ御そ〻まいらせらる、

御配膳　烏丸弁殿、狩衣、

御手長　伊勢左京亮貞誠、大帷、

是まて行松調進也、

義尚禁裏仙洞ニ賜ヲ拜ス

御所さは御烏帽子直衣也、

禁裏、仙洞より御劍白まいる、仍若君樣召兩御所さはへ御參、御太刀白、御馬御進上、

着袴

一、御着袴、於常御所御直垂、御地白雲そく、御もんに松竹(のカ)を畫をめも、御所さは御腰を結まいらせらる、

上﨟一人　あちや上﨟、轉法輪三條殿(左)大臣(右)實量府御息女、

中﨟二人　左京大夫殿、新兵衞督殿、各御役人也、

式三獻　供御まいる、御ぽけの供御きこ〻めも、

御まいり肴五獻、大草調進之、
御手長 伊勢左(貞誠)京亮、伊勢下總守(貞牧)、伊勢右京亮(貞遠)、伊勢(七)一郎(貞還)左衞門尉、伊勢修理亮、

諸家太刀ヲ進ム

於十二間御太刀まいる、申次左京亮、下總守、

相伴衆

御相伴衆 畠山尾州政長、細川讚州成元(之)より佐々木大膳大夫入道重親(生観)、
御太刀持御馬進上、各不參也、
同上さはへ千疋宛、各進上之、

國守護

一、國守護御太刀糸卷、御馬、但不同也、
吉良殿御太刀、金伏(覆)輪、御馬、

番衆外樣頭人奉行

公家衆

番衆、外樣頭人奉行、雖為陣中、以祝儀各烏帽子上下可着用之由、被仰候て如斯、
公家、同禁裏、仙洞御方之祇候公家達、以上各太刀金伏輪進上之、
右兵衞督殿えゝめて若君さは御裝束まいらせらる、仍御太刀持被下之、
卽太刀金伏輪進上之、
役者各太刀金之重て進上之、

勝元ノ進物

右京大夫殿細川勝元より進上分、
御所さはへ 御太刀持 三千疋 御馬、

義尙ノ母日野氏ノ進物

若君さはへ 御太刀持 五千疋 御馬、
上さはへ 千疋、但自身ハ御不參也、
三御盃是より兵庫助申ふけ也、但以一獻料千疋、大草調進之、御肴三獻也、
進物
御太刀黑 腹卷黑革肩白 五重練貫 杉原、
御母より
五重上おり物、練貫二、御あや白二、 引合、
上さは
五重練、引合、
御母より
五重上りこうのおり物、紅御ぬい物、御そめ小袖、練り物二、 引合、
若君さは
式御引物、御白太刀ハゝり御前へ出、 五重練小御服、御平裂ニ入、 杉原、
御母より
五重上おり物、御ぬい物、御そめ小袖、ねり二、各小御服、御平裂ニ入、 引合、
三獻めよ進上、
御太刀持、御腰物國定、

義尙ヨリ父母ヘノ進物

上さ𛂦 御香合堆紅、 御盆剔紅、

若君さ𛂦 御太刀持、

此獻々御所さま御酌にて被下貞宗、其後上さ𛂦御酌にて同被下之、此時

御所さ𛂦をり御劔持、 上さ𛂦をり御服織物、

若君さ𛂦をり御劔持、御馬被下貞宗、

上さ𛂦をり御母へ御服被下云々、

若君樣をり御所さ𛂦へ、

御太刀白、 御鎧、 御馬參る、 是ハ各式御引物內なり、

上さ𛂦へ 段子一端赤、 御盃剔紅、 引合參る、

此兩種貞宗進之、

右兵衞督殿、烏丸弁殿（季光）よ各一重被下之、

今夜より供御式々ニ參る、供御方事、

小林新左衞門尉よ被仰付候、仍御太刀金之兩御所さ𛂦へ進上候、一重被下候、

夏阿 御太刀持進上之、

甘露寺親長

吉阿 御太刀糸卷進上之、

院宣ヲ下シテ、幕府ノ下知ニ任セ、山科言國ヲシテ山城山科東荘ヲ、小槻晴富ヲシテ泉涌寺領播磨香山保ヲ領知セシム、

〔案文消息集〕○京都

山城國山科東庄（宇治郡）內散在名田畠山野林等事、任武家下知之旨、爲一圓進止之地、可被全領知之旨、院宣所候也、仍執達如件、

應仁元年十一月廿八日　　按察使（甘露寺親長）（花押）

內藏頭殿（山科言國）

涌泉寺（泉涌）領播磨國香山保（完粟郡）付東方恒吉事、爲寄進御地之處、住持不候云々、然早令改易、可全知行之旨、任武家下知□□（之旨カ）領掌不可有相違候也、院御氣色所候也、悉之以狀、

應仁元年十一月廿八日　　按察使（花押）

新四位史殿（小槻晴富）

是月、千代松丸。國分定信ニ、出羽粟生田鄕ノ地ヲ與フ、

〔國分文書〕○陸前

（包紙）「十三世尚宗公護國院様御書」

出羽國寂上郡之内粟生田鄕之事渡之候、任先例可有知行之状如件、

文正二年十一月吉日　千代松丸（伊達尚宗カ）

國分河内守（定信）殿

十二月小癸巳朔盡

七日、己亥、東軍、大内政弘ノ船岡山ノ營ヲ攻メテ、之ヲ火ク、

〔後法興院政家記〕二　十二月七日己亥、天霽、京方兩三ヶ所有燒亡、有合戰歟、其後一向無其儀、

九日辛丑、天快晴、一昨日之火事、船岡陣屋被燒落云々、

○是ヨリ先、政弘ノ船岡山ニ陣セシコト、八月二十三日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

土佐守護代細川持益卒ス、子勝益嗣グ、

〔尊卑分脈〕九清和源氏　細川

滿益　土佐國守護代、三郎、遠江守、治部少輔、

持益　土佐國守護代、三郎、遠江守、民部少輔、法名常珍、應仁元十二、七死、四十九歲、○土佐考證系圖雜記ニ八、五十四トアリ、號觀音寺、

勝益　土佐國守護代、三郎、治部少輔、

〔土佐考證系圖雜記〕○細川角田系圖土佐群書類從三十八中所收

滿益　土佐國守護職、細川三郎、遠江守、治部少輔、常復、

（長男）持益　土佐國守護職、細川彥三郎、遠江守、民部少輔、常珍、應仁元丁亥十二月七日卒、行年五十四、觀音院、

應仁元年十二月七日

勝益、土佐國守護職、細川三郎、遠江守、民部少輔、常院、

九日、辛丑、院宣ヲ僧周藝ニ下シ、幕府ノ下知ニ任セ、寶福、龍泉兩寺住持職、山門大勸進職、竝ニ近江吉田鄕等ノ地ヲ知行スルヲ聽ス、

〔案文消息類〕○京都

寶福、龍泉兩寺住持職、幷山門大勸進職、近江國愛智郡吉田鄕(藤田)跡、同國河上庄(高島郡)地頭拾貳口、坂本(滋賀郡)三關四分壹等事、早任□□當知行之旨、可領掌之由、武家下知之由被聞食訖、不可有相違之旨、院御氣色所候也、悉之以狀、

應仁元年十二月九日　　按察使(甘露寺親長)(花押)

周藝上人御房

十一日、癸卯、東軍ノ將毛利豐元、西軍ト京都舟橋ニ戰フ、

〔毛利文書〕九豐元樣御代二

今日於舟橋御合戰、手負注文、

井上五郎(左)佐衞門　矢疵二ケ所、

廣(弘)彥四郎　矢疵一ケ所、

以上、

應仁元年十二月十一日　　毛利

承畢(勝元)(花押)

〔後法興院政家記〕二　十二月十六日、戊申、晴陰不定、此間京都有合戰云々、於勝負者無殊事云々、

○是ヨリ先、細川持賢。豐元ヲシテ兵ヲ出シテ、大內政弘ヲ防禦セシメシコト、十一月二十六日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

〔參考〕

〔山州名跡志〕十七　舟橋　云今出河通堀河橋、名義、古橋ノ西町ニ堂上舟橋家ノ第アリ、依テ號之云云、應仁ノ軍有此邊、載彼記、

十三日、乙巳、今川義忠。伊達藤四郎ニ偏諱ヲ與ヘテ、忠宗トイフ、

〔伊達文書〕○美作

名字

忠宗

應仁元年十二月十三日　　(今川義忠)治部大輔(花押)

伊達藤四郎殿